佐久間象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅱ）
－増訂版『象山全集』所収の象山門人帳「訂正及門録」の分析－

坂　本　保　富

はじめに　前承論文との関係と本稿の研究課題

謎に満ちた佐久間象山門人帳「及門録」を分析する意義

幕藩体制下で、なおも徳川幕府の支配体制が続く幕末期に、アジアの宗主国たる隣国の清朝中国が、英国に仕掛けられたアヘン戦争（1840－1842）で圧倒的な敗北を喫するという世界史的大事件が勃発した[1)]。戦争を仕掛けた英国の論理は、「勝者は正義」「正義は武力」という理不尽な覇権主義であった。それ故に、戦争の結果、中国側は、英国優位の不平等条約「南京条約」を結ばされ、実質上、植民地化されるに至ったのである[2)]。この世界が刮目した歴史的事件を契機に、徳川幕府は、欧米列強の軍事的脅威と国内の経済破綻による政治的混乱の狭間であえぎ、正に内憂外患に苦悩する激動の時代の幕開けとなった。はたして、今後、徳川幕藩体制はどうなるのか、否、幕藩体制の存続などという次元を超えて、日本という国家自体がどこに向かい、国民は如何に生きていくのか。欧米列強諸国は、東アジアの国々を強大な軍事力をもって恫喝し、その欧米列強の植民地獲得競争の荒波が日本にも及ぼうとしていた。悲惨な中国以上に、島国の小国・日本は、まさに風前の灯火であったのである。

かかる危機的な時代状況下にあって、激動する海外情勢を視野に入れて日本の危機管理の方策を現実問題として苦慮していた先駆的な思想家、例えば洋学を学び世界的視野で日本の危機対応を思案していた憂国の学者としては、高野長英

（1804－1850、仙台藩水沢領主の家臣の子息で、医者・蘭学者）、渡辺崋山（1793－1841、三河田原藩の家老、蘭学者・文人画家）、小関三英（1787－1839、出羽鶴岡の農家の二男、医者・蘭学者）などがおり[3]、さらに崋山と親交のあった佐久間象山（1811－1864、信州松代藩、儒学者で蘭学者、特に西洋砲術・西洋兵学に優れ門人多数）もそのような一人であった。幕末期と呼ばれる激動の時代に活躍する彼らは、欧米列強の外圧を抑えて、日本の独立と人民の安寧をはかるためには、洋学（西洋日進の科学技術や学問文化）を積極的に導入して殖産興業を推進し、貿易立国をもって彼ら欧米諸国に比肩しうる富国強兵の独立国家を建設すべく、日本の近代化＝西洋化を急ぎ推進すべしとする開国和親を説いたのである。

事実、彼らの門人など次世代を担った若者たちは、幕末維新期以降、開国和親の大志を抱いて積極的に西洋日進の学問文化を摂取し、中央・地方の様々な分野で日本近代化の一翼を担っていく。幕末期の先覚的な思想家として有名な佐久間象山の私塾に全国各地から集った門人たちもまた、そうした生き方を求め貫いた典型的な事例であった。

しかしながら、これまでは、佐久間象山の門人というと、一部の有名な門人だけが注目され評価されてきた。日本近代化の諸分野で地道に貢献した多くの門人たちが、歴史の舞台裏に埋もれて評価されることはなかったのである。例えば、その典型的事例が越後長岡藩の小林虎三郎（1828－1877）であった。彼は、作家の山本有三が昭和の戦時中に書いた戯曲『米百俵』（新潮社、昭和18年）の美談の主人公である。だが、それまでは全国レベルではもちろんのこと、地元長岡でさえも、戊辰戦争の英雄である河井継之助（1827－1868）の陰に隠れた無名な存在であった。山本の作品が発表されて以降、特に昭和戦後の敗戦からの復興期を迎えても、虎三郎は、戊辰戦争（慶応４－明治２、1868－1869）で灰燼と化した郷土長岡の復興は学校建設による人材育成こそが第一と教育立国思想を説いた美談「米百俵」（明治３年の歴史的出来事の美談化）の単なる主人公に過ぎなかった。「米百俵」の出来事の後、彼が、いまだ長岡復興が緒に就いたばかりの明治４年（1871）に上京し、国家レベルでの日本近代化に関わる様々な仕事を成し遂げた事実が[4]、歴史の奥深くに埋もれて知られてはいなかったからである。

だが、筆者は、「米百俵」の美談は、彼の生涯の活動の断片に過ぎないとみて、彼の生涯に亘る全ての日本近代化に関わる業績を解明すべく、膨大な関係史料を

徹底して渉猟し精査した。その結果、彼は、象山門人の中でも特に優れた学究人で、恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想を基調として東西両様の学問を修得し、明治以降における教育文化の領域を中心として日本近代化に関わる様々な活動を積極的に展開していたのである。その全貌を、初めて解明した筆者は、研究書『米百俵の歴史学』（学文社、2006年、A６判206頁）と『米百俵の主人公　小林虎三郎－日本近代化と佐久間象山門人の軌跡－』（学文社、2011年、Ａ５判420頁）の２冊にまとめて刊行した。筆者は、恩師象山の思想を継承し、それを明治以降の日本近代化過程に具現化して生きた門人の虎三郎を、遅まきながら日本近代史の表舞台に登場させたのである。平成30年（2018）９月には、中国（中日文化協会）の招聘を受け、孔子の誕生地で歴史遺産の豊かな山東省の名門大学・山東大学に招聘され[5]、記念講演「日本近代化の光と影」（ドイツ・中国・日本の比較近代化論）を行った。恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想を日本近代化に具現化した門人虎三郎の軌跡を、同じアジア諸国の近代化の有り様に活かしてほしかったからである。

なお、付記すべきは、アメリカ出身で著名な日本文化研究者のドナルド・キーン（Donald Lawrence Keene、1922－2019）が、平成10年（1998）に山本有三の戯曲『米百俵』を英訳した “One Hundred Sacks of Rice”（長岡市米百俵財団、1998）が刊行され、世界に紹介されたことである[6]。今や、象山門人の虎三郎は、中国その他の海外でも広く知られる日本歴史上の有名人となったのである。

だが、その虎三郎は、数多の象山門人の中の一人に過ぎない。他にも今なお無名のままの門人が多数、存在する。彼らは恩師象山の日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」の精神と最新の西洋知識を活かして、中央・地方の様々な分野で日本近代化に関わる先駆的あるいは開拓的な活動を展開したのである。日本近代化と共に生きた彼らの人生の軌跡を解明する「象山門人研究」は、象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想の普及拡大過程を解明する重要な研究の一環をなすものである。特に幕末期の門人帳の中でも、象山塾の場合は「及門録」と呼ばれる幾種類かの門人帳が公表されている[7]。

だが、いずれの門人帳も「原本」それ自体ではなく、象山の死後、門人たちによって関係史料を蒐集分析して原案を作成し、それに加筆や削除などの修正を加えて完成させたものとみてよいものである。それ故に、門人名と彼らの属性（帰

属する藩名や藩主名）に関する記述が符合せず、歴史的事実に違背する多くの誤謬に満ちた謎の多い門人帳なのである。

そこで筆者は、今から30年ほど前から、「及門録」に内在する謎の解明に挑み、様々な誤謬を分析し、可能な限り真実（実態）に近い信頼性の高い最新の訂正版「及門録」の作成を試みてきたのである[8]。象山門人帳と言われる「及門録」は、判明しているだけでも５種類存在する[9]。各々の「及門録」には400名を超える象山門人の氏名が記録されている。それら「及門録」を、一冊ずつ内容分析すると共に、他の「及門録」あるいは現存する５種類全体の記述内容を総合的に比較校合して、各冊の記述における誤謬を解明し、①最終的にはどの「及門録」が相対的にみて最も精度の高いものであるかの判定、②全ての「及門録」を総合的に比較検討して誤謬を最少限度に訂正した信頼性の高い最新版「及門録」を新たに作成し、象山門人の研究史料として安心して使用される門人帳に仕上げること、これらの問題解決が本稿のめざす研究課題なのである。

先に本研究の（Ⅰ）として本誌前号で発表した拙稿では[10]、①象山門人に関する井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」（大正３、1914）と、②宮本仲著『佐久間象山』（岩波書店、1932）所収の「及門録」を取り上げ、それらの内容を詳細に分析して、象山門人帳史料「及門録」の信憑性の如何を検証した。井上論文の功績は、彼が手にした「及門録」を分析し、そこに記された象山門人たちが、西洋砲術の門人だけではなく、儒学や洋学その他の門人が同時に存在したことや、井上のよく知る象山門人をはじめ、記載されていない象山門人が他にも多数、存在することの事実を指摘した点である。また宮本は、「及門録」に記載された400名を超える象山門人の全貌を初めて活版印刷で紹介した。その功績は非常に大きいものと評することができる。

また、宮本仲の研究書『佐久間象山』に収められた「及門録」で、400名を超える象山門人全員の個人名が、彼らの属性（藩名や藩主名、入門年月その他）と共に初めて明記された内容であったことは、象山研究上、実に画期的な成果であった。しかしながら、筆者は、その宮本版「及門録」の内容を詳細に分析して吟味してみると、そこには想像を超える数多の誤謬が認められるという事実を明らかにしたのである。

実は、宮本の研究は、象山門人を確定し、彼らの活動内容を解明しようとする

場合、他の「及門録」と比較してみると、記載内容が非常に曖昧で誤謬が多いのである。象山門人帳史料と言われる「及門録」は、他に類をみない門人特定の非常に困難な私塾門人帳史料の典型的事例と考えられる。だが、それでもなお筆者は、現在、判明しているだけでも数種類ある「及門録」それぞれに内在する様々な問題点を解明し、それらを比較分析して整理統合し可能な限り修正した信頼性の高い「及門録」を作成すべきであると考えるのである。

叙上のような研究の意図と課題をもった本稿は、現在、複数冊ある象山門人帳史料「及門録」の中で、信濃教育会が昭和の戦前に総力を挙げて誤謬を訂正して編纂した、最も信頼性の高い「及門録」とみられる増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」（唯一、「訂正」を冠した「及門録」）の内容分析と問題析出とに挑んだ研究成果なのである。

前承の拙論に連続する「及門録」の作為性の解明－「原本不在」の論証が本稿の研究課題

前述のごとく、筆者は、前述の拙稿「佐久間象山門人の確定に関する先行研究の検討（Ⅰ）－井上哲次郎・宮本仲の紹介した『及門録』の分析－」において、管見の限りでは、最初に「及門録」の存在に着目し、その概要を論文にまとめて発表した井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」の内容を詳細に分析し、その要点と特徴ないしは問題点を明らかにした。次いで宮本仲が公表した「及門録」を、井上論文の内容を踏まえて分析し問題点を解明した。すなわち、当時、象山研究の第一人者であった宮本が、長年の研究成果をまとめた研究書『佐久間象山』に収めた「及門録」を取り上げ、そこに記載された400名を超える象山門人が、真に象山門人であるか否か、彼らの氏名・藩名・主君名などに関する記載内容の妥当性の有無などを検証し、歴史的事実と校合して真偽を分析したのである。

叙上の第１弾目の拙稿に連続する第２弾目の論文となる本研究では、明治初期における近代教育の発足直後から天下に名だたる高就学率を誇る教育県「信州教育」を形成してきた教育職能団体「信濃教育会」（明治19年、1886年設立）が、県歌「信濃の国」に歌われ、信州人の名誉とされる歴史的偉人の佐久間象山に関する最初の『象山全集』（上下２巻、信濃毎日新聞刊行）を、大正３年（1914）

に刊行するに至った経緯を明らかにする。だが、その全集には、井上哲次郎が、期待した門人帳史料「及門録」それ自体が収められてはいなかったのである。井上に限らず、関係者にとっては、誠に残念なことであった。それ故に、名誉挽回の意味を込めて、信濃教育会は、最初の全集に収録できなかった史料や新発見の象山関係史料を大幅に増補した再度の『象山全集』（全５巻）を編纂・刊行するという大事業の敢行を、昭和６年（1931）に決定するのである。しかも、新規の全集を編纂する布陣には、前記の編輯委員であった飯島忠夫（学習院教授）や宮本仲（医者で象山研究者）など信州出身の象山研究者を据え、さらに信濃教育会の会長である佐藤寅太郎（1866－1943）や編纂主任に抜擢された三井圓二郎（1870－1937）など、信濃教育会挙げての有能な教員を編纂委員に委嘱したのである[11]。

かくして信濃教育会は、３年余りの編纂期間を費やして、最初の象山全集（全２巻）を刊行してから21年後の昭和９年（1934）に増訂版『象山全集』（全５巻、以下、増訂版『象山全集』と略記）の刊行を開始し、翌年６月に第５巻が刊行されて完了する。この大著５巻という膨大な分量の増訂版『象山全集』には、象山門人帳史料「及門録」が、最終刊の第５巻に「訂正　及門録」（以後、「訂正及門録」と表記）と題して収められていたのである。

だが、これまで述べてきたように、「及門録」の「原本」は根本的に存在しないと考えられるが故に、増補改訂版に収められた「及門録」という史料名に「訂正」という２文字が全集編纂委員会によって冠せられていること自体、「及門録」が作為的史料（作品）であることを物語る証左であり、歴史的事実を直接に表現しない「二次史料」であることを意味している。はたして信濃教育会の全集編纂委員会は、何故に「訂正」の２文字を付した史料名にしたのか。実は全集編纂委員会は、「訂正」の意味を問われることを予見して、「訂正」を付すに至った編纂経緯の説明文を、全集に「及門録」を掲載する際の冒頭に付記していたのである。

その「説明文」には、原本は所在不明であること、幾つもの写本が流布していること、写本には誤謬が頗る多いこと、それ故に最初に刊行した『象山全集』には収めることができなかったこと、等々の説明がなされている。しかしながら、井上哲次郎の論文が世に出て以来、例えそれが写本の紹介ではあっても、佐久間象山の門人帳「及門録」が存在するという幻想を与え、一般人の歴史的関心はも

ちろん、象山研究における「及門録」に対する関心を喚起するに至った、ということである。このような象山門人を知りたいと思う関心の強さを察知した信濃教育会は、この問題を封印することはできず、最初の全集刊行以来、各種の象山関係史料を蒐集・分析して、事実に反する誤謬を析出し訂正する作業を続けていたのである。そのような初版の編纂委員や関係者たちの努力の成果が、増訂版全集の刊行を決定し、問題の象山門人帳史料「及門録」も収録可能な質的レベルの史料にまで「訂正」することができたという判断の結果、とみることができる。

なお、象山門人の北澤正誠（天保11－明治34、1840－1901）が生前所蔵していたという「及門録」（毛筆写本版）は、正誠の死後、彼の親族が象山関係史料をまとめて京都帝国大学附属図書館に譲渡していたという[12]。実は再度の全集刊行を担った編纂委員会は、その中に含まれていた毛筆写本版「及門録」を京都帝国大学附属図書館から借り受け、それを増訂版に収録予定の「底本」とする「及門録」（写本の一種）と校合して、更なる修正を加えたのである。このように編纂委員会は、可能な限りの関係史料と比較校合して作成した原案の「及門録」に、さらに朱筆の追記や墨筆の削除を重ねて、可能な限り事実に近い内容の象山門人帳史料「及門録」に修正しようと最善の努力を惜しまなかったはずである。

だが、如何に慎重極まる訂正を加えたとは言っても、「訂正及門録」それ自体が「本物（実物）」ではなく、あくまでも門人たちが恩師象山の没後に作成した「及門録」の「訂正版」（写本）の一つであることは否定しようがない。それ故に全集編纂委員会の注釈には、さらに重大な問題点の指摘がなされていたのである。即ち、「なお不明の箇所も存し未だ完璧を期し難」く、象山門人の概要を知るには有効ではあるが、「及門録」に記載の西洋砲術塾名簿の他に、江戸で最初に開いた漢学塾「象山書院（玉池書院）」の門人録が含まれていないなど、象山門人の全体からみれば質量共に極めて不完全で、なおも数々の誤謬を含む問題の多い「門人帳」であることを明記しているのである[13]。

ところで、増訂版『象山全集』に収録された「訂正及門録」も、前述のごとく基本的には「写本の訂正版」、すなわち「二次史料」であることに変わりはない。そのように考えた筆者は、そもそも「写本の基」となった「原本」（象山存命中に入門者各個が自署した門人帳）は存在しないのではないかという仮説に立って、その信憑性の有無を前承の拙稿から一貫して関係史料の分析と考察を通して論証

しようと努めてきた。その結果、筆者の「原本不在」という仮説は、象山門人帳史料「及門録」の存在を否定しうる史料的根拠のある立証可能な見解として首肯されうるものではないか、との結論に至った次第である。

さらに、増訂版『象山全集』に「訂正及門録」が収録された事実に関連して、次のような論理的説明を加えれば、更に「原本不在」の仮説は補強されることになる。そのために注目すべき重要なポイントは、京都帝国大学附属図書館に「及門録」の「写本」が譲渡された時期の問題である。それは、象山関係史料を所蔵していた象山門人の北澤正誠が他界した後のこと、即ち明治34年（1901）４月以降のことと考えられる[14]。さすれば、京都帝国大学附属図書館が所蔵する「及門録」の「写本」そのものは、いつ、だれが、どこで、作成したものであるのか。この点に関しては、すでに別の拙稿で詳細に検討したが[15]、結論的に言えば、とても北澤一人で作成できる作品ではないということである。象山の恩師筋の江川坦庵や下曽根信敦など他の西洋砲術家たちは、野外での砲術調練の度に、その日の練練内容と参加門人の名簿を作成し、その後、それらを総合した入門者全体の門人録を作成していたのである[16]。

一般に幕末期の私塾における門人全体を記録した「門人帳」は入門者自身が入門時に自署した史料である場合が多い。だが、塾主の意志で、塾主自身あるいは側近の門人が整理して書写している場合も多かった。例えば下曽根信敦の西洋砲術塾門人名簿は、初期の入門者で側近の門人であった土佐藩の徳弘孝蔵（董斎、1807－1881）が整理しまとめていたのである[17]。

ところが象山塾の場合は、①次々と新たな難題に立ち向かって東奔西走していた象山自身にとっては、刻一刻と変動する幕末動乱の時代に、過去の思索や行動を振り返って門人名簿を整理整頓する時間的余裕がもてなかったこと、②長年の蟄居生活から解放後の晩年、休む間もなく幕命を受けて決死の覚悟で上洛するが、その数ヶ月後には斬殺されるという不幸に遭遇し、西洋砲術教授を含めた自己の教育的半生をまとめる時間的余裕が断ち切れたこと、等々の不可避的な事情の故に、吉田松陰の海外密航事件に連座して幕府に捕縛される安政元年（1854）４月までの砲術練練記録の全体をまとめる余裕はなかったとみてよい。しかも、③全ての写本版「及門録」の内容全体を構成している「砲術練練記録」の史料数は僅か２件（嘉永６年６月分と安政元年正月分）と極めて少なく[18]、しかも「及門録」

の記載者の圧倒的多数を占める構成要員は、全てが西洋砲術の門人とは認めがたいものである[19]。④総じて象山門人帳史料と言われる「及門録」の記載門人名簿の全体を構成する門人の記録は、全てが西洋砲術の門人とは言えず、井上哲次郎が指摘したごとく、儒学や洋学、医学など他の学問技芸を学ぶ門人が含まれていたことは事実である[20]。

以上の諸点を総合して「及門録」の記述内容の真偽を詳細に吟味すると、確かに「及門録」は象山門人名を記した門人帳史料ではある。だが、それを象山の「西洋砲術門人名簿」と呼ぶには無理がある。そもそも「及門録」の記載対象となっている期間の問題であるが、それは天保10年（1839）６月に多芸多才な象山が、２度目の江戸遊学時に神田阿玉池に儒学の私塾「玉池書院（五柳精舎）」を開設して教育活動を開始して以来、安政元年（1854）４月に松陰の海外密航事件に連座して捕縛され地元蟄居を命じられるが、その松代蟄居時代にも新たな入門者がおり教授活動はなされていたのである（「閉居中責ての御奉公と存し候其内には小弟の教授候所を執心候て新入を乞ひ候ものも有之候」、増訂版『象山全集』第４巻、安政２年８月20日、「門人高田幾太宛書簡」363頁）。

そして蟄居赦免となるのは８年後の文久２年（1862）12月のことであった。しかし、その１年有余の後の元治元年（1864）には、上洛の幕命を受けて、門人たちが随行して京都に上る。だが、不幸にも、その数ヶ月後の元治元年７月には、京の市中で攘夷派の刺客によって惨殺され、不幸な最期を遂げるのである。

したがって「及門録」が記載対象としている期間は、可能性としては象山が教育活動を開始してから最期を迎えるまでの25年間に亘る多種多様な教育活動の期間を考えることができる。したがって「及門録」は、その間に象山から教授を受けた膨大な門人のほんの一部を整理し記録した門人名簿、とみることも内容的には妥当である。もちろん、長期間に亘る門人の把握には史料的な制約があって、象山の長い教育活動で学恩を受けた門人全員を記載することは叶わなかった。それ故に「及門録」の編纂に関する基本的な原則は、象山が嘉永２年（1849）に松代藩邸で西洋砲術・西洋兵学の教授活動を開始してから松陰密航事件に連座して捕縛される安政元年（1854）までの約６年間が主体となった門人帳ということに限定せざるをえなかった。

したがって「及門録」は、ある一定期間における多様な門人の全体の一部であ

ることに間違いはない。このように様々な矛盾や問題を内在する謎に満ちた「及門録」は、象山の教育活動全体のほんの一部を物語る門人名簿、という基本的理解に立脚して理解され活用されるべき史料であり、それは正に歴史的な作為史料（象山没後の明治期に代表的な門人たちが作成した象山門人録、換言すると後日に過去を再現あるいは復元する意図をもって作成された二次史料）であると理解するのが妥当である。

井上哲次郎論文「及門録」と象山門人北澤正誠旧蔵（京都大学所蔵）の「及門録」とは別物

井上哲次郎は、実際に「及門録」の写本を具に手にして、その内容を分析して論文「佐久間象山及門録に就いて」を執筆・公表した。それは大正３年（1914）11月のことであった。筆者は、管見の限りでは、この井上論文よりも前に、象山門人帳「及門録」の内容を示す論文や著書などの史料が存在することを全く知らなかった。井上論文こそが、筆者に「及門録」の存在を教えてくれた最初の史料だったのである。その井上が、写本の「及門録」を実際に手にしたのは、論文を発表した大正３年（1914）のことと推定される。はたして、その「及門録」は象山門人の北澤正誠が所蔵していた写本であるのか。否、そうは考えられない。というのは、井上自身が「近頃或人が佐久間象山の『及門録』といふものを持つて来て吾吾に見せましたから、早速それを繙閲して見ました」[21]と述べているように、当時、普及していた幾種類かの「及門録」の「写本」の一種を入手し所蔵していた井上の知人が、それを井上邸に持参してみせたということである。したがって、この事実を時系列でみても、井上が大正３年（1914）にみた「及門録」は、北澤没後の明治34年（1901）２月以降に親族が京都帝国大学に譲渡した象山史料一式に含まれていた「及門録」ではない[22]、ということになる。京都帝国大学の附属図書館に収められた図書や史料は厳重に保管され自由に持ち出すことはできなかったはずだからである。内容的にも井上がみた「及門録」と京都帝国大学附属図書館のそれとは、記載された門人数が大きく異なり、門人名その他でも相違点が多数認められる。すなわち門人名で比較すれば、前者は409名で、後者は469名、両者の間には60名もの門人数の相違がある。したがって井上の論文執筆の契機となった「及門録」と、象山門人の北澤が所持し親族が京都帝国大学に譲渡し

た「及門録」とは全く別物の「及門録」であった、とみなければならない。

なぜ「及門録」が最初の『象山全集』に収められなかったのか

一体、何故に信濃教育会は、大正２年（1913）に刊行した初版『象山全集』（上下２巻）に「及門録」を収めることができなかったのか。その理由を、再版の増訂版『象山全集』に「訂正及門録」を収めた編纂委員会が、「訂正及門録」の冒頭で勇気ある説明をしている。即ち、「及門録の原本は所在明ならず。流布の写本は誤謬頗る多く、前回に於てはこれを原稿とするに堪へざりし」と。そこにおいて、「及門録の原本は所在明ならず」と説明されているが、はたして「所在不明」とは、「存在するがその所在が判明しない」との意味か、それとも「原本そのものは存在せず」との意味なのか。多分、前者を意図した表現と思われるが判然としない。

筆者は、これまでの研究で、「及門録」の「原本」は存在せずとの仮説の下に、「及門録」、即ち象山門人帳の研究を進めてきた。すなわち「及門録」とは、象山没後、具体的な時期は特定できないが、幕末維新期の動乱が収まった明治期に入って、生存していた門人たちが象山関係史料の中の門人関係史料を抽出して繋ぎ合わせて原版を作成し、さらに、生存していた門人たちが、かつての象山塾同門の朋友に関する史料や記憶を呼び覚まして門人帳の隙間を埋め、さらに追加蒐集した史料や証言などで加筆や削除を重ね、可能な限り誤謬の訂正作業を繰り返すなどした努力の成果、それが「及門録」の誕生であったのではないか。そう仮説として推察することができる。そのような作成経緯の理解に立脚すれば「及門録」に内在する様々な問題とその発生要因について論理的に整合性のある説明をすることができるのである。

それにも拘わらず、増訂版『象山全集』に収録された「訂正及門録」に関して内容的な吟味の必要性が生じる原因とは何か。象山没後150年が経過した今日なお、象山門人の全体像が全く不明で、今なお象山門人であるか否かの判断不能な人物が数多く存在する。その疑問を解明し、真実を明らかにしなければならない。紛う方なく正真正銘の象山門人たちは、内憂外患に揺れる幕末期の激動期に、そして明治維新以降の文明開化の時代に、恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想を日本近代化の各方面で具現化すべく、どこで、どのような活動を具体的に展開

したのか。これまで、数多くの象山関係の著書・論文が産出されてきたが、「日本近代化と象山門人たちの軌跡」という観点からの実態解明はなされてこなかった。即ち、時代が大きく転換する幕末激動の時代に、医学系洋学教育に尽力した緒方洪庵（1810－18963、大阪で蘭医学塾「適々斎塾」（通称、適塾）を開設）や伊東玄朴（1801－1871、江戸で蘭医学塾「象先堂」を開設）、あるいは語学系洋学教育に貢献した大槻玄沢（1757－1827、江戸で蘭学塾「芝蘭堂」を主宰）や福澤諭吉（1835－1901、江戸で英学塾の慶應義塾を開設）、さらには幕末期特有の軍事科学系洋学教育を通して人材育成に貢献した江川坦庵（1801－1855、「西洋砲術の祖」である高島秋帆門人）や下曽根信敦（金三郎、1806－1874、高島門人）などは、各自の塾教育の展開の時系列に即応した形で入門者名簿を残しているのである。

だが、軍事科学系洋学の専門塾とみられる私塾教育を実践して多くの人材を育成した佐久間象山の場合は、これからが本領発揮という50代半ばに尊皇攘夷派の刺客に斬殺され、彼の教育活動を物語る門人名簿の存在が今日まで全く不明であった。それ故に、幕末期の歴史研究、特に幕末期の洋学史・科学史・医学史・政治史・軍事史・教育史などの研究分野において、彼の教育活動の全体ではなく、限定された数年間の門人名を記した頗る誤謬の多い門人帳史料「訂正及門録」を、あたかも象山門人帳の「原本」と思い込み、そこに記載された門人たちの行動分析や全国分布などの実態解明を試み、もって幕末期における洋学普及の事例研究としたり、あるいは洋学理解の有り様とその利用状況の解明を通して日本近代化の研究を進めようとしてきた。しかも、驚くべきことは、前述のように事実と異なる誤謬の多い史料を用いた研究状況が、「訂正及門録」が公表された昭和の戦前から現在に至る80年以上も続いてきていることである。

筆者は、そのような誤謬に満ちた象山の門人名簿「訂正及門録」の誤れる理解と使用を黙認することはできず、象山思想「東洋道徳・西洋芸術」研究の基礎的研究として、今から30数年前から「及門録」の研究をはじめ、そこに記載された人物が象山門人であるか否かの事実の、史料的な裏付けを伴う確認作業（恩師の象山側の史料分析と門人側の史料分析）を進め、同時に記載されずに埋もれたままの象山門人の発掘（象山側史料からの発見と門人側史料からの判明）にも努めてきた。

これまで象山に関する研究成果は、著書や論文などで公表してきたが[23]、本研究は、象山没後の明治以降に象山門人名簿の「原本」との触れ込みで流布してきた「及門録」という史料が、象山に関心を抱いていた東京帝国大学の哲学教授であった井上哲次郎（1856－1944）の目にとまったという事実に着目した成果なのである。前述のごとく、井上は、当該史料を精査・分析して論文にまとめて公表した（論文「佐久間象山及門録に就いて」は『東洋学芸雑誌』第31巻第398号所収、1914年11月）。その論文で彼は、「及門録」からみた象山門人の概要を簡潔明瞭に説明し、同時に同史料の問題点をも的確に指摘したのである。この井上論文によって、象山の出身地である信州をはじめとする全国各地の歴史愛好家や研究者たちが、ある一定期間における門人との限定条件があるとはいえ、象山門人の具体的な人物名を知ることができたとすれば、それは井上論文の功績と言えるであろう。

さらに象山と同じ松代藩の武家の出身で、祖父母の代から象山と親交の深かった縁から、象山を人生と学問の両面で師と敬仰する宮本仲（1856－1936）が、東京帝国大学医学部を卒業後、ドイツ留学で最新の西洋医学（中心は小児科学）を修めながらも、帰国後は東京神田に個人医院を開業して臨床医学に専念する。なぜ彼は、実弟（宮本淑、1867－1919、東京帝国大学医学部教授）や子息（宮本璋、1897－1973、東京帝国大学助教授、東京医科歯科大学教授）のように大学等の研究機関に奉職し研究者として生きなかったのか。素朴な疑問である。だが、彼にしてみれば、生涯をかけて専念したかったのは、佐久間象山研究だったのである。それ故に彼は、医業の合間の寸暇を惜しんで象山史料を蒐集し象山研究に取り組んだのである。その長年に亘る研究成果をまとめたものが、彼の大著『佐久間象山』（岩波書店、昭和７年、1932）であった。驚くべきは、同書には、問題の「及門録」の全文が初めて活字化されて収録されたことである。当時においては名実共に象山研究の第一人者と評される宮本は、信濃教育会が、編纂・刊行した最初の『象山全集』（大正２、1913）には編纂顧問として参画し、象山史料の解読をはじめ編纂上の難問に対して大所高所から判断し応答して、編纂委員会の中心的役割をはたしたことは想像に難くない。

その宮本が、自著『佐久間象山』を通して所蔵する「及門録」の内容を全面公表したのは、井上論文の発表から20年も後のことであった。それは、「及門録」

なき『象山全集』の編纂に関わった宮本自身の悔恨の情、あるいは懺悔の所作でもあったのか。真意の程は分からない。宮本が自著で公表した「及門録」は、井上が論文で紹介した「及門録」とは全く別物の「及門録」と判別でき、門人数、門人名、帰属する藩名や主君名などの諸点において、宮本が独自に入手した「及門録」に自らの長年に亘る研究成果をもって数々の修正が加えられた門人帳であった。

以上は、先に発表した拙稿「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）－井上論文・宮本版「及門録」の分析－」における問題発見とそれらの問題解決への概要と本稿に引き継がれた研究課題である。叙上の研究成果を踏まえて、「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅱ）」と題する本稿では、次のような問題の解明を直接的な研究課題としている。

増補修正された「訂正及門録」の編纂・刊行に至る経緯

宮本が「及門録」の全文を収録した自著『佐久間象山』を出版する前年（昭和6、1931年）に、信濃教育会は、再度、初版を大幅に増補改訂した全5巻の大著『象山全集』の刊行を決定し、宮本を含む編纂関係者を委嘱したのである。その理由を、信濃教育会は、「増訂象山全集編纂経過」と題して次の如く記している（史料中の句読点は筆者による。以降の引用史料の場合も同様）。

> 象山全集前半は大正二年十月の象山先生五十年祭を期し、程をいそぎ十五箇月の短期を以て製本を了せしがため、原稿の吟味印刷の校合等に遺憾の点なきこと能はざりき。爾来二十年、先生に対する世の崇敬は愈高まり、全集の需用も加はり来れると共に、一方内容の増補すべきもの丶出現とにより、本会は新に増補訂正をなさんことを企画、昭和六年四月以来、左記委員を委嘱せり。[24]

信濃教育会が再度の増訂版『象山全集』（全5巻）の刊行を決定したのは、上記の通り、先に出版した全集に、①「原稿の吟味印刷の校合等に遺憾の点」が多く、②「内容の増補すべきもの丶出現」したが故に、増補改訂した全集を刊行する必要性があったこと、等々が理由である。だが、そこでは、肝心の象山門人帳

史料「及門録」が収められていなかった点については全く触れられていなかった。しかし、実は、この点こそが、信州全土の教育関係者（教育職員や教育行政関係者）で構成される長野県教育職能団体（教育研究団体）である「信濃教育会」の会員諸氏や全国の象山研究者などから疑問視されてきた所であり、新たに増訂版を編纂し刊行するに際しては、この疑問や期待に応えなければならない責務を負っていたことは容易に推察できる。

それ故に、多種多様な誤謬（毛筆書写史料「及門録」の誤読・誤記・誤解など）が多く存在し、歴史的事実から乖離した問題点の多い「及門録」が野放図に普及することを危惧し、象山研究者の集団である編纂委員たちが、宮本版や京大版その他の「及門録」や関係史料などを慎重に比較校合し、多くの加筆や削除などの修正を加えた再生版とも言うべき「訂正及門録」を作成し、他の増補すべき各種史料と共に増訂版『象山全集』に収載することとなったのである。

編纂に着手してから３年数ヶ月が経過した昭和９年（1934）７月、第１巻から順次、刊行が開始され、翌年の昭和10年（1935）６月に最終刊の第５巻が刊行され、新生の増訂版『象山全集』の出版は完了した。その第５巻に収録された肝心の「及門録」は、「訂正」の２文字を冠して「訂正及門録」と命名されたのである。

かくして天下の信濃教育会から、注目すべき象山門人史料「訂正及門録」が公表されたのである。だが、これ以降の歴史研究の世界では、この「訂正及門録」が、あたかも象山門人帳の「原本」であるかのごとくに捉えられ、何の疑念も抱かれずに使用されるという不幸な運命を辿ることとなり、その弊害は現在にまでも至っている。だが、その「訂正及門録」の「訂正」の内容を詳細に析出し吟味してみれば、それが「原本」そのものではないが故に、象山研究者集団である編纂委員会の委員諸氏が全力を傾注して校訂作業を担い、加筆や削除などの修正作業を重ねて作成された史料であることが理解できる。いかに修正を重ねても、努力の成果である「訂正及門録」が誤り一つなき完全無欠の象山門人帳でありうるはずはない。よくよく留意して同史料を吟味してみれば、同一人物の重出や三重出、帰属する藩名や藩主名の誤解、門人名の誤記、等々、可能な限りの「訂正」を施したにも拘わらず、なおも様々な問題点を内在する不明朗な史料であることに気づくはずである。

叙上のような問題状況の中で作成され公表された「訂正及門録」が、なおも多くの矛盾点や問題点を含み、学術的世界においては信頼性に欠ける作為的史料（二次史料）であることの事実に鑑み、以下の本稿では、具体的に矛盾点や問題点を析出し、どこがどう誤れるのか、を解明する。その場合の方法論としては、この「訂正及門録」が編纂されて刊行される前に公表されていた宮本版「及門録」の内容と全文を逐条的に比較校合し、また、すでに筆者が研究論文として公表済みの京大版「及門録」その他の門人関係史料の研究成果をも総合的に勘案して、増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」における内容の誤謬を徹底的に析出し、今後の研究課題として「どこをどう修正すべきか」をも具体的に提示したい。以上の盛沢山の問題解明が、本稿に課せられた研究課題である。

「訂正及門録」を全く無批判に「原本」として用いた研究者たち

多くの問題点を含んだ「訂正及門録」が不完全な史料であることは、編纂・刊行した信濃教育会自身が勇気を振るって明記するに至ったにもかかわらず、同史料を使用してきた多くの研究者の誰一人として問題の多い史料であることを検証して使用した人はいなかった。彼らは、使用に際しての「注釈文」を無視し、矛盾に満ちた史料を鵜呑みにして、同史料に記録された誤謬の多い表記内容を分析して著書や論文を書いてきたのである。それは研究者としての基本精神である史料批判（使用する史料の正当性、妥当性の検討）の欠如であり、研究者としての怠慢以外の何物でもない。叙上のような、「訂正及門録」を象山門人帳の「原本」であるかのごとく無批判に使用した代表的な研究書を挙げると次のごとくである。

①板沢武雄『日蘭交渉史の研究』（吉川弘文館、1959年）
②佐藤昌介『洋学史論考』（思文閣出版、1993年）
③海原　徹『近世私塾の研究』（思文閣出版、1983年）

まず①の日蘭学会の重鎮であった板沢武雄（1895－1962）の『日蘭交渉史の研究』は、わが国における日蘭交渉史研究の先駆的な業績で、法政大学より文学博士の学位を授与された専門研究書である。同書において板沢は「蘭学塾の入門帳その他」の中で伊藤玄朴「象先堂」の「門人姓名録」、緒方洪庵「適々斎塾」の

「姓名録」と並んで佐久間象山の門人録を挙げ、「増訂象山全集第五には『及門録』四六四人」が記録されていると紹介している[25]。この板沢の研究者らしからぬ不用意な叙述の第一は、「増訂象山全集第五」が出典であるならば門人録の正式名称は「訂正及門録」と記載されるべきであること、しかも同名簿に記載された門人総数は「四六四人」ではなく「四五三人」であること（同一門人名の二重記載や三重記載の問題には一切触れず、したがって門人数の減数はない）、等々が歴史史料の引用における誤謬として問題とならざるをえない。板沢の場合で最も問題となるのは、同氏は増訂版『象山全集』第５巻所収の象山門人帳史料「訂正及門録」をみられていることは確かであるが、さすればその「訂正及門録」が門人帳の「原本」ではなく、諸種の写本や関係史料と校合して「底本」（写本史料）の誤りを「訂正」して作成された経緯が詳細に記述された「注釈文」が掲載史料「訂正及門録」の冒頭に付されており、これを意図的に無視して使用されたならば問題である、ということである。だが、「訂正及門録」の現物をみているならば、その冒頭に掲げられた「訂正及門録」の作成経緯と史料的限界についての編纂委員会の「注釈文」を看過されるはずはない。いずれにしても象山門人帳史料「訂正及門録」の引用に関して、板沢氏の取り扱いは安易であったといわざるをえない。

次に佐藤昌介（1918－1997）の『洋学史論考』（思文閣出版、1993年）であるが、同氏の佐久間象山門人帳に関する紹介文は次の通りである。

> 江川・下曽根の両者にまなんで一派をたてた佐久間象山の①門人帳（及門録）が伝えられているので、これをあげよう。②それは嘉永二年（一八四九）から同五年（一八五二）までの、四年間にかぎられているが、③総数は一四三名で、④所属は幕府を別とすれば、四十三藩におよぶ。なかでも最も多いのは⑤中津藩の八十三名で、これにつぐのは⑥松代藩の三十二名である。象山の所属藩にしては以外にすくない感じがしないでもない（理由は後述）。つぎに幕臣（陪臣も含む）が二十名おり、これにつぐのは⑦佐倉藩の八名、⑧津藩の六名、⑨津山藩の五名、以下は省略するが、⑩一、二名の藩が圧倒的に多い。⑪嘉永年間までの段階では、藩自体としてよりは、藩士が個人として西洋砲術をまなぶケースが多かったのではないかと思われる。ただし、

少数ではあるが、藩自体が高島流砲術を導入した例もいくつかみられる（後述）。[26]

上記の佐藤昌介『洋学史論考』における佐久間象山門人帳史料「及門録」の理解と使用がいかに誤謬に満ちたものであるか、以下に証明してみたい。①「佐久間象山の門人帳」を「及門録」と記載しているが、これは前述の板沢の場合と同様に、増訂版『象山全集』に収められた「及門録」であるならば史料の正式名称は「訂正及門録」と表記されるべきである。「及門録」は幾種類も存在するからである。次に②の「及門録」は「嘉永二年（一八四九）から同五年（一八五二）までの、四年間にかぎられている」と記しているが、確かに「訂正及門録」の場合の内容構成はその通りである。だが、記載された門人は、嘉永２年以前の入門者、それも西洋砲術以外の儒学や洋学の入門者も含まれているのである。この問題に関しては本稿の後部で具体的に証明する。また③の記載門人の総数であるが「一四三名」は明らかな誤りで、実際には「四六三名」（二重出、三重出の門人を含む）である。さらに④「所属は幕府を別とすれば、四十三藩におよぶ」とあるが、筆者の算定では「五十一藩」である[27]。そして⑤の「中津藩の八十三名」は「九十二名」、⑥「松代藩の三十二名」は「六十五名」、⑦「佐倉藩の八名」は「十三名」、⑧「津藩の六名」は「七名」と、各藩の入門者数の算定にはかなりの差違が認められる。また「訂正及門録」には、所属する藩名や藩主名の記載がない門人の場合が多く、それ故に門人側の史料を分析して門人の所属する藩名や藩主名を解明する必要があるのである。佐藤は、この面倒な作業を怠ったということである。

そして⑪「嘉永年間までの段階では、藩自体としてよりは、藩士が個人として西洋砲術をまなぶケースが多かった」との佐藤自身の見解を示してはいるが、それは誤りである。筆者の算定では、「訂正及門録」の重記（二重出や三重出）を除いた入門者の実数は425名であり、しかも彼等の内の343名については帰属する藩名を判別することができた。そして彼等は、西洋砲術や西洋兵学（西洋銃陣）という集団戦法の修得をめざすが故に、藩命を受けて藩単位で集団入門する場合が多かったことも確認することができるのである（中津藩、松代藩、大野藩、上田藩、土佐藩、等々）。

佐藤の上記のような象山の西洋砲術塾についての分析と論述は、象山の西洋砲術塾および象山塾門人帳「及門録」に関する根本的な事実誤認に基づく研究で、極めて誤謬に満ちた稚拙な内容である。その事実を具体的に論証すると、上記の引用部分で下線を施した箇所が事実誤認の部分であり、ほぼ全体に及んでいる。まず第一に指摘すべきは、前提である門人帳史料「及門録」そのものの理解に関する基本的な誤謬である。そもそも「及門録」とは、象山門人帳の原本史料ではなく、前述のごとく象山没後の明治期に門人たちが断片的な関係史料を繋ぎ合わせて作成した作為的史料（二次史料）と推定される史料であり、そこには門人名・所属身分や藩名などに関して多数の事実誤認が内在する実に問題の多い史料なのである。しかも信濃教育会編の増訂版『象山全集』（1934－1935年）の第５巻に所収の「訂正及門録」は、それまでに存在が確認されていた各種の「及門録」（宮本版や京大版など）を比較校合して作成したものであった。だが、出来上がった「訂正及門録」は、「校訂」を経てもなお多くの誤謬を含む未完成の史料だったのである。この問題を、筆者は、長年の象山研究における研究課題として各種「及門録」の比較研究を行い、事実誤認の析出と訂正を施し、象山塾門人帳史料に関する歴史研究史料としての「訂正及門録」の相対的な信憑性を認め、筆者の研究成果としての「訂正版の訂正版」〈最新校訂版「及門録」〉を作成し公表してきた[28]。その拙稿を参照してくだされば、佐藤の象山塾の叙述に関して下線で指摘した象山門人数の総数や藩別あるいは幕臣別の門人数が、如何に信憑性のない誤謬に満ちた数字であるかは一目瞭然となるであろう。

次に海原徹（1936－）の場合をみてみよう。同氏は『近世私塾の研究』という大著をまとめているが[29]、その中に「軍事科学としての蘭学」という一節を設け、高島秋帆が幕命を受けて天保12年（1841）５月９日、武蔵国徳丸ヶ原（現在の東京都板橋区高島平）で日本最初の洋式砲術・洋式銃陣の公開演習を実施したことを記述している。以来、高島から秘伝を伝授された旗本の江川坦庵や下曽根信敦、さらには彼等の門人たちによる西洋軍事科学系洋学塾の開設が急増し、そこには全国各地から武士を中心とする入門者が殺到した。そのような幕末期における軍事科学系洋学塾の代表的事例として佐久間象山の私塾があり、その名声を求めて全国各地から入門者が参集した。この象山塾について海原は、①「及門録」は「嘉永二年（一八四九）より安政元年（一八五四）までの兵学門人四五二名をあげて

いるが、嘉永二年入門の三一名がすべて純粋に兵学の門人であったかどうかははっきりしない」と述べている[30]。まず「及門録」という表現であるが、これは板沢、佐藤の場合と同様、幾種類もの「及門録」が存在していた中で、増訂版『象山全集』第５巻に収録された「及門録」は各種の「及門録」を比較校合して誤謬を訂正した「訂正及門録」が正式な史料名であることを正確に理解されていない。幾種類もある「及門録」を巡る内容的な真偽の問題を検証せずに、「及門録」イコール「象山門人帳」と安易に捉えて使用することは研究者の取るべき態度ではない。また、「及門録」の記載範囲である嘉永２年から安政元年までの入門者は「四五二名」ではなく「四五三名」である。しかも彼等は、全て「兵学門人」ではなく「儒学門人」「洋学門人」も混在するのである。さらに「嘉永二年入門の三一名がすべて純粋に兵学の門人であったかどうかははっきりしない」と述べられているが、少なくとも「嘉永二年入門の三一名」に関しては西洋砲術・西洋兵学の門人とみてよいが、彼等全てが「嘉永二年入門」であるとは考えられず、正確には「嘉永二年までの入門」と理解すべきである。この点に関しては詳しく後述する。また、海原は、同書において「訂正及門録」の記載内容を絶対視して嘉永３年（1850）の入門者の総計を「一二三名」とし、その内松代藩士が10名、中津藩士71名などと算出している。前述したごとく「訂正及門録」に記載された門人の多くは帰属する藩名や藩主名が記されていない場合が多く、それ故に門人側の史料から藩名や藩主名を特定するという厄介な作業が必要なのである。さらに、「訂正及門録」には同一門人名の二重出や三重出が数多く内在し、この重出門人を特定し削除しなければ門人の実数は把捉できず、したがって藩別入門者を特定することもできないのである。それ故に、藩別入門者数を特定することは二重の意味で手間暇のかかる非常に困難な作業となるのである。

以上、象山門人帳史料「及門録」、特に数ある「及門録」を比較校訂し、可能な限り誤謬を正した増訂版「訂正及門録」が、研究者の世界でどのように理解され使用されてきたかをみてきた。本稿では代表的な３名の研究者の研究書における「及門録」（「訂正及門録」）を検証したが、いずれの場合も、その理解と使用は極めて安易であり、事実を無視した誤解の一般化は厳しく戒められなければならない。これら著名な研究者の専門書の他にも、片桐一男（1934－）の「蘭学者の地域的・階層的研究」（『法政史学』第13号、1970年）などの論文も、佐久間象山

の西洋砲術塾の門人分析を試みているが、余りにも粗雑な内容である[31]。

上記のように歴史研究の大家である板沢武雄、佐藤昌介、海原徹などの諸氏も、象山門人史料として増訂版「訂正及門録」があたかも「原本」であるかのごとくに扱われている。いかに分析や考察が優れていても、肝心の史料自体が問題を孕み信頼性に欠けるものであれば、研究成果の信憑性は失われ、学術的な評価に値しない。歴史研究において最も重要と思われる史料に関しては、その真偽が厳しく吟味されなければならない。偽りのない歴史的事実を物語る同時代の史料をもって歴史的事実とその本質は語られなければならない。よく歴史研究において「史料に語らせる」という研究手法の有効性が指摘されるが、佐久間象山の門人研究史料として誤謬に満ちた「訂正及門録」が、何の史料批判もなされずに、あたかも同時代の象山塾門人名簿の「原本」であるかのごとき錯覚や臆見をもって研究に供されてきたのである。研究の世界において使用する論証史料を吟味するという作業のもつ意味は非常に大きい。史料自体に問題が発見されたならば、いつか、どこかで、問題を問題と思わない感覚の連鎖を断ち切らなければならない。さもなくば、問題を内在する史料は、拡散し続け、遂には問題の問題性は不透明となり問題と気づかなくなってしまうであろう。

それ故に、本稿が意図するのは、増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」が、象山門人帳史料の「原本」ではないことを論証することなのである。確かに増訂版『象山全集』に収録された「訂正及門録」は、他の「及門録」その他の門人関係史料との校合を通して、歴史的事実に反する様々な誤謬を「訂正」した「訂正及門録」ではある。だが、同史料は、なおも多数の誤りを内在する問題の史料であることの具体的な解明と訂正を進めなければならない。そこにこそ、象山研究の基礎研究である門人研究の一環として「訂正及門録」に内在する様々な誤謬を逐条的に析出して訂正し、より信憑性の高い象山門人史料に再訂正し、「訂正版の訂正版」の作成をめざす本稿の今日的研究の意義があると考える。

（一）増訂版『象山全集』に収録前の「及門録」の位置

「象山先生五十年祭」挙行時に念願の『象山全集』（全２巻）が刊行

幕末期の先覚者と評される佐久間象山は、その多才で鋭敏な能力の故に、漢学

者、思想家、洋学者、科学者、兵学者、医学者、教育者、芸術家、文芸家、武道家、書道家、等々、実に多種多様な評価を受けてきた[32]。彼は、日本の国家・人民が不安と混迷に揺れ動く幕末動乱の時代に、新生日本の在り方を「東洋道徳・西洋芸術」という思想に結実し、その提唱と実践とに挺身したトランス・ナショナルな思想の先覚者であった。だが、その彼は、開国和親、横浜開港、国民皆学、外国語対訳日本語辞書の刊行と日本人の外国語能力の開発、御雇外国人教師の招聘、留学生の海外派遣、学問の公開制、女子教育の必要性、等々、教育立国・科学立国・貿易立国・工業立国を主柱とする日本近代化の実現に向けた様々な国家施策を、早くもアヘン戦争直後から時代に先駆けて発信し、その実現に奔走していたのである。彼のめざす日本近代化も、「東洋道徳」という日本人に根付いた伝統的な儒教思想を国家人民の主体形成の基盤として喚起したものであり、また西洋近代科学が創出した精緻な科学技術・学問芸術を意味する「西洋芸術」を主体的かつ積極的に導入することは、日本近代化の推進には不可欠な施策であると主張し実践した。それが佐久間象山その人であったのである。それ故に、彼は、欧米列強を蔑視し排撃しようと尊皇攘夷を叫ぶ守旧派の標的とされ、京都三条木屋町の路上で刺客に襲撃され、54年の一期を閉じた。元治元年（1864）７月11日のこと、象山54歳であった。この４年後には「五ヶ条の御誓文」が布告され、新生日本の誕生を告げる「明治」の新時代を迎えるのである。

殖産興業・富国強兵という国是の実現に向けて、様々な欧米モデルの法制度の改革が断行され、日本近代化＝西洋化の革新が急速に推進された。やがて天皇制議会主義の国家体制が整う明治20年代以降になると[33]、日本は、日清戦争（1894－1895）・日露戦争（1904－1905）の両大戦に勝利し、ペリー来航を契機とする幕末期以来の植民地化状態にあった国家的危機を脱し、経済発展とともに政治体制も安定に向かうわけである。

近代化の指標である殖産興業・富国強兵が達成される明治末の同44年（1911）２月、信濃教育会は、評議会を開き、象山没後50年を間近にして郷土の偉人である佐久間象山を顕彰して長く日本の歴史上に印刻すべく、没後50年忌の記念事業を大正２年（1913）に実施することを決定した。記念事業は、①象山講演会の開催、②遺物展覧会、③象山文庫の創設、④肖像画の作成、⑤象山全集の出版、であった。記念事業の中でも特に重要だったのは、「象山講演会」の開催と『象山

全集』の刊行であった[34]。

この決定を受けて、象山没後50年に当たる大正２年（1913）７月を目処に、五十年祭の準備と全集の編纂作業が開始された。信州が生んだ歴史的偉人を後世に顕彰する事業に、地元の松代象山会も全面的な協力体勢を整え、全県挙げて準備作業に着手した。そこで特に案じられたのは、今回の記念事業の目玉である『象山全集』（上下２巻）を編纂する準備期間が15ヶ月と極めて短期間であることであった。それ故に、長野県教育界を統括し牽引する長野県教育職能団体「信濃教育会」の主催で、明治45年（1912）５月には「象山全集編纂委員及顧問」を決定し、記念式典の挙行（大正２年７月の予定）に先だって全集刊行の実現に向けて、直ちに編纂作業を開始したのである[35]。

なお、刊行された『象山全集』は、「一千百部を県下に頒布し、且つ金鶏祗候小松謙次郎氏の傳献にて[36]、天皇陛下、皇太子殿下に是を献納するの光栄に浴したり。是れ本会空前の偉業。」と記している。

膨大な象山関係史料を整理・分析して全２巻（上下２巻に分冊）の全集に編纂する作業を担った委員には、委員長に就任した佐藤寅太郎を含め、次の通り決定された。

・編纂委員長：佐藤寅太郎（1866－1943、就任時は信濃教育会副会長、大正７年に会長就任）[37]
・編纂　顧問：宮本　仲（1856－1936、東京の開業医院長で象山研究者）、赤沢光太郎[38]、立田　革（旧松代藩士）[39]
・編纂　委員：三井圓二郎（主任、旧松代藩士）[40]、飯島忠夫（1875－1954、東洋史学、学習院大学教授）、秋野太郎[41]、鈴木良之助[42]

全集の編纂に関して最も苦労した点は、何と言っても史料不足ということであった。象山斬殺の３日後には、松代藩庁から佐久間家の御家断絶という非情な処分を受けた（俸禄の召し上げ、土地家屋の没収、等々の処分）。それ故に、象山の書き残した作品や草稿など象山自身が所蔵していた膨大な資料群は、その一部を門人北澤正誠などの機転によって佐久間家から急ぎ搬出され、義弟で門人代表格の勝海舟に届けられた。しかし、多くの象山関係史料は散逸してしまった。そ

れ故に、門人たちはもちろん、信州人に取っては、待望の歴史的事業である全集の編纂に際して、象山の地元である信州松代町（現在の長野市松代町）の象山顕彰団体「象山会」から全面的な支援を仰ぎ史料提供を受けたのである。しかし、それでも収録すべき史料は足りなかった。一旦、散逸して長い時間が経過してから象山関係史料を蒐集するには困難を極めた。編纂委員各位は、「東西両京に出張し、また地方有志に委嘱して書写取調[43]」に東奔西走したのである。そのような編纂委員各位の必死の苦労が報われたのか、全集は、記念式典の挙行前に予定通り編纂され刊行されたのである。この大正２年（1913）の９月に刊行された念願の信濃教育会編『象山全集』（信濃毎日新聞社刊行）は、上下２巻（上巻1,166頁、下巻1,370頁、跋及び索引23頁で合計2,559頁）の非常に重厚な全集本であった[44]。

盛大に挙行された「象山先生五十年祭」

他方、象山没後50年を記念して開催される「象山先生五十年祭」の記念式典及び講演会は、当初の予定より少々遅れて大正２年（1913）10月30日、長野県師範学校（現、信州大学教育学部）で開催された[45]。記念祭の中心事業は講演会であった。信州内外からの著名人が登壇し、時代に先駆けた先駆的な思想家であったが故に不幸な最期を遂げた象山を、かつての門人たちは、あれこれと往事を回顧して語った。演者は、象山門人の加藤弘之（1836－1916、出石藩出身、政治学者、男爵、東京帝国大学第２代総長）を筆頭（代読）に、三上参次（1865－1939、姫路藩出身、日本史学者、元東京帝国大学教授）、宮本仲（1856－1936、信州松代出身、医学者で象山研究者）、それに飯島忠夫（1875－1954、信州松代出身、中国古代史研究、学習院大学教授）の４名であった。

なお、当日、800余名の聴衆を前にした講演は、上記の演者と演題の登壇順で行われた[46]。だが、残念だったのは、加藤弘之の講演であった。既に喜寿を過ぎた老齢の故に、東京から遠方の長野への来訪は無理であった。だが、若き日に出会って人生の根幹をなす教えを受けた恩師象山に対する彼の誠実な報恩の念は消えず、それ故に彼は自ら挨拶文「象山先生に就きて」を書き代読を依頼することで、象山門人として恩師に対する報恩感謝の表意としたのである。

・宮本　　仲「象山先生の経歴・性向・逸事等に就て」
・飯島　忠夫「象山先生の学統思想に就て」
・三上　参次「象山先生と其の時代に就て」

講演を聴講した人々は、佐久間象山という歴史的偉人に関する新たな知見を得て再認識し、象山が生死をかけて構築し実践した深遠な学術世界に誘われ、自らの生き方を顧みる機会を与えられたに相違ない。

また、信濃教育会刊行の月刊誌『信濃教育』の「象山先生五十年祭記念号」（大正２年11月）は、日本近代教育史上の大御所たちが、日本近代化の推進に貢献した佐久間象山の多様な側面を綴った寄稿文を特集した。即ち辻新次（1842－1915、信州松本出身、男爵、初代文部次官）、沢柳政太郎（1865－1927、信州松本出身・東北帝国大学初代総長・京都帝国大学第５代総長・成城学園創立者、男爵）、湯本武比古（1856－1925、信州高井郡赤岩村出身、象山門人・菅春風の門人、東宮御用掛、雑誌『教育時論』主幹）、渡邊敏（1847－1930、福島二本松藩出身、信濃教育会副会長、長野県近代教育形成の指導者）たちである。他にも、中央と地元信州の学問文化の世界を代表する人々が、様々な視点から象山先生を讃える内容の祝辞を寄せている[47]。

この「象山先生五十年祭」は、象山が刺殺された幕末動乱の元治元年（1864）から50年の歳月が流れ、時代は「明治」から「大正」という新時代の幕開けから２年目に開催された。その長い歳月の経過は、近代化の名の下に日本が大きく変貌するには十分な時間であった。特に忘れられないことは、開国和親を唱えた象山が否定した戦争を、明治以降の日本政府は繰り返したことである。象山亡き後の日本近代化過程を振り返ってみると、剣術師範で東西の軍学を教授する軍学者であったが故に平和主義者であった象山の本意に反して、正に日本の近代は戦争の歴史であった。維新時の戊辰戦争（1868－1869）、西南戦争（1877）、日清戦争（1894－1895）、日露戦争（1904－1905）、第一次世界大戦（1914－1918）、そして第二次世界大戦（太平洋戦争、1941－1945）と、日本の命運を左右する悲惨な戦争が、ほぼ10年おきに勃発している。近代日本の歴史は、維新の誕生時以来、戦争の連続であり、昭和の敗戦に至る日本の近代史が、正に戦争の歴史であったことは否定しえないところである。

激動の日本近代史の中で生き残り、終生、象山を学問的人生の師と敬仰した加藤弘之、また門人ではないが同郷の信州出身で象山を敬愛し中央の教育界その他で活躍した辻新次（1842－1915、松本藩出身、初代文部次官、明治期の近代教育制度を策定した「明治教育界の元勲」、明六社会員、大日本教育会、仏学会、伊学協会の各会長、貴族院勅選議員などを歴任）、あるいは沢柳政太郎（1865－1927、松本藩出身、東北帝国大学初代総長・京都帝国大学第５代総長・成城学園創立者）など、国家的次元で日本の近代化に貢献する多くの著名人が結集して開催された「象山先生五十年祭」。そのような盛大な「象山先生五十年祭」の開催は、主宰する信州教育会が、象山の日本近代化に関する偉業と不戦を説いた学問思想を顕彰し継承すべく、総力を挙げて取り組んだ一大事業であったのである。

門人加藤弘之の演説－入門動機と当時の象山塾の教育状況

なお、講演の冒頭を飾るのは、象山門人の加藤弘之の予定であった。が、前述のごとく、彼は、既に喜寿を過ぎた老身であったが、挨拶文の原稿だけは恩師に対する報恩感謝の念を込めて自ら書きあげた。しかし、当日は東京から信州長野市の会場（県立師範学校）に馳せ参じることは能わず、残念ながら代読となったのである。その加藤は、この３年後の大正５年（1916）２月に他界する。幕末期以降の波乱の時代を政治学者として生き抜き、学問的世界における日本近代化への偉大な功績をもって国家的栄誉の位階勲等を極めた学究的人生の一期であった。享年80。

その加藤（但馬国出石藩）の学問への覚醒は、黒船来航の前年の嘉永５年（1852）に、象山の門人となったことである。いまだ17歳の若者は、以来、誠心誠意、学問一筋に生きた。その甲斐あって彼の人生は順風満帆、幕府旗本への昇進を経て維新後は新政府に仕え、外務大丞、元老院議官、勅選貴族院議員などの出世街道を一直線に歩んだ。また、日本における西洋近代モデルの大学の定着と発展にも数々の功績を残した。旧東京大学を構成する法・理・文３学部を統括する綜理（現在の学部長）、東京帝国大学（現在の東京大学）の第２代総長、獨逸学協会学校（現在の獨協大学）の第２代校長など、草創期の大学運営にも敏腕を振るった。正に加藤こそは、恩師象山のワールドワイドな学問的人生を堅実に継承し、日本の学問教育の発展に多大な貢献をなした門人の一人であった。

だが、同じ象山門人でも日本近代化過程における進路は様々であった。政治改革に一身を捧げた吉田松陰（1830－1859、29歳、長州藩）や坂本龍馬（1836－1867、31歳、土佐藩）などは、若くして明治の夜明け前夜に散ってしまった。しかし、西村茂樹（1828－1902、佐倉藩、日本近代化において国民道徳新興団体「日本弘道会」を創設して国民道徳の振興に尽力した啓蒙思想家）、津田真道（1829－1903、津山藩、洋学研究をもって幕臣に昇進、維新以後は新政府の官僚、政治家として活躍した啓蒙学者。福澤諭吉、森有礼、中村正直、加藤弘之、西村茂樹などと「明六社」を結成して日本の文明開化を推進）、小林虎三郎（1828－1877、長岡藩、美談「米百俵」の主人公、日本の教育近代化に欧米教育の成果を導入し貢献）、北澤正誠（1840－1901、松代藩、外務省で洋学関係の記録を整理し著作化、象山の著作編纂と顕彰活動の実質的な中心者）などの門人たちは、国家的次元で教育研究の学問的世界に生きて活躍した人たちである。また、法曹界で活躍した渡辺驥（1836－1896、松代藩、維新政府の法曹界で現在の検事総長に相当する大審院検事長にまで出世し、後を追って法曹界に入った多くの故郷松代の後輩たちの面倒をみた。特に彼の恩師象山に対する報恩感謝の念は強く、最期まで恩師象山の顕彰に尽くした奇特の門人であった）、さらには文明開化を支える実業家として活躍した子安峻（1836－1898、大垣藩、明治３年に日本最初の活版印刷所「日就社」を設立し「英和字彙」を印刷し出版、また同年の横浜毎日新聞の創設に尽力、さらに同７年には読売新聞社を創立して初代社長となり、日本銀行の初代監事も務め、日本の実業界・財界に重きをなした）。上記の他にも中央・地方の各界で活躍した門人は数多くおり、同じ象山門人でも日本近代化への関わり方や貢献は実に多種多様であった[48]。

ところで、学問に精励し学術界で活躍した加藤弘之が執筆した「象山先生五十年祭」の挨拶文には、出石藩（現、兵庫県豊岡市出石）の家老家の嫡男として生まれた彼が、象山塾に入門する経緯（嘉永３年入門の中津藩・横山犀蔵の紹介で入門）が具体的に述懐されている。そこで注目すべきは、往事の象山塾の実態が具体的に描写されていることで、象山の人間性を含めた学習体験者ならではの貴重な情報が記されている[49]。とりわけ刮目すべきは、彼が入門した江戸木挽町時代の象山塾の規模や門人数、そして教授方法や学習内容に関する記述である。これらの諸点について、彼は次のように記している。

まず、加藤が入門した当時、即ち黒船来航の前年に当たる嘉永５年（1852）当時の象山塾の教育状況が紹介されている。兵学師範の家に生まれた彼は、象山塾入門後は「先生の兵書砲術書に関する講義を聴き又練兵の講義」や「練兵の事」の修得に励んだ[50]。また、前年に江戸深川の松代藩邸から木挽町に移転したばかりの象山塾は、「家屋の裏に僅か二百坪足らずの明き地があつて、そこで僅か二三十人程の練兵の足並を習い」[51]、「其脇に一寸した建物があつて、其処で先生が三四日目毎に蘭書を携て来て講義」をしたという[52]。さらに「外に学塾もあつて学生が僅に四五人居りました」とも述べている。この加藤の体験談は、象山塾の実態、すなわち西洋砲術や西洋兵学の西洋軍事科学を教授する教室や隊列訓練用の空き地の他に、儒学や洋学など象山が専門とする学問を教授する教室棟もあり、そこに学ぶ門人もいたという事実、すなわち象山塾は単なる西洋砲術塾ではなかったことを証言しているのである[53]。

なお、「通学門下生の中には中津藩の人が大多数を占めて居りましたが、又中津藩では二本榎（にほんえのき：現在の東京都港区高輪２丁目、筆者注）の下屋敷で月に一両回位、大練兵を催すことで、其時には必ず先生も出られて大司令官となられました」[54]と述べている。豊前中津藩と言えば、かの有名な『解体新書』を著した蘭学者の前野良沢（1723－1803）、また慶應義塾の創立者である福澤諭吉（1835－1901）の出身地であり、洋学に理解のある藩風であった。その中津藩では、幕末期の第８代藩主の奥平昌服（まさもと）（奥平大膳大夫、1831－1901）が、洋学に対する関心が非常に強く、軍備の西洋化に意を注ぎ、当時、軍事関係を得意とする洋学の第一人者として令名を馳せていた象山を、中津藩専属の洋学者として厚遇し、定期的に藩邸の広場を使って藩士全員に対する西洋砲術・西洋兵学の練兵教練を委ねていたのである。それ故、藩邸で定期的に実施する洋式軍事訓練の際には、師範役の象山自身が中津藩邸に出張指導していた。中津藩では、藩邸での集団訓練以外にも個々に象山塾に通学して学ぶ藩士も多かった。象山塾入門者の藩は50余藩を数えるが、どの「及門録」をみても100名近い入門者の中津藩が圧倒的に第１位を占めていた。

なお、象山は松陰密航事件での処罰（地元、信州松代での９年間に及ぶ蟄居謹慎）から解放された後、皮肉にも処罰した幕府（第14代将軍徳川家茂）から幕臣「海陸御用向掛手附御用雇」として召され上京するのである。京に到着後は、山

階宮や中川宮、将軍の徳川家茂や一橋慶喜などに謁見して廻り、開国進取の持論を陳述した。だが、京の街中を西洋鞍の馬に騎乗して闊歩する象山の姿は、攘夷派から見れば、「西洋学を唱える西洋かぶれ」としかみえず、格好の標的となり惨殺されるのである。

しかし、象山の西洋スタイルは、決して上京後にはじまったものではなく、いまだ政情が安定していた江戸の私塾時代（嘉永・安政初期）から、彼の乗馬は西洋スタイルであったことが、当時、塾生だった加藤弘之の「先生は既に其頃から西洋馬具を用ひ木挽町（象山塾の所在地）から二本榎迄、乗馬で参られましたが、恐らく他に一人も西洋馬具を用ひた人は江戸中になかつた」[55]という証言で確認することができる。

誇張し曲解された象山像の普及－謹厳実直で家族愛・門人愛に満ちた研究者

加藤が最後に強調したかったことは、象山の学問・思想の特徴や人間性が、当時の一般人たちの風評とは全く異なるものであったことである。全集版「訂正及門録」の編纂委員でもあった地元松代の郷土史家の大平喜間多（1889－1959）が、象山に関する逸話を『佐久間象山逸話集』（信濃毎日新聞社、1933年）にまとめているが[56]、同書が象山とは全く対面のない全国の人々や象山研究者たちの、象山の性格や行動などの人間性の理解に、多分にネガティブな情報源となったことは否めない。例えば、そのいくつかの逸話のタイトルを次に紹介する。

> 「竹刀の上には君臣がないと佐藤一斎の学問教授を否定」[57]、「道理の上に子弟はない」「傲岸不遜（ごうがんふそん）」「狷介不羈（けんかいふき）」[58]、「剛腹自用（頗る狭量な人物）」[59]、「佐久間は何処迄も変わった男」[60]、「伝統的な慣例を守らず奇抜な免許状を出す」[61]、「羈泰（非常にあぶないこと）」[62]、「妻は若い方がよい」[63]、「妾を周旋して呉れ」[63]

同書に書かれた象山逸話の数々を読むと、天賦の才が備わった象山が非常に自己中心で自己主張の強い、如何に変人・奇人であるか、と思い込ませられ、生理的に受け入れられずに否定してしまう象山像が形成されがちである。

だが、多くの門人や知人友人たちの恩師象山に対する畏敬と信頼の情は非常に

厚く、象山に対する報恩感謝の念は非常に深かった。優れた頭脳をもつ実践躬行型の研究者（学者）である象山は、天分とも言える知的能力と実践的行動力に関しては、高い評価を受け、日本近代化にはたした貢献度は大きいと認められる。ところが、全く面識のない人々の象山の人間性に対する評価は極めて否定的で、彼の言動は異端児のまま大人になり学者になった変人奇人と受け止められてきたのである。

前述の地元松代の象山研究家であった大平喜間多『佐久間象山逸話集』は、簡潔な文章で明瞭であるが、逸話の根拠となる史料的根拠が判然としない「逸話」（約80項目380頁）を一書にまとめたものである。だが、同書は、象山理解の入門書あるいは必読書とされ、意外なほどに全国の読者に読まれるところとなった。残念なのは、同書が、象山の人間性が非常に奇抜で知的天才に特有な異常性にあると誤解される印象を、読者に抱かせる叙述が大半を占めており、偏った象山像形成の大きな一因になってきたのではないか、との危惧の念を抱かせるところである。

しかし、象山の自己認識の究極的な本質、アイデンティティ（identity）は「侍」（武士）であることである。それ故に彼は、机上の観念論ではなく、国家や人民が直面している現実の諸問題を解決できる有益な学問の探究、換言すると実践的学問論を信条として問題解決に挑む飽くなき学問展開の実践性が特徴である。それは、彼が信奉した朱子儒学の影響もあるが、その前提要因となったものは父親から伝授された塚原卜傳流剣術の免許皆伝に説かれた精神で、彼は、父祖以来、武家の血統を継承する家系に生まれたことに、無上の名誉と自信と勇気を感得する武士道精神に依拠して主体性を形成していたが故とみるべきである[64]。

それ故に彼は、人間関係において規律や礼儀や廉恥を重んじる武士道精神を基本とする生き方を、生涯、貫いて生きたのである。恩師象山の人と学問に対する体験的印象を、直接、寝食を共にした門人の加藤は次のように述べている。明治日本を代表する政治学者で初代東京大学総理（総長）や初代帝国学士院長（現在の日本学士院長）など国家的要職を歴任した加藤の、恩師象山の思想や品格に関する理解は、実に要を得たもので現実味のある表現である。特に象山の人格に関しては、威厳は正すが本質は優しく極めて誠実勤勉な人柄で、面倒見が良く、相手を気遣う思い遣りに満ちた人間性豊かな人柄であったという。また、別の史料

では門人たちが終生の師として敬慕し、長野市で催された没後50年祭や70年祭にまで列席しており、学問のみならず人生の師と仰いで生きた子弟愛の強さに驚かされるのである[65]。

先生は当時、既に西洋学の必要を十分感ぜられたのでありますけれども、併し其頃のことでありますから、西洋の学は専ら物質的科学であつて精神的なる哲学若くは倫理道徳学等の如きは西洋には未だ十分なるものは、あらぬように思はれて居たように思はれますが、もしも先生が尚長く生存して居られたならば其辺の事にも注意されて先生の所見がかはつたことであろうと思はれます。

此頃先生の画像を見受けることが随分ありますが、何分にも十分似て居りませぬ。未だ写真の開けぬ時であつたが、併し素人で写真をする人は多少あつて先生も写されたといふことであります。先生は威あつて猛からずといふやふな人で、唯こはらしいのみでなく、頗るやさしい所のある人でありましたけれども、写真はあまり厳格すぎる顔付であるよふに思ひます。（中略）

僕は東で象山、西で南州を当時人傑の両關（りようせき）と思ひます。此両關は性質に於ても事業に於ても何も角も互に異なつて居りますけれども、その両關たる点に於ては全く優劣はないと考へます。先生は頗る僕の志を愛されて教授の他に種種懇切に指導されましたが、又僕の父（甲州流軍学を家学とする但馬国出石藩の兵学師範）も門下生といふ訳ではないが、度度先生に面会して西洋兵学の話抔を聞きました[66]。

象山の心優しい人間性を説いた東京帝国大学教授・三上参次の演説

また、象山が刺殺された翌年の慶応元年９月に生まれた三上参次（1865－1939、東京帝国大学教授の日本史学者）は、象山と面会することもなく、したがって門人になることも叶わなかったはずである。それでは、一体、彼は、どのような関係で遠方から信州長野市で催される「象山先生五十年祭」に臨席されたのか。推察するに、彼は、加藤弘之や津田真道、西村茂樹など象山門人たちと深い親交が

あり、その筋から象山の人と思想に関する体験談を聴いて共感を覚え、敬慕の情を込めた極めて肯定的な象山像を形成していたからかも知れない。

ところで、記念祭のときの三上の講演「象山先生に就いて」は、他の演者の講演内容とは異なり、象山の学問よりも人柄を中心に論じられている点に特徴がある。実は、象山という人は、腹蔵のない胸中の思いを誠実に自己表現するが故に、誤解と中傷が絶えなかった。しかし彼は、領民思いで義侠心の強い青年であったことを、象山26､7歳位のときの具体的な貧民救済行動をあげて説明している。即ち、天保の飢饉（1833－1839）のときに、彼は藩庁に救済策を建議するが聞き入れられない。だが彼は、領民の苦難を慮り、昵懇の藩御用達で藩士の八田嘉右衛門を説得して食糧を供出させ救済した、という美談である（国立史料館編『真田家家中明細書』東京大学出版会、1986年、258頁／宮本仲『佐久間象山』64－65頁）。

同じ飢饉時の人民救済への対応でも、大坂では奉行所与力で陽明学者の大塩平八郎（1793－1837）が武装蜂起し、米を買い占めて私利を貪る豪商を襲撃して天誅を加え、幕府の対応を厳しく批判した。同じ儒学でも朱子学を奉じる象山は、情に流されて武力に訴える大塩の行動を、陽明学の典型的な弊害と断じて厳しく批判する。兵学者であるはずの象山は、兵学の本質を知るが故に、徹底して戦争など武力に訴える対立抗争を好まない人物だった。それ故、平和裏に大飢饉を乗り切った象山の対応を、三上は次のように述べている。

> 藩庁に其事を迫られたけれども、藩庁の方では尚一向形がつかない。是に於て象山先生は其藩の用達なる八田嘉右衛門を説いてお前の独力でやつて呉れと云つた処が、八田は資産もあり義気のあるものと見えて、先生の献策を早速容れてさうして愈愈飢餓救済に対する仕事をすることになつた。[67]

一般には理屈屋と批判される象山ではあるが、実は彼ほど他人思いで情が深く誠実一路の人間はいない。だが、如何なる怒りや哀しみの惨状に遭遇しても、彼は決して感情的にはならず、理にかなっているかどうかを最優先にした冷静沈着な事態認識と解決策を執るのである。家族や門人、友人知人に対しても、象山ほど謹厳実直で面倒見がよく誠実な人間愛を注いだ人は少ない（後日、象山の人間

性をまとめた拙著『誤解と中傷に満ちた佐久間象山の虚像－真理探究を貫く愛と誠の純粋性－』を刊行予定)。

また三上は、象山の学問についても高く評価し、「漢学に造詣があり其上に洋学を修め、殊に算術、測量、理化学、兵学砲術、等を以て……其実用的方面の効果を実に想見すべき」で、そこから「先生は日本を世界の日本として考へて居られ」「五六十年後の今日に於て我々の考えることと異ならなかつた」と回顧し、象山の学問の先見性を高く評価している。

さらに三上は、象山刺殺事件の真相についても触れ、襲撃斬殺の首謀者に、何と愛弟子吉田松陰の門人である長州の「久坂玄瑞」を挙げている。即ち、横浜開港、開国進取、公武合体などの開明思想を公然と説く象山を、久坂は「彼の老狂奴容しがたい奴である。されど彼を殺すには一勇士があればよろしい。別に重要の任務あるべき二兄（越後の長谷川鉄之進、長州藩の大楽源太郎）のすべき事では無いと諭されて、よろしい。しかし老賊のことも亦緩ふすべきでないとて長藩の士片山斎、土佐藩士上田宗兒の二人に命じて微行して入洛せしめた。而してこの二人が未だ隙を伺ひつゝありし間に（壱岐の人）松浦寅次郎、（肥後の人）河上彦齋の二人が早く之を切つた」と述べている[68]。

象山を招聘しようと積極的に使者を信州松代に送ったのは、長州藩と土佐藩であった[69]。だが、その両藩の過激な攘夷論者が、象山を刺殺したという説は有力である。だが、このような三上の象山刺殺事件の所説は史料的根拠に乏しく信じ難い。

なお、三上は、象山の人物像についても具体的な人物に準(なぞら)えて触れ、「新井白石に似ております。近頃の人で申しますと何となく森有礼、福澤諭吉の両氏に星亨氏をつきまぜた様な人の如くに思われます。先生が平素白石に私淑して居られたことは人の伝ふる所でございます」[70]、と説明している。はたして象山が、新井白石（1657－1725）・森有礼（1847－1889）・福澤諭吉（1835－1901）・星亨（1850－1901）という日本を代表する開明的な知的エリート４名との間に、どのような共通点が認められるのか、改めて比較・検討されなければならない。

新井と森は、鋭敏で該博な主体性に富む国際的知識人であり、また政治的素質も優れているが、本質的には知識と論理の世界に生きる学者肌の人物。しかも両者は共に語学の才能に恵まれ、世界から日本を捉えることの可能な国際人であっ

た。しかし福澤は少々異なる。該博な知識を有し、どのような現実問題にも対処できる政治的能力に富んではいるが、尊大で自己主張が強く、独立自尊で進取究明の知識人であった。また、星亨（1850－1901）は、精進努力型で英学や法学を修得して教師や弁護士を経験し、さらに政治家に転じて国政に関わり、衆議院議長や数種の大臣職を歴任した。だが、批判精神が旺盛で藩閥政治を批判し、信念を曲げずに自己主張をする故に、入獄も経験し、最期は象山同様に刺殺されて人生の幕を閉じた。あたかも天国と地獄を往還するかのような曲折に満ちた星の生き方は、ある面では最も象山と重なる人物と思われる。だが、象山には、星ほどの政治的遊泳能力はなく、正義感・責任感が強く、外部や他人に対して礼儀を重んじ権威を装うが、家族や門人、友人知人をこよなく愛し、勝負すべきときには自分自身を天の寵愛を受けて天命を担うべき人間と自尊自負し、生死をかけて天命を全うしようと全力で物事に挑戦する武士道精神をベースとする真理探究型の実践的な学者であった。

確かに象山は、三上があげた４人の歴史的偉人たちと、ある面での共通点は認められ、基本的には異論のないところではある。このような迫真性のある象山の人間性や人物像を描写でき、また「象山先生五十年祭」で講演を要請された三上という学者は、一体、象山と如何なる関わりがあって、かかる現実味に富む具体的な象山像を形成しえたのか。この問題は今後の研究課題であるが、実に不思議である。

少々、本題から脱線した。が、決して無益なことではない。ともかく、「象山先生五十年祭」は無事に挙行され、念願の『象山全集』（上下２巻）も編纂・刊行された。この全集によって、象山研究の利便性は格段に改善され、象山研究の成果である論文や著書、あるいは小説類の増加が期待された。ところが、この全集には、思わぬ欠陥があり、研究者や読者の期待はずれとなった。なんと肝心の門人帳史料「及門録」をはじめとする重要な象山関係史料が欠落していたのである。

『象山全集』に「及門録」が未収録ということの問題性

象山に関する多種多様な史料を豊かに整理分析して編纂した膨大な分量の『象山全集』に、唯一点、重要史料の欠如という決定的な問題があった。それは、象

山門人帳史料「及門録」が収められていなかったことである。筆者は、前承の拙稿「佐久間象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）」において、この全集が刊行された大正初期には、象山門人帳の「写本」との触れ込みで、「及門録」と呼ばれる象山門人帳史料の冊子が、象山関係者その他に出回り、奇しくも当時の日本を代表する哲学者であった井上哲次郎の目に入ることになった経緯を明らかにした。だが、象山門人の顔触れに強い関心を抱いていた井上は、一見して『象山全集』に「及門録」が欠落していることの不備を見抜くのである。

大正２年（1913）に「象山先生五十年祭」の記念事業が企画され、その代表的な記念事業として、初めての『象山全集』（上下２巻）の刊行が決定されたわけである。そして、同全集が無事に刊行されたとき、井上は、当然、そこには象山門人帳「及門録」が収められているものと思い、早速、入手して驚愕するのである。何と、井上が最も重要史料と期待していた「及門録」が未収録だったのである。

明治維新から半世紀が過ぎた大正時代初期の当時には、幕末期に活躍した佐久間象山の門人たちを具体的に知る人は少なくなり、一般の日本人はもちろん、歴史の専門家でさえもが象山の代表的な門人、例えば勝海舟・吉田松陰・坂本龍馬・河井継之助・橋本左内・真木和泉・加藤弘之・津田眞一郎・山本覚馬など、ごく一部の門人しか知らずに、象山や象山塾を取り上げ、彼の思想や教育を論じていたのである[71]。だが、井上は、象山門人は予想を遙かに超える多数であり、しかもその中には「近代日本画の祖」と称される日本画壇の狩野芳崖、美談「米百俵」の主人公の小林虎三郎、日本最初の英和辞典を発行し読売新聞社を創立した子安峻、明治日本の啓蒙思想家で道徳振興団体「日本弘道会」を創設した西村茂樹など、様々な分野で日本近代化に貢献した象山門人たちが記録されている「及門録」が収められているものと期待していたのである。ところが、待望の『象山全集』に肝心の「及門録」は未収録であったのである。井上の失望は如何ばかりであったか。

彼は、『象山全集』を刊行しながら重要史料である門人帳「及門録」を収めていないという事実に驚き、本来ならば全集を刊行した信濃教育会は〈「及門録」をも加えて『象山続集』とかして出版したならば一層学会を裨益する」〉[72]とまで考えたのである。だが、それを、初の全集を刊行したばかりの信濃教育会に望むの

は無理と考えた井上は、前承の別稿「佐久間象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）」で詳細に内容分析をして紹介した通り[73]、自ら繙いた写本の「及門録」に記録された400名を超える門人たちが学んだ象山塾の内容や特徴、あるいは門人たちの学習目的や学習内容を分析し、学びの目的や内容に応じて門人を類型化してみせるなどの新知見を加えた簡潔明瞭な論文「佐久間象山及門録に就いて」に仕上げたのである。それを井上は、大正３年11月、当時の日本を代表する全国規模の学術啓蒙雑誌『東洋学芸雑誌』[74]に発表したのである。それは、信濃教育会が『象山全集』を刊行した翌年のことであった。

それにしても、どうして東京帝国大学哲学教授の井上は、象山門人に関する幅広い知識を有していたのか。一体、明治以降の日本近代化の下で、何故に文明開化を象徴する『明六雑誌』や『東洋学芸雑誌』の主宰者メンバーや文部省その他の中央官庁、あるいは東京帝国大学などの研究の世界に、象山門人が数多く存在して活躍しているのは何故なのか。この厳粛な事実は、彼にとっては謎めいた疑問であったに違いない[75]。事実、彼は、様々な象山門人たちと出会って親交を深め、識見高邁な彼らの活躍や人間性を目の当たりにすると、一体、どのような人物が佐久間象山の門人にはいるのか、明治以降の日本近代化の各分野で活躍する象山門人の全体像に関する彼の知的関心を、一層、深めていったに相違ない。

全集編纂の最高顧問として全体のまとめ役をはたしたのは宮本仲であった。彼は、東京帝国大学医学部出身の開業医でありながら象山研究の第一人者であったのである。それ故に彼は、「象山先生五十年祭」でも歴史研究の大学教授である三上参次や飯島忠夫と共に記念講演を依頼され、「象山先生の経歴・性向・逸事等に就て」という講演を行ったのである[76]。

一体に、象山の修得した主要な学問は、漢学（儒学）・洋学（蘭学）・医学（西洋医学）・文学（漢詩文）・科学技術（西洋砲術・兵学）、等々、実に多面的であった。だが、門人の教育という面からみると、その根本は、正に自らが父親から受けた「文武両道」の教育であったといえる[77]。文武の知識技能を修得することは決して最終目的ではなく、文武の稽古を通して己自身の人間性を鍛錬すること、即ち人間的成長を目的とした心身の修練をめざすものであった。天意を拝して天命を尽くし天寿を全うするためには、知・情・意が三位一体化した強靭な主体性が形成されなければならず、それが象山にとっては文武両道を自ら体得し、

また門人たちに教育する際の究極的な目的であった。そのように理解することができる。

象山は青少年期に、長く塚原卜傳流師範の父親から文武両道の教育を受け、免許皆伝を得ている。筆者には、象山の学問探究や思想的言動においては、実践躬行を最重要視する武士道精神が基礎にあるとの視座から、象山の思想形成に与って、父親から受けた文武両道の教育が、如何に重要な思想形成の要因であったかを詳細に分析した拙稿がある[78]。

なお、宮本は、象山が修得した教育の内容を、「其教育領域は文武両道に亘つている、学問許りで無いのであります。而も其文は先づ和漢洋といふのでございますけれども、和学丈けは唯自修のみに止めて人に教え授けられたことは余りない…併し漢学と洋学は立派な教育家として立たれた…洋学の方は分けても医学の方と兵学の方と二つに分かれます。それから武の方は朴伝流の槍術と剣術である。夫れから大砲演習兵式調練と云うようなことも武道であります」[79]と述べている。

このような教育の他にも、象山が、入門儀礼、教育方法、子弟関係、師匠の子弟愛、学問の公開制、実験実証の重視、経世済民（政治経済論）、死生論、気力・勉強・至誠、等々、多岐に亘る実践や実験を重視する実学的教育論を展開したことを、宮本は指摘している。そのような象山側の視座に立った主体的な象山理解の仕方は極めて重要かつ妥当なものである。だが、そのような視座から象山を追体験的に理解した研究は、明治以来ほとんどみられなかった。

宮本は、前述の井上哲次郎の論文「佐久間象山及門録に就いて」が公表されると、これを精読吟味し、また世間に出回っている象山門人名簿と言われる「及門録」も入手して、それらの内容を比較校合し、より誤謬の少ない象山門人帳史料としての「及門録」の作成に向かった。その際、特に彼が問題として吟味したことは、次の三点と考えられる。

①「及門録」に記載されている門人が真に象山門人であったか否かを確認すること

②「及門録」に記載されていない象山門人を一人でも多く発掘し追加記載すること

③「及門録」の門人名の前に頭書されている門人の身分・帰属する藩名・藩主名、入門月日、等々の添書を吟味し、誤りを削除して正しい必要事項を付加

すること

以上の留意点を踏まえて、宮本はより正確な「及門録」の作成に努め、これを自らの象山研究書『佐久間象山』に収録し、岩波書店から昭和７年（1932）に出版したのである。同書は、明治以来、数多の象山研究書が刊行された中で、象山研究の必携の書と評価され、昭和10年（1935）に増訂版が出され、さらに昭和戦後の昭和54年（1979）に至っても復刻版（象山社刊行）が出版され、今日なお象山研究に不可欠な名著となっている。

しかしながら、同書に収められた「及門録」は「原本」ではないが故に、様々な加筆や削除の修正が加えられたにもかかわらず、なおも多くの事実誤認が認められることを指摘できるのである。このことは、既に前承の拙稿「佐久間象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）」で、詳細な分析を試み、問題の数々を具体的に析出し、同論文のファインデングスとして報告してあるので参照されたい[80]。

（二）増訂版『象山全集』に「訂正及門録」を収録

象山研究一筋の人生を生きた宮本仲

最初の信濃教育会編『象山全集』（上下２巻）が刊行されてから20年の歳月が過ぎた昭和７年（1932）の２月、医学者で象山研究の第一人者でもある宮本仲が、長年の象山研究の成果をまとめた大著『佐久間象山』を出版した。彼は、「象山先生五十年祭」の開催や『象山全集』の編纂でも中心的な役割をはたした人物である。その彼が、徹底して史料自身に象山を語らせるという手堅い歴史研究の手法で『佐久間象山』（岩波書店、初版705頁、昭和15年の増訂版863頁）という本格的な研究書を出版したのである。前述のごとく、宮本は、若くして敬愛する郷里の偉人・佐久間象山の研究に精魂を傾け、その成果を一書にまとめて後世に書き遺すことを己の使命と覚悟していた。それ故に、東京帝国大学医学部を卒業して、さらにドイツ留学で最新の西洋医学（小児科学、内科学）を学んで帰国してからも、大学などでの医学研究には向かわず、東京神田に個人医院を開業し、診療の旁ら全ての経済力と時間とを象山研究に傾注したのである。

しかも、齢60を過ぎると、彼は医院を閉じ、ライフワークである象山研究に全力を注いだ。だが、不幸にも彼は、その後、難病に罹り余命半年の宣告を受ける。しかし彼は、病躯を押して象山研究の完成を天命と信じ、執念の人となって研究に没頭したのである。研究が一応の完成をみた昭和７年（1932）、彼が75歳のときに念願であった長年の象山研究の結晶である『佐久間象山』を岩波書店から出版することができたのである。Ａ５判705頁の大著で、明治以来、評伝を中心とする数多の象山研究書が刊行された中にあって、非常に卓越した内容の出来映えで、他の既刊の作品を圧倒したのである[81]。

ところが彼は、同書が書き加えるべき重要事項が欠落した未完成品であることに気づく。視力も衰え体力も衰弱した病身の宮本は、何としても増訂版を再版すべく奮起し、補充する原稿の執筆に全力を注いだ。その結果、78歳を迎えた昭和10年（1935）12月、増補改訂版『佐久間象山』が完成し出版の運びとなったのである。彼は、死力を尽くして取り組んだ象山研究を成し遂げた翌年（昭和11年）の正月４日、79歳の天寿を全うした。天命とも思われる象山研究に生涯を捧げた宮本は、改訂版の執筆に非常な覚悟で挑み、それが完成した暁に、同書の冒頭の序文「第二刷序」に、幼少時より敬愛してやまなかった佐久間象山と共に生きた己の研究的人生の意味を、次の如く記している。

> 偏へに偉大なる我が佐久間象山先生の事蹟の顕彰に対する江湖の共鳴に外ならないものと信ずる時、仮令吾が眼は盲たりと雖も、吾が軀（体）は衰たりと雖も、一日の晏如（安らかで落ち着いているさま）も許されるべきではないと思考した[82]。

増訂版『象山全集』に「訂正及門録」を収めるに至る編纂経緯

再度の編纂・刊行となった増訂版『象山全集』には、象山門人帳史料として注目される「及門録」の全文が、初めて収録された。いわゆる「訂正及門録」である。だが、すでに宮本仲は、昭和７年（1932）に象山研究書『佐久間象山』に「及門録」を収録して刊行していたのである。先行した宮本版「及門録」については、別の拙稿[83]で詳細に分析し、そこに内在する問題点や特徴、さらには歴史的意義、等々を詳細に析出し論述した。すなわち、宮本版「及門録」は、学問的レベルで

象山門人であるか否かを立証する基本史料としては、多くの疑問点や問題点が内在し、象山門人帳関係の史料として研究に供するには信憑性に欠ける、と言わざるを得ないものであった。

しかしながら、宮本版「及門録」が、幕末期に日本近代化の指標となる「東洋道徳・西洋芸術」思想を提唱し実践した象山門人たちの全体像（大概）を知りうる門人帳史料の一種であることは今も否定することはできない。しかも、それが、宮本仲という象山研究者個人によって初めて活字化され世間に公表された作品という先駆性は評価に値するものである。畢竟、思想とは、教育的営為で結ばれた子弟関係を媒介として継承発展され普及拡大するものである。それ故に、象山思想の全体的な普及拡大過程を概観する上で、同書は、かなり有益な手掛かりとなりうる有意な象山研究の成果である、とも評することができる。

また、信濃教育会は、宮本の「及門録」を収録した『佐久間象山』の出版から２年後の昭和９年（1934）７月には、増補増訂版『象山全集』（全５巻）の刊行を開始し、最終巻の第５巻を翌年（1935）６月に刊行して、２度目となる本格的な『象山全集』の編纂・刊行の大事業を完結させた。初回の『象山全集』（上下２巻）も、全体で2,559頁（上巻1,166頁、下巻1,370頁、それに「跋」と「索引」で23頁）という膨大な分量であった。が、新たに刊行された増訂版の全集は、収録史料の量的面でも大幅に新史料を増補し、また質的面でも史料内容の誤謬を可能な限り訂正したものであった。

結局、再度、刊行された『象山全集』は、全５巻という非常に大部なもので、いわば「象山史料集の決定版」とも言える本格的な増補改訂版の『象山全集』であった。それ故に、全集の正式名称も『増訂　象山全集』（以下、増訂版『象山全集』と略記）と、書名に堂々と「増訂」を冠した全集となっている。

なお、初版に倍する大幅な増補改訂を施した増訂版『象山全集』の刊行が、何故に必要であったのか、その理由を、再版の編纂委員会は次のように表明している。

> 大正二年（1913、筆者注）十月の象山先生五〇年祭を期し、（前回の『象山全集』全２巻は：筆者注）程を急ぎて出版せるがために、原稿の査閲、印刷等に於て、遺憾の点多多あるを免れざりき。よりて今回これに訂正を加へ、

且つ新材料を蒐集して之を増補したり[84]。

初版の刊行から20年の歳月が過ぎ、編纂関係者も老化や他界により、入れ替わらざるをえなかった。今回、抜本的に増補刷新された増訂版『象山全集』の編纂委員は、下記のような地元信州出身の象山研究者や信濃教育会の教職関係者で、刊行予定の３年前の昭和６年（1931）４月に編纂委員を委嘱されていた。前回の委員だった者で顧問を委嘱されたのは、当時の象山研究の第一人者であった飯島忠夫（学習院大学教授）、宮本仲（医学者で象山研究者）、赤沢光太郎（松代町象山会幹事、松代町史編纂委員）の３名であった。最も激務で責任の重い編纂主任には、前回も編集委員を務めた三井圓二郎（松代小学校教員、後に長野師範学校・松代高等女学校などの教員を歴任。飯島忠夫・佐藤寅太郎の薫陶を受け、両者とは深い親交関係）が抜擢された。その他の編纂委員には、前回の編纂主任であった佐藤寅太郎が相談役に後退して再任され、残る委員は全て新人で、彼らは信濃教育会の会員で信州教育を担う気鋭の教師たちであった。編纂委員の大役を委嘱された彼らは、結果的には編纂期間が延長されたので、実質的には４年半の歳月をかけて編纂活動に精励し、増訂版『象山全集』（全５巻）の刊行という大事業を成し遂げたのである（下記の人物の略歴等に関しては、『更級郡埴科郡人名事典』、『長野県歴史人物大事典』、村沢武夫編『信濃人物誌』、『松代町史』下巻、『信濃教育会九十年史』下巻、宮本仲『佐久間象山』、国立史料館『真田家家中明細書』等々を参照した）。

□顧　　問：飯島忠夫（学習院大学教授）、平野彦次郎（大東文化学院教授）、宮本　仲（東京の開業医院の院長で象山研究の第一人者）、赤沢光太郎（1853－1936、松代藩士族、明治21年に屋代町外２ヶ村戸長、象山会幹事、松代町史編纂委員、松代町の長老、象山神社建立に尽力、昭和11年９月歿、享年84）、羽田桂之進（象山が松代藩沓野三村利用係のとき、部下として殖産興業の調査研究を支援した羽田忠左衛門の孫（『更級郡埴科郡人名事典』））、大平喜間多（1889－1959、独学で松代郷土史を研究。『松代町史』の編纂主任、『佐久間象山逸話集』など著書多数）

□編纂主任：三井圓二郎（旧松代藩士・山田定則の次男、三井家に養嗣子、松代小学校教員から明治45年５月、信濃教育会より象山全集の編集主任を委嘱され、大正２年９月に全集が完成。その後は、長野師範学校、松代高等女学校などの教諭。昭和６年、再度、増補改訂の象山全集の編纂主任、同10年に全５巻の増訂版『象山全集』が完成し刊行。昭和12年11月歿、享年68）

□編纂委員：土屋弼太郎（つちやのりたろう、1885－1970、下高井郡瑞穂村（現、木島平村）出身、長野師範学校卒。穂高尋常高等小学校訓導を経て長野師範学校教諭、旧制松本第二中学校長、地方視学官、上田中学校長で退職、信濃教育会雑誌編集主任、木島平村教育長－『長野県歴史人物大事典』）、松本　深（1880－1954、北佐久郡協和村（現、望月村）出身、長野師範学校卒、長野市後町小学校長などを歴任－『長野県歴史人物大事典』）、山口菊十郎（1875－1953、高井郡往郷村（現、木島平村）出身、検定試験で尋常科正教員になり長野師範学校附属小学校訓導、長野県初代の社会教育主事、長野高等女学校長等を歴任）、西山敏一[85]、宮下忠道[86]、宮坂亮[87]、佐藤寅太郎（1866－1943、信濃教育会長・衆議院議員、佐久郡長戸呂村（現、佐久市）出身、長野県立師範学校卒、小諸小学校長、長野県視学、長野県学務課長、信濃教育会会長を８選（1918－34））、守屋喜七（追加委員、1872－1946、伊那郡片倉村（現、高頭町）出身、長野県師範学校卒、同校付属小学校訓導、湖南尋常高等小学校長、長野県視学、長野市後町小学校長、西田幾多郎の指導を受ける信濃哲学会を創設、信濃教育会専任幹事）

□援助依頼：小宮山太郎（経歴等不詳）[88]、矢澤頼道（1869－1938、松代町出身、慶應義塾中退、松代町会議員、埴科郡会議員、松代町長、長野県会議員、象山神社建立会幹事長等を歴任）

以上が、増訂版『象山全集』を編纂した委員の陣容と編纂の経過である。彼ら編纂委員の特徴は、旧松代藩出身者を中心とする信州人で、大学教授や医師などもいた。しかし、編纂の実務に当たる多くの委員は、長野県師範学校（現、信州

大学教育学部）の出身者たちであり、昭和戦前の小学校や旧制中学校の教員で信濃教育会の会員の中から選抜された優秀な人たちであった。

特に県視学や学務課長など長野県の教育行政界で最高位の重職を歴任した人物で、しかも信濃教育界に絶大な影響力を有する信濃教育会の会長・副会長・幹事長などの重鎮、あるいは象山神社建立の中心者、等々、象山先生を敬愛して止まない郷里の様々な分野の代表者が委嘱されていたのである。全５巻の増訂版『象山全集』を編纂し刊行する事業の主体は、あくまでも信濃教育会であった。だが、その実現を期して編纂・刊行を担った人々は長野県教育界（信濃教育会）あげての「全県体制」で編成されたとみてよい。

実際には担当分野を責任分担して編纂作業に当たったが、特に重責を担ったのは編纂主任の三井圓二郎であった。彼は、長野県教育界の大御所である飯島忠夫や佐藤寅太郎の信任が厚く、彼等の指導・助言を得て様々な編纂上の難問を乗り越え、編纂主任の重責を全うしたのである[89]。

なお、『佐久間象山』の著者で、不治の大病に苦悩していた晩年の宮本仲は、病躯を押して東京から長野市で開催される編纂委員会や編纂作業にどれほど列席できたかは定かでない。だが、長年に亘る象山研究の蘊蓄を傾注して大所高所から可能な限りの指導助言を与えたに相違ない。特に象山作品の鑑定者としての学識経験は高く評価されていた宮本は、得意の漢文や古文書の読解能力を活かして、編纂作業全体の相談役・指南役として収録する史料の解読・吟味に関わっていたと推察される。その宮本が、増訂版の象山全集が完結した翌年の昭和11年(1936)正月４日、幕末期日本を代表する郷土の偉人である佐久間象山の全集が完結し後世に遺されることを確認して、79歳の天寿を全うしたのである。増訂版『象山全集』の刊行は、敬慕して止まない象山先生の研究や顕彰に生涯をかけて生きた宮本にとっては、何よりの救いであったに相違ない[90]。

編纂主任の三井圓二郎を筆頭とする編纂委員の人たちの編纂活動は、補充する象山関係史料の蒐集活動での東奔西走、蒐集史料の整理や解読、等々、心身共に蓄積する疲労は大変なものであったと思われる。察するに余りある編纂委員の労苦を慰労すべく、信濃教育会長で編纂委員に追加された佐藤寅太郎は、第１巻の「増訂象山全集序」に、「本書の編纂は、松代藩士三井圓二郎専ら其の任に当たる。茲に附記してその労を多とする所なり。」[91]と記し、三井をはじめとする編纂

委員の働きを慰労し称賛する一文を残した。

確かに、刊行に至るまでの長期間に及ぶ編纂作業は、三井を筆頭に膨大な史料群との格闘であり、編纂委員全員が心身両面で大変な過重労働であったに相違ない。だが、幕末動乱期の日本を西洋列強諸国に伍して発展する新生日本の実現に一身を捧げた同郷の先覚的な思想家である象山先生の全集を編纂し、後世に残すという責任重大な任務を担っているという、彼らの責任感や使命感から湧き起こる歓喜と充実感とが支えとなり、全５巻の刊行に至らしめたものといえるであろう。

世紀の大事業であった増訂版『象山全集』の刊行を決定した当時の信濃教育会の会長は、佐藤寅太郎（1866－1943）であった。彼は、長野県師範学校を卒業後、長野県内の中・高等学校長や長野県学務課長（現在の教育長）などの重職を歴任し、定年退職後は教育県長野を形成・発展させてきた教育職能団体である「公益社団法人信濃教育会」（明治19年－1886年７月設立、現在に続く）の会長職に就き、実に８期（1918－1934）も務め、また衆議院議員も経験している。正しく佐藤は、名実共に「信州教育」（長野県教育）の名を全国の教育界に轟かせた最大の功労者であった。それ故に、多大な経費と時間を要する大事業である増訂版『象山全集』の編纂・刊行の事業を可能にしえた功労者もまた佐藤寅太郎その人であったといえる。彼は、増訂版『象山全集』刊行の学術的意義と歴史的偉大さを、第１巻冒頭の「増訂象山全集序」で次のごとく述べている。

> 象山全集修正増補成る。時を費すこと三歳、博く捜り深く討ね、前版の誤あるを訂正し、疑問あるを解き、又新に蒐集する所極めて多し。是に於てか全集の名、首(はじ)めて完(まつた)きを得たりと謂つべし。[92]

佐藤の辞は、やや誇大な自己評価ではある。が、しかし、その増訂版『象山全集』は、刊行後、初版の『象山全集』（上下２巻、「及門録」を未収）に取って代わり、現在に至るまで幕末史研究や象山研究に関する不可欠の基本文献として広く活用されてきている。何人も、同書なくして象山研究に関する論文や著書を編むことはできないといっても決して過言ではない。刊行以来70余年の歳月が過ぎた今もなお、同書の学術的な存在価値は少しも色あせず、数量的にも希少価値

の高い存在であるが故に、入手困難なほどに需要が高まっている名著である。

写本版「及門録」の誤謬を修正し増訂版『象山全集』に収録する苦渋の経緯

ところで、増訂版『象山全集』（全５巻）は、最初の『象山全集』（上下２巻）では未収録であった新史料が数多く増補された。新たに付加された具体的な史料を、編纂委員会は次のように記している。

> 今回増補せるは、四書經注旁釋（大學之部）と新に収集したる詩文、和歌、書簡とにて、就中書簡の数は頗る多きに達せり。又、此の中に象山先生小伝、及門録、象山先生史料雑纂、各種索引とを加へたり。及門録以下は之を第五巻の末に附したり。[93]

新たに増補された史料の中には、『増訂荷蘭陀語彙』『邵康節先生文集』、それに象山の思想と行動の形成と展開の過程を具体的に表現している大量の書簡など、象山思想「東洋道徳・西洋芸術」の形成と展開に関して注目すべき重要な史料が多数、含まれていた。とりわけ刮目すべきは、第５巻（昭和10年刊）に収録された象山門人帳史料「訂正及門録」である。前承の拙論で詳述したごとく、象山門人帳史料「及門録」が存在するという風聞の流布は、明治・大正の新時代に生き残った幕末期の象山門人や友人知人の関心を呼んだに相違ない。その全国的な点火役となったのが、東京帝国大学法学部教授・井上哲次郎（1856－1944）の論文「佐久間象山及門録に就いて」（大正３年、1914）であったと言ってもよい。

さらに、井上論文に続いて、象山と同郷の医学者で象山研究に生涯を捧げた宮本仲が、象山研究に精魂を傾けた研究成果を、著書『佐久間象山』（岩波書店、昭和７、1932年刊行）にまとめて出版したことである。そこには400名を超える象山門人を記録した「及門録」の全体が紹介されていたのである。同書によって、象山門人の氏名や帰属する藩名や藩主名などを記した「及門録」の全容が、初めて活字化され世に公表されたわけである。この反響は大きかったといえる[94]。

しかし、先の拙稿で筆者が詳細に検証し論証したごとく、「及門録」は象山門人帳の「原本」とは決してみられない史料である。その論拠を前稿でも示したが、さらに本稿の後半で詳しく論証する予定である。「及門録」成立の時系列的な位

置は、象山の私塾が存在した幕末期ではありえない。象山没後の明治期以降になって政情安定の時期を迎えたとき、北澤正誠など象山側近の門人たちが「門人帳史料集」（象山門人名簿）の「草稿」（原案）を作成し、これに関係者たちが加筆や削除の訂正を施して「象山門人帳」の体裁を整えていった。このような経緯を経て作成された象山門人名簿が、「及門録」の名称で旧門人その他に流布していった。しかも、関係者の間に広く流布した「及門録」は、複数の関係者の書写を重ねたが故にか、１種類ではなく複数の種類の写本「及門録」が存在し、それぞれの「及門録」の記述内容は相互に符合しない相違点（問題点）を内在することになる。このような問題点も、作成過程で起こりうる事実として認識し、全ての「及門録」を比較吟味してみなければならないわけである[95]。

ともかく、宮本が、長年に亘る地道な象山研究の成果をまとめた研究書『佐久間象山』に、本邦初公開で象山門人帳「及門録」の全文を収録し公表したことの意味は大きい。というのも、信濃教育会が、既に大著『象山全集』（上下２巻、大正２、1913年）を刊行しており、この編纂事業に宮本自身も編纂顧問という責任ある立場で関わっていた。だが、何とその象山全集には「及門録」が収められていなかったのである。なぜ、「及門録」を全集に収録して公表できなかったのか。

その理由は、宮本を含めた編纂委員会が蒐集し内容を検討した「及門録」には、余りにも多くの誤謬が認められ、とても公表できる史料ではなかったからである。時間をかけて様々な観点から関係史料と比較校合して抜本的な訂正を加えなければ、とても公表できる内容ではなかったのである。名実共に全国都道府県の教育会の代表的存在である信濃教育会が、物心両面で相当な覚悟をして、信州を、否、日本の幕末期を代表する歴史的偉人の全集となる『象山全集』を、初めて編纂して刊行し、そこに日本近代化に貢献した象山門人の数々を記した門人帳史料「及門録」を収録できなかったということは、誠に残念なことではあった。だが、その理由を知れば、誠に致し方のないことであった。

したがって増訂版『象山全集』に「及門録」を収録するに際しては、初版を編纂する時に入手していた、ある特定の写本版「及門録」を原案として、これを他の「及門録」や関連史料と比較校合し、挿入や削除などの訂正を加えるなどして、大幅な増補訂正を施さざるをえなかった。増訂版『象山全集』に象山門人帳史料

「訂正及門録」として収録できるまでに修正し、その歴史史料としての信憑性を高めることは実に困難なことである。それ故に誤謬を析出して訂正する作業は、象山研究に不可欠な史料に仕上げるための最も基礎的な研究であった。そのような編纂委員会の訂正作業を経て、最終的には何とか公表できるレベルの内容にまで仕上げることができた。それ故に、増訂版『象山全集』に収録された「及門録」には、特別に「訂正」の２文字が付されて「訂正及門録」と命名され、増訂版全集に全文を収録することができたということである。

このように、信濃教育会の編纂委員会が、象山全集の決定版ともいえる増訂版『象山全集』に象山門人録としての「訂正及門録」を収め、その存在を内外に公示し、記載内容を明示したことは、実に勇気ある判断であった。だが、信濃教育会が刊行した２度目の全集、即ち増訂版『象山全集』に「訂正及門録」を収録した結果、歴史学研究・洋学史研究・軍事科学史研究・医学史研究・教育史研究などの幕末史研究の学問世界に新たな問題が惹起されることとなった。即ち、「訂正及門録」の内実は、信濃教育会が告知した通り、なおも誤謬の多い不完全な史料であったが、利用する研究者たちは、「訂正及門録」を、あたかも象山門人帳の「真筆」（原本）であるかのごとくに誤解して受け止め、何の疑問も抱かずに論文や著書に使用したのである。しかも、そのような安易で軽率な史料の理解と使用の在り方が、現在まで全く不問に付されてきていることは看過できない問題である。

信濃教育会が、昭和９年(1934)に増訂版『象山全集』を刊行する以前に、すでに井上論文（1914）や宮本版「及門録」(1932)、さらには後述する京大版「及門録」（明治34、1901年に北澤が没した後、親族が「及門録」を含む象山関係史料を京都帝国大学附属図書館に譲渡した内の写本）などが公表され、すでに世間には特定の写本を定本にした幾種類かの毛筆書写版の「及門録」が流布していたことは確かである。そうした写本「及門録」の存在状況を編纂委員会は十分に承知し、それらの内容的な真偽を確認していたはずである。それ故に、前述のごとく、増訂版『象山全集』に門人帳史料として「訂正及門録」を収める際に、流布版の中で底本とすべき「及門録」の記載内容を丹念に比較校合し、門人名や藩名・藩主名・入門月日などの真偽を慎重に吟味して、可能な限り誤謬を訂正して信頼性の高い門人帳にまで修正を加えなければならなかったのである。象山門人に関す

る記述の真偽を厳正に判別するには、写本の「及門録」相互の比較分析はもちろん、他の様々な関係史料とも比較校合するという複雑な検証作業に取り組んだはずである。そうした編纂委員会の人々の心身両面での奮闘努力の結晶が、増訂版『象山全集』に収録された象山門人帳史料「訂正及門録」だったという次第である。

原本でない不完全な写本「及門録」を修正して全集に収めた編纂委員会の苦渋

以上のような「訂正及門録」の編纂経過を踏まえて、信濃教育会は、増訂版『象山全集』に「訂正及門録」を収録した。その際に編纂委員会は、「訂正及門録」を公表するに至った作成経緯と掲載理由を、さらには同史料が使用される際に配慮すべき留意事項を、次のような注釈文にまとめて「訂正及門録」の冒頭に付記したのである。

> 及門録の原本は所在明ならず。流布の寫本は誤謬頗る多く、前回に於てはこれを原稿とするに堪へざりしも、本會は爾来各種の史料に對照して幾多の訂正を加へ、又更に京都帝國大學圖書館に保存せられたる門弟故北澤正誠の傳へたる及門録寫本とも對校し、之を訂正及門録と名づけたるものなり。然れどもなほ不明の箇所も存し、未だ完璧を期し難しと雖、其の疑はしきを闕かば及門者の大體を知るに補あらんか。[96]

上記の注釈文の内容によって、信濃教育会が象山史料集の決定版とも言える増訂版『象山全集』の刊行に際して、なおも「及門録」の「原本」と確認できる門人帳の「本物」を収めることができなかった理由を述べている。だが、象山門人の実際を知りたいと象山を敬慕する人々の希望や研究上の願望に応えるために、編纂委員会は、一般に流布している写本の中で最も信頼できる写本版「及門録」を選択して「原案（底本）」とし、これを他の可能な限りの写本や関係史料と校合して様々な誤謬を析出し、さらに宮本版や後に紹介する京都帝国大学附属図書館蔵の「及門録」（京大版「及門録」）などとも対照して訂正し、あるいは増訂版『象山全集』に収録する膨大な象山関係史料や門人側の関係史料などとも照合して、象山門人であるか否かの氏名の確認や彼らの属性（身分・藩名・藩主名など）の

誤読・誤記・誤解などを吟味し、必要な加筆や削除を加えて誤謬を訂正する作業を重ねたのである。そのような編纂過程を経て、いまだ絶対的とは言えないが、相対的にはかなり信頼性の高い「訂正及門録」を作成することが可能になったのである。したがって、象山門人の概要を知りうる「訂正及門録」は、象山門人帳の「原本」そのものではないが、信濃教育会の編纂委員会が悪戦苦闘の末に作成した複製史料(歴史的事実を可能な限り事実に近く復元した複製史料、二次史料)とみてよいであろう。この点に十分留意して、象山門人史料として「訂正及門録」を理解し使用しなければならないのである。

なお、井上哲次郎が指摘した「一般に流布している寫本」の存在、例えば宮本版「及門録」と、象山門人の北澤正誠の遺族が北澤の没後（明治34、1901年以降）に、彼が所蔵していた象山関係史料一式を京都帝国大学に譲渡した中に含まれていた「及門録」(「京都帝國大學圖書館に保存せられたる門弟北澤正誠の傳へたる及門録寫本」)の両者を、記載内容面で逐条的に遺漏なく比較校合すれば、写本の原本（象山塾に存在すべきはずの「原本」ではなく、例え写本である宮本版や京大版の原本となった底本史料は同じであったとしても、両者の「及門録」の間には様々な点で相違点が確認できることは事実であり、異なった別物の「及門録」）である可能性も否定はできないのである[97]。

ところで、増訂版『象山全集』に収められた「訂正及門録」の叩き台となった「原版」あるいは「底本」の史料は、いずれの「及門録」であったのであろうか。少なくとも井上論文で指摘された「及門録」や宮本版「及門録」、さらには京大版「及門録」や信教版「及門録」[98]の中の「及門録」の１冊が、増訂版『象山全集』に収められた「及門録」を作成する際の草案とされた可能性もありうる。この点については後に詳細に論証する。

これまで、筆者が幾度も指摘してきた増訂版『象山全集』に所収の「及門録」に関する誤解、即ち編纂委員会が入手して検討した「及門録」は、他塾の場合とは異なり、象山存命中に入門者が自署した門人録の「原本」そのものではなく、象山没後に門人有志が作成した「及門録」ではないのか。そのように推定する筆者の仮説を否定できる史料的な根拠はないはずである。最初の『象山全集』を刊行するときの「原版」（底本）ともいうべき「及門録」は、編纂委員会自らが「誤謬頗る多く」と明記しているごとく、とても『象山全集』に収められるような史

料でなかったことは確かである。

以上の説明により、井上哲次郎が不審に思った問題－何故に初版の『象山全集』に「及門録」が収録されていなかったのか－という疑問は解消されるであろう。

「及門録」の「原本」は「所在不明」ということの謎

ところで、「及門録」の「原本」は「所在不明」と言われてきた[99]。象山没後150年余りが経過した令和元年の現在に至るまで、誰一人として「原本」なる実物の門人帳史料を目にした者はいないのである。特に幕末期に象山塾で学んだ数多の門人たちは、明治を超え大正時代まで長命であった門人も多くいた。が、誰一人として自分が象山塾に入門した時に署名した門人録が存在することを、生前に公言したり記録したりした者はおらず、その存在を証明する何の記録も残してはいないのである。

一般に、幕末期の軍事科学系洋学塾では、高島秋帆をはじめ、その門人である江川坦庵や下曽根信敦、さらにその門人、即ち孫弟子である土佐藩の徳弘孝蔵、等々の場合などは、野外で行う砲術練の度に参加者名簿を作成していた。しかも彼等の私塾は、そうした個別の練記録とは別に、各々の練参加者をまとめた開塾以来の入門者の全体名簿（門人帳）を残しているのである[100]。

だが、象山塾の場合は異なる。筆者は、これまで彼の総合的な門人記録（門人帳）の有無を探索し検討してきた。結果的には、作成されたか否かは全く不明で、残された形跡も全くみられない。したがって、門人帳「及門録の原本は所在明ならず」[101]という問題の捉え方と理解、即ち、編纂委員会の文意は、「及門録」の「原本」は存在するが、どこに在るかは不明であるという問題の捉え方であり、これは適切な表現ではない。「所在不明」という表現は存在したことが前提となって成立するからである。

しかしながら、30年近く筆者が強調してきた仮説は、「象山は存命中に門人全体を記録した門人帳を作成した事実はなく、したがって遺された形跡もない」ということである。そのように考えれば、幾種類もの写本版「及門録」が存在することや、それら相互に内容的な誤謬が内在する事実などの問題が、矛盾なく理解でき、事実に即した現実的な見解ではないかと考えるからである。

それ故に、編纂委員会は、再度、増訂版『象山全集』の編纂に挑み、そこに門

人帳史料「及門録」を収めるか否かに関しては極めて慎重な論議を重ねたに相違ない。そこで第一に確認されたことは、「原本」と同一の「及門録」（あるいは「原本」そのものと呼びうる唯一無二の「及門録」）を入手することは不可能であるということ。しかも、可能でないならば、如何に「及門録」の問題に対処すべきなのか。重苦しい論議は尽きなかったに相違ない。幾冊かの「及門録」を前にして編纂委員会一同は思案に暮れた。その結果、次善の対応策として、最も誤謬の少ない写本の「及門録」を選択し、それを象山門人に関する諸々の文献と照合して、逐条的に象山門人であるか否かを確認する作業を重ねていき、「訂正及門録」の「原版」を作成することとした。当然、「門弟北澤正誠の傳へたる及門録寫本」（京大版）とも校合して誤りを訂正する重要な参考史料とした。そして最終的には、「本物」（実物）ではないが、歴史的内容に関する信憑性において「及門録」と呼ぶに値する内容レベルの「及門録」にまで仕上げていったということである。

こうして出来上がった「訂正及門録」の完成度は意外と高く、なおも誤謬を含む未完成の二次史料ではあるが、同史料によって象山門人の全体像を概観することは可能である。そこに記された400名を超える象山門人たちの、幕末期以降の日本近代化過程において展開した思想と行動の軌跡を解明する端緒ともなりうる。それ故、「原本」（実物）ではなくとも、象山没後に門人たちが作成した「訂正及門録」という作為的史料は、象山研究をはじめとする幕末史研究や近代化研究にとって意義のある歴史史料たりうると判断され、増訂版『象山全集』に収められたのではないか。象山門人帳史料「訂正及門録」が増訂版『象山全集』に収録されるに至った経緯を、そのように謎解きすることができる。

しかし残念ながら、一度、公表されると、象山門人帳史料としての「訂正及門録」は、「実物（本物）」であるか否かを問われることはなく、昭和戦前の刊行以後、今日に至るまで、「訂正及門録」を用いた様々な研究においては、編纂委員会の「釈明文」（「忠告文」）が全く無視され、「訂正及門録」＝「象山門人帳原本」として利用されてきている。このような安易な研究姿勢の実態は、史料批判の有無や史料内容の妥当性の検証という歴史研究の基本的観点から検証されなければならない重要な問題といえるのではないか[102]。

（三）「訂正及門録」の内容構成と記載事項の問題点

「訂正及門録」の内容構成と誤謬析出の方法－図表化資料による比較分析

上記のごとく、信濃教育会編「訂正及門録」は、昭和の戦前から多くの研究者たちによって、あたかも象山門人帳の「原本」であるかのごとくに理解され、今日まで使用されてきた。だが、そこには、重複記載者を含めると、463名という多数の象山門人名が記されているが、下記に指摘するような「原本」ではないが故に惹起される幾つもの重大な問題を内在している史料なのである。

①「訂正及門録」は、約40年に及ぶ象山の長期間に亘る教育活動の内の２年乃至は６年という極めて短期間の門人を対象としており、しかも、その当該期間の入門者の全体ではなく、「訂正及門録」に「抄録」と明記されている通り、一部の門人の記録であるということ

②「訂正及門録」には463名の門人名が記されているが、同一門人の重複記載が30名以上も存在する。このような事実は、近世日本の他の私塾の門人帳ではありえないということ

③さらに門人名や帰属する藩名・藩主名に多数の誤りが認められるが、このことは「及門録」が「自署」ではなく、後日、関係者によって作成された二次史料であることを物語っており、この種の問題もまた近世日本の私塾の世界では認められないことであるということ

叙上のように、佐久間象山の門人帳史料とされる「訂正及門録」に様々な誤謬が内在することが事実であるならば、それらを具体的に析出して闡明し、徹底して誤謬を訂正して信憑性を高めていくことは、歴史研究上、大変に意義のあることである。「本物（実物）」の史料が存在しないならば、同時代の事実を表現するに値する「正確性」「信頼性」「真実性」が担保された二次史料も必要であるということである。

次に、本論文における研究課題の分析や考察に不可欠な最も中心的資料となる筆者作成の図表資料「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」を示すことと

する（※同資料は、非常に大量の資料であるが故に、本稿の本文の終わりの後、注記の前に一括して掲載することとする）。同資料は、筆者が膨大な時間と労力を費やして作成した研究成果の一部である。それは象山研究（門人研究）の一端ではあるが、前述のような象山門人帳史料「訂正及門録」の内容的な妥当性や正当性を検証するために、数種類もある「及門録」の中で最も早くに公表された宮本版との比較校合を通して、佐久間象山の門人帳史料の原本とみられてきた増訂版『象山全集』所収「訂正及門録」の記載内容について、徹底的な史料批判（Source criticism）を試み、どこがどう誤っているのかを分析し、そこに内在する誤謬を具体的かつ詳細に析出して、可能な限り妥当性のある修正案（「訂正及門録」の更なる訂正版）を作成し提示することを意図したものである。

なお、同一覧表資料において、増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」と宮本版『佐久間象山』所収の「及門録」における誤謬（誤読・誤記・誤解）の部分には「細字下線」を、そして同じ箇所での正しい記述の方には「太字下線」を付した。また、後からの朱筆による挿入追記の部分には「細字破線」を、さらに誤りの削除部分には「太字破線」を施し、同じ「及門録」でありながら多くの相違点があることが一目瞭然となるような「史料比較一覧表」になるよう工夫した。

門人の記載対象期間の異なる宮本版「及門録」と増訂版『象山全集』

増訂版全集に収録された「訂正及門録」の作成は、昭和戦前（1935）の刊行当時としては大事業であった。信濃教育会が、内外の象山研究者を結集した編纂委員会は、可能な限り記載事項の誤りを析出して訂正し、研究史料として使用されるに足る正確性や信憑性を担保しようと必死の努力を注がれたことであろう。しかしながら、完全無欠なまでに「訂正」することは到底、不可能なことであった。それ故に、編纂委員会自身が「訂正及門録」を増訂版『象山全集』に収録・公表するに際しては、なおも事実に反する種々の問題点（同史料の記載事項に関する史料の誤読・誤記・誤解）が内在するという事実を正直に記載し、歴史研究史料としての取扱上の注意を喚起する「注意書き」を付記したわけである。確かに、「訂正及門録」には様々な問題点が認められる。このことは、本稿に提示した筆者作成の「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」をみれば一目瞭然である。

先ずその第一は、記載されている門人数の問題である。この問題は、「及門録」

に記載対象となった門人の入門期間とも密接に関係する。増訂版『象山全集』の場合は、記載された門人の入門時期は、「嘉永２年（1849）から安政元年（1854）までの約６年間」という極めて短期間が対象となっている。嘉永２年（1849）に西洋砲術教授の活動を開始していた象山が、翌年の嘉永３年（1850）に江戸深川の松代藩邸に西洋砲術教授の看板を掲げて公的に教育活動を開始し、さらに松代藩以外の諸藩からの入門者が急増するに至った状況に対処するため、松代藩の経済支援を受けて嘉永４年（1851）には江戸木挽町に本格的な塾舎を構えた。かくして、江戸随一の盛況を誇る西洋砲術の私塾に発展した象山塾は、ペリー来航を契機とした愛弟子吉田松陰の海外密航事件に連座して、幕府に捕縛される安政元年（1854）４月まで存続した。したがって「訂正及門録」に記載された入門者は、嘉永２年から安政元年までの６年間（実質的には約５年間）における入門者なのである。前述のごとく、象山の儒学・洋学・医学・詩文などの教授活動期間は、約30年という長期間に亘るもので、西洋軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）に限定しても決して上記のような短期間ではなかったはずである。

しかも筆者は、「訂正及門録」に記載された門人全体の年次別一覧表の名称を「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」としたが、象山塾での学習内容の実態は「西洋砲術」に限定されたものではなかったのである。したがって、「訂正及門録」には西洋砲術をはじめとする多様な学問技術（洋学・儒学・医学・詩文・書画、等々）を学ぶ門人名が、入門年月日順に時系列で記載されていなければならないはずである。だが、実際はそうでなく、記載する条件自体に問題のある史料なのである[103]。

加えて、入門年月日の記載の有無に関しては、「訂正及門録」全体の前半部分の２年間（「嘉永二己酉歳」「嘉永三庚戌歳」）に記載された門人全員（154名／463名、33.3％）に入門年月日の記載は全く記されていない。彼らについては、単に当該年の「年号（元号）」と「干支」で区分された時期（「嘉永二己酉歳」「嘉永三庚戌歳」）の枠組の中に、全体として一括して把握され記載されているに過ぎないのである。

そこで、まず指摘しておかなければならない問題点は、「訂正及門録」という門人帳冊子の内容を構成する記載対象となっている門人の入門期間の年代区分の表記に関する点である。第一に指摘すべきは、宮本版「及門録」の場合は、入門

期間の全体を「嘉永六年」と「安政元寅」の２年間で名簿が構成され、さらに「嘉永六年」の中が２期（①「嘉永六年癸丑三月砲術稽古出座帳抄録」、②「嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録」）に区分されている。そして後期の「安政元寅」は「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」のみである。したがって宮本版「及門録」の実質的な内容は、嘉永６年（1853）の３月、６月、それに安政元年（1854）の正月という２年間における計３回の西洋砲術繰練への参加者名簿ということになる。しかも３回の全てが、①「嘉永六年癸丑三月砲術稽古出座帳抄録」、②「嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録」、③「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」と、「西洋砲術」の繰練に参加した（西洋砲術門人名簿）となっているのである。

ところが、増訂版『象山全集』の方は、宮本版の２倍の期間、即ち全６期（①「嘉永二己酉**歳**」、②「嘉永三庚戌**歳**」、③「嘉永四辛亥**歳**」、④「嘉永五壬子**歳**」、⑤「嘉永六癸丑**歳**六月砲術稽古出座帳抄録」、⑥「安政元甲寅**歳**正月砲術稽古出座帳抄録」）と時系列に即して区分された各時期を対象とする門人録である点が、同じ「及門録」とはいっても大きな相違点である。即ち、増訂版『象山全集』は、嘉永２年（1849）から安政元年（1854）までの６年間における計６回の西洋砲術繰練への参加者名簿ということになる。この「及門録」の内容を構成する入門者の時期区分の仕方において、宮本版と全集版とでは大きな相違が認められるのである。

なお、付言しておくべきことは、増訂版『象山全集』の時期区分における暦年記載は、筆者作成の「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」で太字下線をもって時期区分したように、「干支」の次に「歳」（旧字体）という文字を記している点である。だが、これに対して宮本版では、最初の嘉永６年の２回分だけに「干支」の前に「年」（新字体）を付し、後の安政元年分には「年」も「歳」も付してはいない。この点も両者の「及門録」に認められる表記の相違点である。

第二には、宮本版「及門録」の最初の第１期の部分、即ち「嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿」の内容は、「訂正及門録」の４期分（「嘉永二己酉歳」「嘉永三庚戌歳」「嘉永四辛亥歳」「嘉永五壬子歳」）の全体を、同一時期として一つにまとめて記載していることである。これも大きな相違点で、宮本版「及門録」の門人記載の枠組や学習内容の命名の仕方などにも曖昧さが認められる。逆に、そのような宮本版を参考にして作成されたと思われる増訂版『象山全集』は、整理され

た記載枠組に整然と門人名を記載しており、また教育の時期と内容の名称も統一されており、「訂正」の跡が具体的に認められる点である。

また、第三の相違点としては、「訂正及門録」の場合は、6期に区分した前半部分の①②③④の4期分には「砲術稽古出座帳抄録」という「教授内容」を示す文言が欠落しており、単に時期区分の年号のみで門人名の記載名簿が構成されているという曖昧性や不自然性の問題である。これでは、西洋砲術を学んだ門人なのか、それとも儒学や洋学など他の教授内容を学んだ門人なのか、全く判別することが不可能である。

さらに第四の相違点としては、「訂正及門録」の後半部分の⑤「嘉永六癸丑歳六月砲術稽古出座帳抄録」と⑥「安政元甲寅歳正月砲術稽古出座帳抄録」（宮本版では「嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録」と「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」、「安政元」の次に「歳」が欠如）については、「歳」と「年」の記述表現の混在が認められることである。「訂正」の厳密性の欠如と言わざるをえない。

最後に指摘しておくべき点は、宮本版「及門録」では、3期構成の第3期の名称が、③「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」と、最後に「抄録」となっていることである。「抄録」とは「一部分を抜いて書きとめること。抜き書き。」（『大辞林』）という意味である。さすれば、この③の名簿は、「安政元寅正月」の「砲術稽古」への「参加者の一部」であり、他にも参加した門人が存在したと解することができる。同様に「訂正及門録」の方も6期構成の③④⑤⑥の4期に「抄録」と記されており、そこに記載されている象山門人は、各期の「砲術稽古」に参加した門人の全体ではないということになる。それでは、参加した他の門人は、何故に記載されなかったのか、その門人数は何名か、等々が全く不明である。例えば、象山の私塾は西洋砲術のみを教授する専門塾ではなく、洋学（蘭語原書の読解力や作文力の育成、蘭語原書の読解を通して西洋諸科学の知識技術の獲得）や儒学（佐藤一斎門下の著名な儒学者であった象山から儒学－朱子学、さらにはその理解の鍵となる易学や数理学など－を学習すること）の門人は、「砲術稽古」に不参加で、「訂正及門録」には記載されなかったと理解すれば、一応、納得できる問題ではある[104]。

以上は、宮本版「及門録」と増訂版『象山全集』の間にみられる形式上（表現

上）の相違（問題）である。次に、記載された門人に関する内容面での相違をみていきたい。まず、両史料に記載されている門人数は、井上論文で紹介された「及門録」（井上が実際に手にして見分した写本版）に記載された門人数は「409名」とされているが、その年次別の内訳は全く不明である。だが、宮本版「及門帳」では、門人名が年次別に記載されている。それ故に宮本版「及門録」を参考にして編纂された増訂版『象山全集』に記載された入門者を、宮本版「及門録」に記された年次別の門人数と比較して整理すると、以下のようになる。

宮本版との比較による増訂版『象山全集』の時期区分と入門者数

「増訂全集版「訂正及門録」と宮本版「及門録」の時期区分と入門者数」

増訂全集版「訂正及門録」		宮本版「及門録」
嘉永２年分（「嘉永二己酉歳」）	31名	32名
嘉永３年分（「嘉永三庚戌歳」）	123名	122名
嘉永４年分（「嘉永四辛亥歳」）	58名	55名
嘉永５年分（「嘉永五壬子歳」）	40名	43名
嘉永６年分（「嘉永六癸丑歳六月砲術稽古出座帳抄録」）	140名	134名
安政元年分（「安政元甲寅歳正月砲術稽古出座帳抄録」）	71名	67名
合計	463名	453名

上記のように宮本版「及門録」と増訂全集版「訂正及門録」とを比較してみると、年次別の入門者数に多少の相違が認められる。したがって入門者の総数も異なっている。宮本版の場合は「453名」（重複記載の門人を含む）であるが、増訂全集版「訂正及門録」の方は「463名」（同前）で、増訂全集版の方には宮本版より10名ほど多い門人名が記載されているという事実が判明する。このことは、宮本版に記載されていない門人名が、増訂全集版「訂正及門録」においては新たに追加記載されているという事実を意味している。

そこで筆者が両史料を比較校合して追加記載された門人を調査した結果、増訂全集版「訂正及門録」に新たに追記された10名の門人とは次の人々であることが判明した（カッコ内の数字は入門年）。

①大谷宗三郎（嘉永３年）　②前田　周平（嘉永６年）

③伊藤　恭蔵（嘉永６年）　④石川準之助（嘉永６年）
⑤恒吉惣兵衛（嘉永６年）　⑥山口権左衛門（嘉永６年）
⑦津田　彌作（嘉永６年）　⑧中村直五郎（安政元年）
⑨津田　　貢（安政元年）　⑩尾林小平太（安政元年）

上記の人物が象山門人として新たに追記されたことに関しては、「訂正及門録」の作成に関わった宮本仲をはじめとする編纂委員会が、彼らを他の関係史料から析出して象山門人と判定できたが故に追記されたものと理解することができる。これも「訂正」の具体的な事例とみられる。

なお、上記10名の内の②前田周平から⑥山口権左衛門までの５名は、前後を大野藩の入門者に挟まれており、「訂正及門録」の「嘉永六癸丑歳六月砲術稽古出座帳抄録」に、「六月十七日入門」と連続して記載されている。それ故に、彼らは大野藩からの集団入門者とも考えられる（中津藩、松代藩、大野藩、加賀藩、熊本藩、佐倉藩、薩摩藩、土佐藩、上田藩、長岡藩、長州藩など、集団行動を基本とする西洋砲術・西洋兵学の性格上、象山塾の場合は、藩命による集団入門が多く、したがって門人名の記載も藩別に連続記載される場合が多い）。

実は、後者の「訂正及門録」を作成するに際しては、前者の「及門録」（『佐久間象山』所収）の著者で、当時、象山研究の第一人者であった宮本自身が、増訂全集版『象山全集』にも編纂顧問という責任ある立場で「訂正及門録」の編纂作業に参画していた。したがって、当然のことながら、宮本にとっても、自著『佐久間象山』に収録し公表した「及門録」を、後に紹介する京大版「及門録」その他の「及門録」と共に比較校合する際の重要な参考史料として活用し、各種の「及門録」の誤謬を比較校合して「訂正」した、いわば象山門人帳史料「及門録」の「総括版」として「訂正及門録」を編纂するのが理想であり、それが可能であったはずである。事実、増訂全集版『象山全集』（第５巻）に所収の「訂正及門録」の前書き（筆者注記：同史料を理解し使用する場合の留意点の明記）には、編纂委員会によって、「各種の史料に對照して幾多の訂正を加へ、又更に京都帝國大學圖書館に保存せられたる門弟故北澤正誠の傳へたる及門録寫本とも對校（異本同士を突き合わせて校合すること）」[105]としたことが明記されており、対校史料として京大版（北澤版）「及門録」その他の「及門録」が活用された事実を記し

ている。そのように多種様々な観点から誤謬を訂正する編纂作業を経て、最終的に出来上がった最新の象山門人帳史料、それが増訂全集版『象山全集』所収の「訂正及門録」であった。したがって「訂正及門録」には、宮本版など他の「及門録」には記されていない新たな門人名が、多数、追加されている。と同時に、重複記載を訂正するために、削除された門人も記載されている。だが、整理された新たな「訂正及門録」の門人総数は、宮本版「及門録」より10名増に止まっており、意外に増加してはいない。

以上のように、各種の「及門録」を含めて可能な限りの象山門人関係史料を活用して、新たな「訂正及門録」の編纂に取り組んだ結果が、増訂全集版『象山全集』第５巻（昭和10、1935年）に収められ公表された「訂正及門録」であった。日本の教育界において絶大な権威と信頼を得ている信濃教育会が編纂し刊行した同史料は、なおも多くの問題点が内在した史料である。だが、公表以来、研究者をはじめ多くの日本人にとって、幕末期日本の先覚的思想家と評される佐久間象山の私塾に、全国各地から参集して東西両洋の学問を学んだ門人たちには、一体、どのような人物がいたのか。そのような知的欲求を抱く人々が、同史料によって多くの未知の象山門人を知りえたことは幸いなことであった。だが、誤りは正されなければならない。前述のごとく編纂委員会が総力を挙げて誤謬を訂正して編纂した「訂正及門録」には、まだまだ多くの誤りが内在する。その事実を認識して活用すると同時に、一つでも誤りを析出して訂正し、より信頼性の高い象山門人帳史料に再生させる必要性がある。それは幕末期における日本近代化の先駆者である象山研究の最も基礎的研究であり、筆者をはじめとする研究者各位の担うべき責務でもある。

「原本」でないが故に「訂正及門録」は誤謬の多い未完成の象山門人史料

信濃教育会は、増訂版『象山全集』を刊行するに際して、新たに象山門人帳史料「訂正及門録」を収録することとした。その際の課題は、すでに一般に公表されている、どの「及門録」（宮本版、京大版など）よりも精度の高い門人帳史料を「底本」として、それに可能な限りの訂正を施して全集に収録することであった。そのためには全集関係その他の史料を駆使して徹底的に誤謬を訂正することであった。歴史事実に反する誤りを発見して訂正することによって、従来の「及

門録」に内在する様々な誤謬（門人名、帰属する藩名や藩主名、等々の誤り）を可能な限り減少させる努力をしなければならなかったのである。

叙上のような宮本版や後述する京大版など、幾種類もの「門人帳」を比較校合して誤謬を訂正し、最終的には歴史史料としての信頼性を高めえたことを、編集委員会は、増訂版『象山全集』第５巻に収めた「訂正及門録」の冒頭に、「各種の史料に對照して幾多の訂正を加へ、又更に京都帝國大學圖書館に保存せられたる門弟故北澤正誠の傳へたる及門録寫本とも對校し、之を訂正及門録と名づけた」[106]と記している。宮本版や京大版、さらには増訂版『象山全集』への収録史料など、膨大な象山関係史料を分析して象山門人を析出し「及門録」に追加すること。それは、PCによるデータ処理のできなかった昭和戦前の手作業の時代にあっては、実に複雑な編纂作業であったに相違ない。膨大な史料との格闘作業を経て出来上がったのが、ベストではないがベターな象山門人帳名簿「訂正及門録」であったのである。その「及門録」は、門人名・帰属する藩名や藩主名などの真偽を、根拠となる関係史料の分析に基づいて吟味している。そのために、誤りがあれば、思い切った挿入や削除を重ね、それまでの宮本版や京大版を凌ぐ、より信頼性の高い作品に仕上げられているとみてよい。

とは言っても、信濃教育会の増訂版『象山全集』に収録された象山門人帳「訂正及門録」は、前述のごとく、象山存命中に門人自らが入門時に自署した、誤りの無い完全無欠な「原本」ではなかった。それ故に、どれほど「訂正」を繰り返しても、「訂正及門録」は「訂正及門録」であり「作為の産物たる未完の史料」であることに変わりはなかった。この厳粛な事実を最も理解していたのは編纂委員会の人々であった。それ故に編集委員会は、前述のごとく「訂正及門録」の冒頭に、「なほ不明の箇所も存し、未だ完璧を期し難し」[107]との「留意文（注意書き）」を書き記したに相違ない。最善を尽くしたにも拘わらず、なおも誤謬の残る未完の作品であることを編纂委員会自らが明記したことは、史料自体の信憑性や普遍性が厳しく求められる歴史研究の世界においては、実に勇気ある誠実な研究態度の表れといえるであろう。

「訂正及門録」に多数の「重複記載」の門人が存在する謎

これまで様々な角度から検証してきた通り、増訂版『象山全集』に収録された

象山門人帳史料「訂正及門録」は、決して「原本」そのものではなく、象山没後に作成された作為的な史料（二次史料）とみなければならない。「訂正及門録」は、当該年月に実施された象山塾一門の野外での西洋砲術練に参加した門人名簿「砲術稽古出座帳抄録」（嘉永６年６月と安政元年正月の２回分の「砲術稽古出座帳」）を含む幾多の門人関係史料を、象山没後に門人たちが分析し整理して合冊して、いわゆる「及門録」と呼ばれる象山門人帳の基となる「祖型」を作成した。次に、その祖型に門人たち象山関係者が、蒐集した門人関係史料の中から象山門人であるか否かの真偽を吟味して、追記や削除などの訂正を加え、可能な限りの修正を施した門人帳史料にし、さらには関係者の回想に基づく聞き書き史料も活用して追記や削除も施した。

かくして、門人たち象山関係者が熱望した「恩師象山先生の下で共に学んだ同門同窓の門人リスト」は出来上がり、象山門人帳史料の「原本」の意味を有する「及門録」と名づけられた。その原本は幾冊も書写されて世間に流布した。それ故に、関係諸史料の合冊で編成されている同史料には、編纂委員会によって「重出」と付記された「門人名の重複記載」が数多く認められるのは当然である。信濃教育会の編纂委員会も、この否定しえない事実を編纂過程で問題として認識していたはずである。それ故に「訂正及門録」の門人氏名の上欄に、敢えて２度目から複数回、登場する門人名には「重出」と付記せざるを得なかったものと思われる。編纂委員会が、「訂正及門録」に「重出」と明記した人物は、次の10名である（門人名の上欄に記載）。

【嘉永６年分の記載に付記された重複門人（５名）】
①竹内而平（初出は嘉永５年分に記載）、②野中太内（初出は当該年の記載分に「野中太郎」（誤記）で記載）、③宮原治郎左衛門（初出は嘉永４年分に記載）、④折田與右衛門（初出は嘉永５年分に記載）、⑤阿部喜東次（初出も再出も同じ嘉永６年分に記載）

【安政元年分の記載に付記された重複門人（５名）】
⑥藤原重太（初出は嘉永３年分に記載）、⑦簗又之丞（初出は嘉永４年分に記載）、⑧岡虎之助（初出は嘉永５年分に記載）、⑨山田幸兵衛（初出は嘉永

6年分に記載)、⑩小笠原勇之助（初出は嘉永5年分、2回目は嘉永6年分、3回目は安政元年分に記載の「三重出」）

編集委員会によって増訂版『象山全集』に「重出」と付記された人物は、上記の10名である。だが驚くなかれ、実際には、この数を遙かに上回る重複記載の人物が存在するのである。しかも、「二重出」ばかりでなく、3度も記載される「三重出」の事例も幾人か認められるのである。

まず、「三重出」の問題を先に説明すると、この事実に関して編纂委員会は全く触れず、したがって「三重出」が存在する事実を示す記載は全くなく、単に他の「二重」の記載と同様の「重出」という扱いで処理されている。しかし、前述のごとく、同一門人の重複記載は、砲術練稽古の度に参加していれば、何度でも門人として記録される仕組みであるが故に、「二重」ばかりか「三重」の重複記載が発生するのも当然のことであった。

例えば「三重出」の門人の他の実例を上げて説明すると、嘉永4年分（No.161）に「薩州　宮原次郎左衛門」という門人名が記載されている。これが「及門録」における最初の記載であるが、2度目の記載は嘉永5年分（No.215）に「同（薩州藩）　宮原次郎左衛門」とあり、さらに同6年分（No.369）にも3回目の記載となる「重出　宮原治郎左衛門」と記載されており、合計3度、「訂正及門録」に登場するのである[108]。

以上のような「三重出」の門人が内在するという矛盾もまた、「訂正及門録」が真に象山門人自らが入門を時系列（そのとき、その場で、その人が）で署名した「象山門人録」の「原本」ではないことの具体的な証左といえる。

さらに問題とされなければならない矛盾点は、信濃教育会が増訂版『象山全集』を編纂する際に、可能な限り正確を期そうと訂正作業に苦心されたにもかかわらず、刊行された増訂版全集所収の「訂正及門録」には、編纂委員会が「重出」と付記しなかった人物が、なおも数多く存在するという事実である。しかも、その数は、付記されている人数（10名）の2倍を超える多数、存在するのである。この矛盾は驚くべき事実である。このように、多数の「重出」を見落としていること、また「三重出」に気づかず、全てを「二重出」で処理してしまうという明白な誤謬について、なぜ象山研究の専門家で編成する編纂委員会は気づかなかった

のであろうか。「重出」の内実は、「二重出」と「三重出」とに類別されるべき問題であったのである。

筆者の分析によって新たに発見できた「重出」の内の「二重出」は、次にあげる22名である。なお、下記の記述において、門人名の冒頭に付した「No.」は、「訂正及門録」の最初（嘉永２年）の「白井平左衞門」を「No.1」としてはじまる増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」に記載された年次別の門人を一覧化したものであり、本文に提示した筆者作成の「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」の門人記載の処理番号と同じである。また、前述のごとく、門人名の後のカッコ内の数字は、「訂正及門録」における記載年（一般に入門年を表すと理解されている）を示す。その場合、例えば嘉永２年に記載分は「嘉永２」、安政元年に記載分は「安政元」と略記する。

「訂正及門録」に記載されない「重出」の門人	
①［No.90・409］荒尾五郎三郎（嘉永３、安政元）	②［No.247・383］逸見六郎（嘉永５、６）
③［No.185・411］内田庄四郎（嘉永４、安政元）	④［No.417・458］梶木軍兵衞（安政元）
⑤［No.237・316］河井継之助（嘉永５、６）	⑥［No.230・363］川勝光之助（嘉永５、６）
⑦［No.174・331］川島鋭次郎（嘉永４、同６年に「誤記」の「河島永次郎」で重複、明治に入って「三島億二郎」と改名）	⑧［No.99・460］澤田衞介（嘉永３、安政元）
⑨［No.59・295］高橋浪江（嘉永３、６）	⑩［No.104・368］高村直蔵（嘉永３、６。前者は「土佐藩　高橋直蔵」と記されてはいるが、「高橋」は「高村」の誤記）
⑪［No.74・408］戸倉新右衞門（嘉永３、安政元）	⑫［No.61・433］友野俊蔵（嘉永３、安政元）
⑬［No.194・354］野澤簑蔵（嘉永４、６）	⑭［No.227・262］野村松次郎（嘉永５、６）
⑮［No.159・364］伴鐵太郎（嘉永４、６）	⑯［No.306・314］弘田善助（嘉永６年の同年に再度「弘田善助」との記載があり「二重出」の記載。「平田」は誤りで「弘田」が正しい）。

⑰［No.26・444］松木源太郎（嘉永２、安政元。なお、嘉永６年の「大野藩　松金太郎」は松代藩の「松木源太郎」と推察されるが確定できない故に「三重出」とは見ず、「重出」として処理）。	⑱［No.278・310］宮田兵十郎（嘉永６、同年に「宮田平十郎」で重複。「兵十郎」は誤りで「平十郎」が正しい）
⑲［No.130・413］渡邊銀次郎（嘉永３、安政元）	⑳［No.245・394］溝淵廣丞（嘉永５、同６年に「溝口廣見」で重複記載。「廣見」は誤りで「廣之丞（廣丞）」が正しい）。
㉑［No.374・406］村岡治八郎（嘉永６、安政元には「村岡金八郎」で重複。越前勝山藩の嫡男・小笠原勇之助の家来）。	㉒［No.234・315］泉澤彌太郎（嘉永５、６。なお No.301の「大野　若澤彌太郎」は「泉澤彌太郎」の誤記で「三重出」と考えられるが、ここでは別人と扱い「二重出」として処理）。

なお、上記の22例の他にも同一門人の「三重出」と推察される事例が存在する。例えば「No. 246・356・465］の「小笠原勇之助」の場合である。彼については、「訂正及門録」では「安政元年分記載」の氏名の頭書に「重出」とだけ記されているが、「三重出」の門人であることまでは事実確認されていない。「訂正及門録」では、その基とした写本の一種の「及門録」の誤謬を「訂正」する編纂作業の過程で「二重出」も「三重出」も全て「重出」と把握し処理しているからである。しかし、「小笠原勇之助」は、「越前勝山（侯御嫡）」（No.246）との添書もあり、問題なく「訂正及門録」に記載された３回の氏名は同一人物と認識でき、単なる「二重出」ではなく「三重出」なのである。また、同様に「No.161・215・369」の３名の「宮原次郎左衞門」も、「訂正及門録」では「重出」と添書され「二重出」と理解されてはいる。だが、彼等は明らかに薩州藩の同一人物とみられるが故に「三重出」として処理した。

さらに問題なのは、「訂正及門録」の嘉永５年（1852）の門人リストに最初に記載された「No. 234　加州本多周防守殿家來　泉澤彌太郎」、嘉永６年に２度目の記載の「No.301　大野　若澤彌太郎」、同じく嘉永６年に記載の「No.315　加州　泉澤彌太郎」の３名は、同一人物と推定され、「三重出」と考えられることである。「泉澤」と「若澤」との相違はあるが、毛筆で草書体の幕末文書を解読するとき、両者を判別しえない場合がある。また、物騒な幕末動乱期には護身の

ために藩名や氏名を意図的に改変することも一般的になされており、「泉澤」と「若澤」の場合は、帰属する藩名が「加州」（加賀藩）と「大野」（越前大野藩）とに別記されている。このような記載上の矛盾は認められるものの、実際には３名は同一人物、即ち「土佐藩」の「岩崎彌太郎」ではないかと推察できるのである。しかし、本稿では、断定するには裏付けとなる史料が不足であるが故に、３名を同一人物と確定して「三重出」とはせず、「加州」（加賀藩）の「泉澤彌太郎」の「重出」と判断し、「二重出」として処理した。

同様に、「No.277　同（大野藩）　廣田文吉」「No.314　土州　弘田善助」「No.357　土州　古田小膳」の３名は同一人物で、「土佐藩」の「弘田善助」と推察される[109]。「No.357　土州　古田小膳」という記載は、同じ土佐藩門人である「廣田善助」と「寺村左善」（「No.333　加村左膳」、「寺村」を「加村」と誤記）の混同（記憶違い）から生じた門人名と考えられる）。しかし、判別する確かな史料が十分でないが故に「三重出」と認定することはできず、「弘田善助」の「二重出」として処理した。

さらにまた「No.26・444　松代藩　松木源太郎」と「No.273　同（大野藩）松　金太郎」の場合も、一見すると同一人物で「三重出」と考えられるが、毛筆史料の誤読とは考えられず、また帰属する藩名も異なるが故に別人物と判断し、「松代藩　松木源太郎」の「二重出」として処理した[110]。

以上のような「訂正及門録」における様々な問題事例の存在を踏まえて、「重出」を「二重出」と「三重出」とに分別して「重記」の問題を考えると、「訂正及門録」に「重出」と付記されてはいないが、明らかに「重出」と確認できる門人は、「二重出」が22名、「三重出」が２名、存在することが発見された。これらの事実を踏まえて、筆者が新たに析出した重複記載の門人を除外した「訂正及門録」に記載された門人の実数は24名も減少する。これに増訂版全集に所収の「訂正及門録」に編纂委員会が記した「重出」の記載が10組10名、存在する。したがって「訂正及門録」に記載された合計463名の内で重複する門人の小計は34名（「二重出」10名＋22名＋「三重出」２名）を数え、これを総数から減じた実数は429名となるのである。

「象山門人帳」と信じられてきた増訂版全集の「訂正及門録」に記載された門人数には、多くの重複記載があり、門人の実数はかなり減少する。だが、門人数

の減少それ自体に問題があるというのではない。筆者は、これまで多くの門人帳を見てきたが、管見の限りでは、これ程まで多くの重複記載者が認められる門人帳は、他の如何なる私塾にも例をみないということである。

この一事をもってしても、「訂正及門録」を含めた「及門録」と呼ばれる全ての象山門人帳史料「及門録」が「一次史料」としての「実物（原本）」ではないという本質的な実態が明らかとなり、筆者が主張してきた仮説(「及門録」は、同門同窓の象山関係者によって残された断片的な門人関係史料と同門同窓の人々の記憶に頼るという曖昧な「聞き書き資料」などを集めて作成された作為的な「二次史料」)が正しいことを裏付けるものである、ということである。

以上の分析結果に基づいて、「訂正及門録」における記載者総数463名から重複記載(「三重出」を含む）の34名（編纂委員会記載の重出者数と筆者析出の重出者数の合計）を差し引いた実数429名を、年次別の入門者数に分類して全体をまとめると、次の一覧表のようになる（下記の一覧表における「重出」の記載カウントは、「初出」ではなく、「再出」の年で計算し作成されている)。

「訂正及門録」における門人名の重複記載数一覧

記載年	記載者数	二重出者数	三重出者数	記載者実数
嘉永２年分記載	31名	0名	0名	31名
同　３年分記載	123名	0名	0名	123名
同　４年分記載	58名	0名	0名	58名
同　５年分記載	40名	1名	0名	39名
同　６年分記載	140名	18名	1名	121名
安政元年分記載	71名	13名	1名	57名
合　計	463名	32名	2名	429名

幕末期の軍事科学系洋学私塾では、高島秋帆、下曽根信敦、江川坦庵など、また医学系洋学私塾では緒方洪庵（適々斎塾)、伊東玄朴（象先堂)、佐藤泰然（順天堂）など、これまでに筆者は近世幕末期の洋学系私塾の門人録（門人名簿）を調査してきた。だが、そこには象山塾の「及門録」のような「二重出」や「三重出」などという重複記載は全く認められず、いずれの門人帳も自署を基本として

時系列で入門者の氏名その他の必要事項が整然と記載されているという共通点を有していた。幕末期の各種の洋学塾のみならず、近世社会における国学、漢学、東洋医学、さらには武道・茶道・華道、等々の私塾の門人帳においても、管見の限りでは、象山塾のように多数の門人記載の重複が認められる事例は目にしたことがない。「及門録」における重複記載者数の多さも問題であるが、それ以上に重複記載者が存在するということ自体が私塾の門人帳としては問題であり、この一事をもってしても「及門録」が象山塾の門人帳の「実物（原本）」として存在しえたことが疑問であり、筆者の仮説を証明する論拠（恩師象山没後に門人有志によって作成された作為的な「二次史料」）といえるのではないか。そう考えざるをえない。

以上は、増訂版全集に収録された象山門人帳史料と言われる「訂正及門録」に内在する同一門人の重複記載という問題の実態を具体的に分析し、その研究史料としての問題性を分析し開示したものである。実は、「訂正及門録」には、叙上のような門人の重複記載問題の他にも重大な問題が幾つもあり、厳しく検証されなければならないのである。それらの問題については、別稿ですでに詳細に比較分析し解明してある[111)]。

本稿で、次に取り上げる内容は、「訂正及門録」における重大と思われる問題の内、記載された門人たちの帰属する藩名や藩主名などの誤謬が多数、存在するという問題を具体的事例を析出して指摘し、これを是正することである。

「訂正及門録」に記載門人の帰属する藩名や藩主名などの誤謬

増訂版『象山全集』に収められた「訂正及門録」は、研究者レベルでも「象山門人の入門録」と理解され使用されてきた。そこに記載された400名を超える象山門人の圧倒的多数の身分は、武士階級であった。幕臣（大名嫡男・旗本・御家人など）とその家臣、そして多くは大名の家臣（家老などの重臣から足軽に至る）である武士階級やそれに準ずる郷士階級、さらには大砲その他の洋式兵器の製造に不可欠な職人たちも含まれていた。だが、何と言っても「訂正及門録」に記載された門人の圧倒的多数を占めたのは全国50余藩から参集した大名家（藩）の家臣たちであった。

幕末期といえども、武士たちが基本的に自らのアイデンティティを保ちうる根

拠は、藩又は幕府の武士階級に帰属する存在であるという自尊の自覚であった。それ故に幕末期を含めた近世私塾の門人帳には、入門者の氏名と帰属する藩名あるいは藩主名が自署されるのが常であった。そこで象山塾の門人帳とされてきた「訂正及門録」の重大な問題として浮上するのが、後掲の筆者作成の「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」をみれば一目瞭然であるが、入門者の藩名や藩主名などに多数の誤謬が認められることである。幕末期といえども入門する武士たちが、自分の帰属する藩名や藩主名を違えることはありえないことであった。しかしながら「訂正及門録」を詳細に分析すると、ありえないはずの藩名や藩主名の誤りが多数、確認されるのである。

例えば「訂正及門録」の「No. 79」の「山田貫兵衛」（上田藩）は、「松平加賀守様御家來」と加賀藩主の官職名が記されている。だが、それは誤りで、上田藩主の官職名は「松平伊賀守」なのである。逆に、「訂正及門録」という史料名に値する「訂正」の事例として「No. 228」の「川勝恆五郎殿」の頭書には「後丹波守殿」と記されている事例をあげることができる。実は宮本版「及門録」では「後丹後守殿」と誤記されているのを、「訂正及門録」で「後丹波守殿」と「訂正」されていることがわかる[112]。同様に「No.246」の「小笠原勇之助殿」の頭書「越前勝山（侯御嫡）」という記載は越前勝山藩主の嫡男を意味している[113]。さらに「No.32　酒井修理大夫様御家來　片山平左衛門」は、宮本版の「酒井修理太夫様家來　片山平左衛門」の誤りを訂正していることがわかる事例である。

上記のような入門者の帰属する藩主名の誤記も問題であるが、「訂正及門録」における重大な誤りは帰属する藩名の誤記である。その具体的な事例を次に10例ほどあげる。特に注目すべきは、帰属する藩名の誤謬が多い土佐藩の門人の場合である。

①「No.104. 同（中津藩）高橋直蔵」→門人名「高村直藏」を「高橋直藏」と誤記し、藩名も「中津藩」は「土佐藩」の誤記
②「No.250. 同（大野藩）樋口眞吉」→「同（大野藩）」は「土佐藩」の誤記
③「No. 251. 同（大野藩）桑原介馬」→「同（大野藩）」は「土佐藩」の誤記
④「No.277. 同（大野藩）廣田文吉」→門人名「廣田文吉」は「弘田善助」の誤記で、藩名も「大野藩」は「土佐藩」の誤記

⑤「No.302. 同（大野藩）平尾喜内」→「同（大野藩）」は「土佐藩」の誤記
⑥「No.306.　平田善助」→門人名の「平田善助」が「弘田善助」の誤記で、藩名も「土佐藩」が欠落
⑦「No.307. 熊本　兼崎昌司」→「熊本（藩）」は「徳山藩」の誤記
⑧「No.321. 藩名・氏名共に不記」→記載されるべき門人名は「溝淵廣之丞」で、藩名が「土佐藩（土州）」と記載されるべきところも不記
⑨「No.394. 溝口廣見」→藩名が不記であるが「土佐藩」
⑩「No.235. 仙石藩　加藤土代士」→宮本版の「仙臺（藩）加藤土代士」（後の加藤弘之）は「仙石藩」（但馬国）の誤記

上記の他にも誤記ではないが藩名不詳の門人が幾人もいる。いずれにしても、入門するときに本人が門人帳に自署する場合、自分の帰属する藩名・藩主名を誤記したり失念することは、武士としてのアイデンティティ（identity）の喪失であり、到底、考えられないことである。

帰属する藩名や藩主名だけでなく、門人名そのものの誤記も多く認められる。この問題は、宮本版「及門録」と比較して「訂正及門録」を分析してみると明白となり、しかも「訂正及門録」でどこがどのように「訂正」されたかも分かるのである。

この事実を具体的に説明すると、下記の一覧表に示した事例は、同一事項に関して、「訂正及門録」の記載内容と宮本版「及門録」のそれの異同を示し、矢印「→」は「訂正及門録」の「訂正」が正しいことを、矢印「←」は「訂正」によって正しい記載が誤った記載になった「訂正ミス」を示している。同様に下線の細線「―」は両史料とも誤った記載、太線「━」は太線の方が正しい記載であることを示している。また、一覧表の右端の「正誤」の枠は、「訂正」が正解である場合は「正」、逆に「訂正」が誤りで宮本版の記述が正解である場合は「誤」、さらに史料的に正誤の判断が不能である場合は「不（―）」と記載した。

【増訂版『象山全集』における「訂正」の正誤一覧表】

宮本版「及門録」	訂正	増訂全集版「及門録」	正誤
① No.　2「(松代藩)　山寺源太夫」	→	「同(松代藩)　山寺源大夫」	正
② No. 10「江川傳書三冊口傳　増井助之丞」	→	「同(松代藩)　江川傳書三冊口傳　増田助之丞」	正
③ No. 18「東福寺村　和田盛之助」	→	東福寺村(松代藩領)　和田森之助」	正
④ No. 20「(松代藩)　寺澤六之助」	→	「松代藩　寺澤大之助」	正
⑤ No. 26「(同)　(松代藩)　松木源八」	←	「同(松代藩)　松木源太郎」 ※安政２年に「源太郎」を「源八」に改名、改名前。	誤
⑥ No. 32「酒井修理太夫様家來	→	「酒井修理大夫様御家來	正
七拾一歳入門　片山平左衛門」	←	五十九歳入門　片山平左衛門」 ※宮本版「太夫」を「大夫」に「訂正」は正解。だが、「七拾一歳」を「五十九歳」に「訂正」は誤り。	誤
⑦ No. 36「松平肥前守様家來　木島藤太夫」	→ ←	「松平肥前守様御家來　本島藤大夫」 ※正しくは「本島藤太夫」。「本島」は正しいが「大夫」は「太夫」の誤り。	正 誤
⑧ No. 39「秋山矢三郎様家來　島田敬介」	→	「秋山兵三郎様御家來　島田敬介」	正
⑨ No. 46「奥平大膳大夫様家來　島津良助」	→	「奥平大膳大夫様御家來　島津良介」	正
⑩ No. 47「松平阿波守様家來　高畑五郎」	—	「松平阿波守様御家來　高畑五郎」 ※両史料とも「高畑」は誤りで「高畠」が正解。	不
⑪ No. 57「　久保勘五郎殿」	→	「　久保勘治郎殿」	誤
⑫ No. 79「松平伊賀守様御家來　山田貫兵衛」	←	「松平加賀守様御家來　山田貫兵衛」 ※上田藩第７代藩主松平忠礼は「伊賀守」	誤
⑬ No. 82「(奥平大膳大夫様家來)　神谷源内」	←	「同(奥平大膳大夫様御家來)　神戸源内」	誤
⑭ No. 86「(奥平大膳大夫様家來)　福知新助」	→	「同(奥平大膳大夫様御家來)　福知新介」	正
⑮ No. 94「(奥平大膳大夫様家來)　柴山茂助」	→	「同(奥平大膳大夫様御家來)　柴山茂介」	正
⑯ No. 122「(中津藩)　渡邊馬介」	→	「同(中津藩)　渡邊爲介」	正
⑰ No. 140「松平播磨守様家來　原田軍太夫」	←	「松平播磨守様御家來　原田軍大夫」	誤
⑱ No. 161「薩州　宮原治郎左衛門」	→	「薩州　宮原次郎左衛門」	正
⑲ No. 174「牧野備前守様家來　川島鋭次郎」	—	「牧野備前守様御家來　川島鋭次郎」 ※「No. 256」の宮本版「牧野備前守様家來（長岡藩）三島　億次郎」（誤記）が「訂正及門録」では「削除」され「空　欄」で藩名も門人名も不記に「訂正」。 ※入門当時(「No. 174」の「嘉永三年」)の氏名は「川島鋭次郎」。「安政六年」に「川島億次郎」と改め、さらに象山没後の明治維新以降に「三島宗右衛門」を経て「三島億二郎」と改名。	不

⑳No. 178「奥平大膳大夫様家來　思田半五太郎」	→	「奥平大膳大夫様御家來　八月六日　**恩**田半五太郎」	正
㉑No. 179「奥平大膳大夫様家來　**八月六日** 筑紫純次郎」	→	「同（奥平大膳大夫様御家來）　**築**紫純次郎」	正
㉒No. 189「藤堂和泉守様御家來　符田惣次郎」	→	「藤堂和泉守様御家來　鹽田重弦記 八月八日　**蒔**田惣次郎」	正
㉓No. 197「　荒木謇之進」	→	「　荒木謇之**助**」	正
㉔No. 215「同（薩州藩）　宮原治郎左衛門」	→	「同（薩州藩）　宮原**次**郎左衛門」	正
㉕No. 221「中津藩　荒木二郎**太**夫」	←	「中津　荒木二郎大夫」	誤
㉖No. 223「松平因幡守様家來　荒木千葉介」	→	「松平因幡守様御家來　荒**尾**千葉介」	正
㉗No. 228「後丹後守殿　川勝**恆**五郎殿」	→	「後**丹波**守殿　川勝恒五郎殿」 ※旧漢字「**恆**」を新漢字「恒」に「訂正」は新旧混在。	正
㉘No. 235「仙臺　加藤土代士」	→	「**仙石藩**　加藤土代士」	正
㉙No. 241「尾州藩　辻仲殿　辻彌兵衛」	→	「尾州藩　**辻仲殿**（辻彌兵衛）」	正
㉚No. 245「土州藩　溝淵**廣之丞**」	←	「土州藩　溝淵廣丞」 ※「安政二年」に「廣丞」を「廣之丞」と改名。入門時点では「廣丞」が正解。	誤
㉛No. 250「同（大野藩）　樋口眞吉」	—	「同（大野藩）　樋口眞吉」 ※両者共に「大野藩」は誤りで正しくは「土佐藩」。	不
㉜No. 251「同（大野藩）　桑原介馬」	—	「同（大野藩）　桑原介馬」 ※両者共に「大野藩」は誤りで正しくは「土佐藩」。	不
㉝No. 255「佐賀藩　佐藤久平」	→	「佐賀藩　佐藤**文**平」	正
㉞No. 257「大野藩　（嘉永六年）六月五日入門 安藤與四郎」	—	「大野藩　（嘉永六年）六月三日入門　安藤與四郎」 ※入門日付を訂正。記載順位が７名後の門人が同じ「大野藩」で「六月五日」と付記されていることから逆算して「六月三日」と訂正したと推察されるが、その史料的根拠はない。	不
㉟No. 264「（大野藩）　岡與三左衛門」	→	「六月五日入門　岡與三右衛門」 ※入門月日を付記し、「左」を「右」に訂正。両者共に「大野藩」であることは不記。	正
㊱No. 277「同（大野藩）　廣田文吉」	—	「同（大野藩）　廣田文吉」 ※両史料共に「大野藩廣田文吉」と処理。これは誤りで「土佐藩弘田善助」が正解。他にも土佐藩門人が大野藩その他に誤記された事例が多く存在。	不
㊲No. 292「同（大野藩）　中安伊右衛門」	→	「同（大野藩）　中安伊**左**衛門」	正
㊳No. 301「同（大野藩）　若津彌太郎」	—	「同（大野藩）　若澤彌太郎」 ※「若津」を「若澤」に訂正。「若津」「若澤」「泉澤」の３名は同一人物で、土佐藩の「岩崎彌太郎」の変名と推察。	不

㊴No. 302「同(大野藩)　平尾喜内」	—	「同(大野藩)　平尾喜内」 ※誤った「大野藩」を「土佐藩」に訂正せず。	不
㊵No. 305「　河野軍太夫」	←	「　河野軍大夫」 ※「軍太夫」を「軍大夫」と「訂正」は誤り。	誤
㊶No. 306「(嘉永六年)九月十一日入門　平田善助」	—	「(嘉永六年)九月十一日入門　平田善助」 ※「平田善助」は「弘田善助」の誤り、藩名も不記だが「土佐藩」が正解。	不
㊷No. 307「熊本　兼崎昌司」	—	「熊本　兼崎昌司」 ※「熊本藩」は「徳山藩」の誤りを「訂正」せず。	不
㊸No. 310「　宮田平十郎」	→	「　宮田兵十郎」	正
㊹No. 315「加州　泉澤彌太郎」	—	「加州　泉澤彌太郎」 ※「泉澤彌太郎」は「加州(加賀藩)」ではなく「土佐藩」の「岩崎彌太郎」の変名と推察。	不
㊺No. 317「(嘉永)六年九月十六日入門　生田彦次郎」	→	「(嘉永)六年九月十六日入門　生田彦四郎」 ※「彦次郎」を「彦四郎」と「訂正」は正解。	正
㊻No. 318「　萩野柔進」	→	「　荻野柔進」 ※「萩原」を「荻野」に「訂正」は正解。	正
㊼No. 319「小笠原左京大夫内　松宮薫助」	→	「小笠原左京大夫内　松宮董助」 ※誤った「薫助」を「董助」に訂正。「小笠原左京大夫」は小倉藩主。	正
㊽No. 326「同(土佐藩)　井上佐一郎」	→	「土州(嘉永六年)九月廿五日入門　井上佐市郎」	正
㊾No. 328「佐土原　伊十知早馬」	→	「佐土原　伊地知早馬」	正
㊿No. 331「　河島永次郎」	—	「　河島永次郎」 ※氏名のみ記載。両史料とも入門時の「河島永次郎」は誤りで「川島鋭次郎」(長岡藩)が正解。	不
51No. 332「尾州(嘉永六年)十月三日入門　早瀬權右衛門」	→	「尾州(嘉永六年)十月三日入門　間瀬權右衛門」	正
52No. 333「外雲關小藩　加藤左膳」	—	「　加村左膳」 ※「外雲關小藩」を削除し「加藤」を「加村」に訂正。だが、両者とも誤りで、「寺村左膳」(土佐藩)が正解。	不
53No. 339「　鴨折彌太夫」	→	「　鴨折彌大夫」	正
54No. 342「麾本　山岡熊次郎」	→	「旗本(旗本)　山岡熊次郎」	正
55No. 345「上田十月八日入門　蔭山半藏」	→	「上田十月八日入門　影山半藏」	正
56No. 347「上田十月八日入門　鎌原伊理右衛門」	←	「上田十月八日入門　□原伊理右衛門」 ※「鎌原」を「□原」と訂正は誤認。	誤
57No. 351「　岡部健六」	→	「　園部健六」	正
58No. 352「上田　恒川才八郎」	→	「上田(嘉永六年)九月十五日入門　恆川才八郎」 ※新漢字を旧漢字に「訂正」して統一。	正

⑤⑨No. 356「土州（嘉永六年）九月十七日入門　小笠原勇之助殿」	—	「（嘉永六年）十月十七日入門　小笠原勇之助殿」 ※「土州」を削除。「小笠原勇之助殿」は越前勝山藩主の嫡男。	不
⑥⑩No. 357「土州　古田小膳」	—	「土州（嘉永六年）十月十九日入門　古田小膳」 ※両史料とも「古田小膳」で誤り、「寺田左膳」が正解。	不
⑥①No. 359「同（土州）（嘉永六年）九月十九日入門　野中太郎」	—	「土州（嘉永六年）十月十九日入門　野中太郎」 ※両史料とも「太郎」は誤り、「野中太内」が正解。	不
⑥②No. 363「九月十七日入門　川勝光之助（殿）」	→	「九月廿一日入門　川勝光之助（殿）」 ※入門月日を「訂正」し、「幕臣」なので「殿」を「付記」。	正
⑥③No. 370「　折田與左衛門」	→	「　折田與右衛門」	正
⑥④No. 371「　上川記左衛門」	→	「　上川喜左衛門」	正
⑥⑤No. 372「薩州　橋口源左衛門」	→	「薩州　橋口源右衛門」	正
⑥⑥No. 375「　阿部喜東治」	→	「　重出　阿部喜東次」 ※「重出」を付記し「治」を「次」に訂正。	正
⑥⑦No. 382「同（大垣）　明石辨之助」	←	「大垣　明石弁之助」 ※旧漢字「辨」を新漢字「弁」に「訂正」は旧字体で統一の編集方針に反し訂正ミス。	誤
⑥⑧No. 387「熊本　十二月七日　荘村助左衛門」	→	「熊本　十二月七日　荘村助右衛門」	正
⑥⑨No. 389「　三浦治郎右衛門」	→	「　三浦次郎右衛門」	正
⑦⓪No. 394「　溝口廣召」	→	「　溝口廣見」 ※誤った「廣召」を「廣見」に訂正。「土佐藩」は不記。	正
⑦①No. 403「大垣戸田家老臣諱忠寛字栗卿通称二兵衛鐵心と號す　小原二兵衛」	→	「大垣　小原仁兵衛」 ※「二兵衛」を「仁兵衛」と訂正。「小原仁兵衛」は象山門人の中心的人物の一人。	正
⑦②No. 410「中津　荒尾繁五郎」	→	「中津藩　荒尾繁次郎」 ※「五郎」を「次郎」に訂正。	正
⑦③No. 411「中津藩　内田左四郎」	→	「中津藩　内田庄四郎」	正
⑦④No. 412「土州　大場義之丞」	→	「土州　大場義兵衛」 ※誤った「義之丞」を「義兵衛」に訂正。	正
⑦⑤No. 414「中津　築又之亟」	←	「中津　重出　築又之丞」 ※旧漢字「又之亟」を新漢字「又之丞」に「訂正」はミス。	誤
⑦⑥No. 433「同（松代）　友野傳藏」	→	「同（松代）　友野俊藏」 ※「傳藏」を「俊藏」に訂正。	正
⑦⑦No. 434「同（松代）　根本順藏」	→	「同（松代）　根來順藏」	正
⑦⑧No. 436「同（松代）　畑權之丞」	→	「同（松代）　畑權兵衛」	正

⑲No. 439「水野筑後守息　水野甲太郎」	←	「筑後守息　水野甲太郎」 ※「水野筑後守息」を「筑後守息」と略記はミス。	誤
⑳No. 441「中津　安食鑄次郎」	→	「中津　安食銈次郎」 ※「鑄次郎」を「銈次郎」に訂正。	正
㉑No. 443「同(松代藩)　廣澤峯吉」	→	「松代領　廉澤峯吉」	正
㉒No. 447「同(松代藩)　大森藏之丞」	→	「松代領　大森莊兵衛」	正
㉓No. 450「　藏田言合右衛門」	→	「　藏田言合左衛門」 ※「右衛門」を「左衛門」と訂正。藩名を「松代藩」と付記せず。	正
㉔No. 453「同(松代藩)　川面誠之助」	→	「　川面城之助」 ※「誠之助」を「城之助」と訂正。藩名を「松代藩」と付記せず。	正
㉕No. 456「　向山正朝」	→	「　向山正朔」 ※「正朝」を「正朔」と訂正。藩名を「松代藩」と付記せず。	正
㉖No. 458「　梶木軍之亟」	→	「　梶木軍兵衛」 ※「軍之亟」を「軍兵衛」と訂正。藩名を「松代藩」と付記せず。	正
㉗No. 461「(大垣)　廣木田兵次郎」	→	「(大垣)　唐木田兵次郎」	正
㉘No. 469「　奥田粂之助」	→	「　奥田久米助」	正

以上、増訂版『象山全集』の「訂正及門録」における「訂正」の具体的な事例として、「底本」あるいは「参考」の一冊になったと考えられる宮本版「及門録」と比較校合した事例88例（⑥と⑦は「正」と「誤」の両方があり。したがって２例分に相当し、事例総数を90例と算定）を示した。宮本版と比較校合してみた場合、増訂版『象山全集』の「訂正」の内実は、下記の３通りに類別することができる。

（1）宮本版における記載の誤りが、正しい内容に訂正された事例
（「→」）－（61例－67.8％）

（2）宮本版において正しい記載が、誤った内容に訂正された事例
（「←」）－（13例－14.4％）

（3）宮本版の誤った記載を判別できず、誤ったまま記載した事例
（「―」）－（16例－17.8％）

以上の結果から、「訂正及門録」は、宮本版の記載内容と比較校合すると、（2）（3）の場合のように「訂正」が宮本版の正しい記載を変更したり誤りをそのまま踏襲したりしていて有効ではない事例も認められる。特に（2）の場合のような「訂正」が逆効果となって正しい記載を誤った内容に変えてしまうという訂正ミスの事例も生じている。しかし、（1）が示すように67.8％という多数の事例が、「訂正」によって門人に関する記載内容が正しく修正された効果は大きい。この点については、別の拙稿で分析した他の「京大版」や「信教版」の「及門録」と比較した場合も同様であり[114]、このことは増訂版『象山全集』が相対的に正確性、信頼性の最も高い「象山門人帳関係史料」との結果を示している。

しかしながら、上記の「訂正」の事例をみても明らかなごとく、増訂版『象山全集』は、「訂正」の「数量」と「内容」からみて、刊行当時（昭和10年という昭和戦前の時代）としては、最新版の「及門録」に仕上げられた作品と評することができる。その編纂過程における門人に関する記載内容を「訂正」することによって、象山門人史料としての相対的な精度や価値は一段と向上したことは明らかである。逆に、それ故にか、結果として象山研究や幕末維新期を対象とする洋学史研究その他の研究分野において、「訂正及門録」は疑う余地のない、あたかも唯一無二の「原本（実物）」であるかのごとく過剰な信頼感、安心感を与えてしまった面もある。研究者によって、「訂正及門録」が条件付きの研究史料であることを全く意識せずに、疑うことなく各種の研究に活用されてきたことは否めない事実である。

また、信濃教育会が同史料の訂正版「及門録」を編纂するに際して、そのときまでに公表されていた数種の「及門録」の内で、どの「及門録」を底本としたのか。宮本版か京大版か、それとも別に存在した流布本なのかは公表されてはおらず、確定することができない。筆者自身は、明治期に作成されたと考えられる京大版よりも、昭和初期に京大版をも参照して修正された宮本版（活字版）の可能性が高いと考えるが、決定的ではない。

次に、別の側面から「訂正及門録」が象山存命中に入門した門人各個が自署した歴史的事実を示す実物ではないことを証明する具体的な事例として、「訂正及門録」に記載された門人たちの帰属する藩名あるいは藩主名の事実誤認の事例をあげてみたい。

確かに、「訂正及門録」と命名された全集版「及門録」を作成するに際して、たたき台（底本）とされた「及門録」を特定することはできない。だが、後掲の「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」の史料番号に続く「藩主名」「藩名」「入門月日」「門人名」を、宮本版や京大版その他の関係史料と比較校合してみた場合、「訂正及門録」は誤謬と思われる記載内容を訂正して作成された苦肉の作品（二次史料）であることは間違いない。

宮本版「及門録」などを底本として400名を超える多数の門人に関する各項目の記載内容を吟味していけば、当然、そこには事実に反する誤りが、多数、認められる。その誤りの項目が、次に掲げる〈「訂正及門録」における藩名・藩主名の誤記事例一覧〉における矢印の右側に記載された内容である。特に「訂正及門録」で目立つ誤謬は、土佐藩に帰属する門人の藩名や門人名についての誤りの多さである。

実は、筆者は、平成２年（1990）から文科省科学研究助成金を受けて、土佐藩の幕末期洋学関係史料を分析事例とした「幕末洋学教育史研究」に10数年間も関わり、膨大なオランダ語混じりの原史料の解読・分析に従事し、幕末期土佐藩の軍事科学系洋学（西洋砲術・西洋兵学を中心とする西洋科学）の学習者を析出し特定する研究に追われた[115]。その研究成果は、高知市民図書館から『幕末洋学教育史研究』（Ａ５判、641頁、2004年）として公費で刊行された[116]。その研究において、土佐藩に洋学が導入され普及する実態解明の中心史料として、当時、新発見の史料（下曽根信敦門人で土佐藩砲術師範の徳弘孝蔵とその２人の子息が残した高知市民図書館所蔵「徳弘家資料」）の解読を進め、560余名の徳弘門人を析出した。彼等の学歴・職歴・活動履歴などを知るために、土佐藩の「侍帳」「郷士帳」などを駆使して幕末期土佐藩の1,000名近い人物の調査と分析をする機会をえたのである。

そのような土佐藩洋学史料を中心とする幕末洋学史研究での学習成果によって、筆者は本稿における象山門人史料「訂正及門録」において土佐藩関係者だけでも30名近くの門人を析出することができた。だが、「訂正及門録」では、彼らが土佐藩に帰属する象山門人であることを誤解して、大野藩その他の帰属と誤記されていたり、あるいは門人名自体が誤記されている事例が多数、発見された。そのような初歩的な誤謬は、嘉永・安政年間の幕末期に存在した象山塾時代に、入門

者各自の自署によって記録された「実物」の門人帳であるならば、到底、ありえないことなのである。

「訂正及門録」を含めた全ての写本版「及門録」が、「実物」（一次史料）ではなく、したがって「訂正及門録」が「底本」とした「及門録」もまた「実物」ではなかった、とみてよい。その証左となる事例を次に紹介する。

それは、美談「米百俵」の主人公である長岡藩（「牧野備前守様御家來」）の小林虎三郎の畏友で、同時期に象山門人となった「三島億二郎」（1825－1892）に関する記載の仕方の問題である。

彼は、誕生時の氏名は「伊丹鋭次郎」（長岡藩士「伊丹市左衛門」の二男」）であったが、弘化元年（1844）に同じ長岡藩士である「川島徳兵衛」の養子となり「川島鋭次郎」と姓が変わった。さらに安政６年（1859）には「川島鋭次郎」を「川島億次郎」と改めた（同年に藩主の牧野忠恭に嫡男「鋭橘」（後の牧野忠毅）が誕生したために「鋭次郎」から「億次郎」に改名）。そして明治維新の戊辰戦争敗戦の折には自ら「三島宗右衛門」と名乗った。が、すぐに「三島億二郎」と改名し、以後、この氏名が戸籍に登録の正式な氏名となったのである（「伊丹鋭次郎」→「川島鋭次郎」→「川島億次郎」→「三島宗右衛門」→「三島億二郎」と氏名が変遷）[117]。

ところが、彼の象山塾入門を示す記載は、宮本版「及門録」では「三重出」（「嘉永四年　川島鋭次郎」（No.174）、「嘉永五年　三島億次郎」（No.256）、「嘉永六年　河島永次郎」（No.331）であり、増訂版「訂正及門録」の方は「二重出」（「嘉永四年　川島鋭次郎」（No.174）、「嘉永六年　河島永次郎」（No.331）となっているのである。

叙上の三島側の資料による彼の氏名の正確な改名の時期と氏名の変遷を象山塾入門を示す「及門録」における記載名と比較校合してみると、看過できない重大な事実が明らかとなる。すなわち、宮本版「及門録」で「嘉永五年」の象山存命中に「三島億次郎」（正しくは「三島億二郎」）という氏名を記載している事実である。「三島億二郎」という氏名は、象山没後の明治以降に改名したもので、明らかに宮本版「及門録」の事実誤認であり、正に「三島億二郎」を用いているということは、「及門録」が象山没後の明治以降に作成されたことを物語っているのである。

同時に、その宮本版を底本ないしは参考として作成された「訂正及門録」も、「三島億次郎」を削除し「川島鋭次郎」「河島永次郎」と「訂正」してはいる。このような宮本版「及門録」および増訂版『象山全集』における門人名の誤謬という看過しえない事実は、如何なる「及門録」も象山没後の明治以降に作成された作為的史料（二次史料）であること、しかもそれらは明治以降に生き残った門人たちの全く史料的裏付けのない「記憶」や「伝聞」をも聞き書き史料として書き入れ作成したものであること（氏名・藩主名・門人名などの発音が同じであれば異なった文字、すなわち同音異義語が多数、使用されていることは聞き書き史料の特徴）、等々を物語る明確な論拠であるといってもよいのである。この種の矛盾や問題を示す事例は、公表されている全ての「及門録」に多数、存在する。

畢竟するに、以上に指摘した誤謬の事実は、「及門録」の「原本」は存在しないという厳粛な事実を指示しているのである。

次に「訂正及門録」における藩名と藩主名の誤謬の問題について具体的な事例を列挙し、その矛盾の本質を分析することとする。

「訂正及門録」における藩名・藩主名の誤記事例一覧

	増訂版『象山全集』における誤謬の事例		
1	No. 79「松平加賀守様御家來(加賀藩)　山田貫兵衛」	→	「松平伊賀守(上田藩)　山田貫兵衛」 ※「訂正」により新たな誤謬が発生、藩主名は「松平伊賀守」が正解。
2	No. 89「奥平大膳大夫様御家來(中津藩)　山崎新六」	→	「奥平大膳大夫様御家來(土佐藩)　山崎慎六郎)」
3	No. 250「同(大野藩)　樋口眞吉」	→	「土佐藩　樋口眞吉」
4	No. 251「同(大野藩)　桑原介馬」	→	「土佐藩　桑原介馬」
5	No. 277「同(大野藩)　廣田文吉」	→	「土佐藩　弘田善助」
6	No. 302「同(大野藩)　平尾喜内」	→	「土佐藩　平尾喜内」
7	No. 306「(嘉永六年)九月十一日入門　平田善助」	→	「土佐藩(嘉永六年)九月十一日入門　弘田膳助」
8	No. 331「(藩名なく空欄)　河島永次郎」	→	「長岡藩　川島鋭次郎（後の三島億二郎)」
9	No. 363「(嘉永六年)九月廿一日入門　川勝光之助」	→	「幕　臣　川勝光之助」(幕臣の記載なし)
10	No. 367「(藩名記載なく空欄)　野中太内」	→	「土佐藩　野中太内」
11	No. 368「(藩名記載なく空欄)　高村直藏」	→	「土佐藩　高村直藏」
12	No. 370「(藩名記載なく空欄)　折田與右衛門」	→	「中津藩　折田與右衛門」
13	No. 375「(藩名記載なく空欄)　阿部喜東次」	→	「土佐藩　阿部喜東次」

14	No. 394「（藩名記載なく空欄）　溝口廣見」	→	「土佐藩　溝口廣見」
15	No. 417「（藩名記載なく空欄）　加治木部兵衛」	→	「松代藩　梶木部兵衛」 ※「No. 458旗本・梶木軍兵衛」の「重出」
16	No. 454「（藩名記載なく空欄）　和田澤藏」	→	「土佐藩　和田澤藏」

上記一覧表に示したように、「訂正及門録」には門人の帰属する藩名や藩主名の誤り（門人名自体の誤りも多数、存在）が多く認められる。このような誤謬は、「原本(実物)」の門人帳の写本であればありえないことであり、そもそも「訂正」という史料を修正するという「作為的史料操作」をすること自体が「及門録」が「原本」ではないこと、あるいはそれを「底本」とはしていないことを物語るもので、重大な問題点と言わざるをえない。

上記の問題事例の他にも付言すべきは、前述の「訂正及門録」において、①「No. 234　加州本多周防守殿家來（金沢藩）泉澤彌太郎」、②「No.301　大野（藩）若澤彌太郎」、③「No.315　加州（金沢藩）泉澤彌太郎」の３名の門人名についてである。岩崎の江戸在住と時を同じくして同藩の同僚の多くが象山塾に入門しており、したがって彼等３名は、「土佐藩　岩崎彌太郎」ではないかと推察される。

いずれにしても、このように様々な誤謬や矛盾を内在する「訂正及門録」は、「原本」の「写本」を「訂正」した門人帳史料ではなく、塾主である象山没後に意図的に作成された作為的史料（二次史料）の訂正版であることを物語っている。

おわりに　「訂正及門録」の問題点と今後の研究課題

信州を代表する偉人の存在意義－今後における象山門人解明の研究課題

信濃教育会は、昭和戦前において信州が誇る歴史的偉人の代表的人物である佐久間像山の全集を２度も刊行した。最初が大正２年（1913）で、全２巻の非常な大著であった。しかしながら、そこには、当時、象山門人帳として一般に流布していた「及門録」が収録されてはいなかったのである。そのことは、教育界のみならず長野県民全体にとっても、極めて残念なことであった。この「及門録」の未収録という問題を踏まえて、象山門人帳とみられる同史料の具体的な内容や特徴を分析して、その概要を全国に初めて紹介したのは、何と東京帝国大学哲学教

授の井上哲次郎であった。それは、全集刊行の翌年（大正３、1914）のことであった。

学術界に止まらず国民的次元でも高名な学者であった井上は、日本最初の全国規模の学術啓蒙雑誌であった『東洋学芸雑誌』に、論文「佐久間象山及門録に就いて」（大正３年）を発表し、偉大な思想家・教育者で多くの人材を育成した佐久間象山の門人について、当時、「象山門人帳」として一般に流布していた「及門録」の内容を精査し、象山塾の教育実態とそこに学んだ門人の概要を知らしめたのである。この井上論文が、研究者だけではなく、広く国民一般に、「はたして、象山の門人にはどのような人物がいたのか」という象山門人の実態についての知的関心を喚起したことは間違いない。

その後、信濃教育会が刊行した最初の『象山全集』の編纂事業に関わった信州松代出身の医学者で象山研究の第一人者でもあった宮本仲が[118]、長年に亘る象山研究の成果を大著『佐久間象山』（岩波書店、昭和７、1932年２月）にまとめて出版する。同書の中には、400名を超える多数の象山門人の氏名や帰属する藩名・藩主名・入門年月日などが記された象山門人帳「及門録」が収録されていたのである。その宮本版「及門録」によって、多くの日本人が、東西両洋の学問文化を止揚・統一して日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」を形成し展開した象山が、グローバルな視点から開国和親（日本近代化）を担う実践的学問を志向し実践する門人を、多数、輩出した実態を初めて知ることができたのである。しかしながら、宮本版「及門録」は、門人名や帰属する藩名や藩主名、入門年月日など、様々な記載事項に誤謬（史料の誤読・誤解・誤記などから発生する記載内容の事実誤認）が数多く認められる「問題の門人帳史料」だったのである。

実は、この宮本の「及門録」を収めた研究書『佐久間象山』が出版される前年の昭和６年（1931）４月、信濃教育会は、再度の本格的な増補改訂版の『象山全集』を編纂し刊行することを決定し、同時に宮本仲を含む編纂委員会の顧問や委員を委嘱したのである[119]。以来、４年近くの歳月を経て、増訂版『象山全集』（全５巻）の刊行が、昭和９年（1934）７月にはじまり、翌10年（1935）６月に第５巻が出て完了した。この増補改訂版には、初版には収められていなかった貴重な象山関係史料（『四書經注旁釋大學之部』『象山先生小傳』「各種索引」をはじめとする詩文や和歌、書簡の類）が数多く増補されたのである。

この第２回目の増補版『象山全集』で特に注目すべき点は、待望の「及門録」が「訂正」の２文字を冠した「訂正及門録」の史料名で全文収録されたことである。一体、それは、当時、流布していたどの流布本を底本とした「及門録」であったのか。また、どのような訂正を施したのか。それらは全く不明であった。しかし、如何に加筆や削除などの「訂正」を施したとは言っても、どの流布本も「原本（実物）」ではないが故に、完全無欠な象山門人帳に再生することは不可能なことであった。「原本」の存在の有無が全く不明な状況の下で、一体、どのような流布本を「底本」としたかも不明であったのである。それ故、底本とされた「及門録」自体が様々な誤謬を内在する史料であったことは間違いない。しかも、それを「訂正」できる範囲は限定されており、明らかに事実誤認と判断できる記載事項のみを可能な限り修正するしか方法はなかったはずである。

したがって、「訂正及門録」の本質的な特徴は、「門人録」の「原本（実物）」を「底本」とした写本の「及門録」を「訂正」したものではなく、それまでに普及していた複数の「及門録」の内のある一種を底本とし、それに宮本版や京大版などの「及門録」と比較校合して加筆や削除など種々の「訂正」を施した修正版の写本を活字化した作為的史料（二次史料）である、とみてよいであろう。

だが、可能な限りの訂正を施しても、なおも様々な誤謬を内在する「訂正及門録」ではあった。が、それは、刊行以来、現在に至るまで、研究者たちに象山研究の原典史料（原本、実物）と信じ込まれて使用されてきたのである。筆者が、平成の初めに、「訂正及門録」を詳細に分析し、そこに内在する問題点を析出した論文を公表するまでは[120]、数多くの学術論文や専門書で同史料は使用されてきた。しかし、誰一人として同史料に内在する誤謬に満ちた問題点に気づき、それを指摘した研究者はいなかったのである。

増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」に残る多くの誤謬

これまで筆者が様々な観点から「訂正及門録」に関する分析を通して多くの問題点を指摘してきた通り、象山門人帳として活用されてきた「訂正及門録」には、なおも訂正されるべき誤謬（「及門録」の記載内容となっている門人名、帰属する藩名・藩主名、入門年月日などに関する誤記や誤解）が数多く内在するのである。

筆者は、今から30年も前の1990年代に、「訂正及門録」は全くの不完全史料で

あり、再度、訂正されなければならない誤謬が数多く存在することに気づいた。以来、「訂正及門録」を中心とした数種類の「及門録」の比較考察を、象山研究の基礎的研究と位置づけ、それぞれの「及門録」の歴史史料としての信憑性を判断するための「史料批判」を試みてきた[121]。

確かに２度目に刊行された増訂版『象山全集』に、象山門人帳と言われる「訂正及門録」が収められたことは、象山研究史上、実に有意義なことではあった。だが、同史料の編纂過程における既存の写本版「及門録」に対する「訂正」によって、何がどのように修正されたのか、は全く不透明であった。その訂正作業には、宮本版「及門録」をはじめ、多くの関係史料が駆使されたことは間違いない。「訂正及門録」の冒頭に付された添書（注意書き）には、編纂作業で参考史料とされた史料が明記されている[122]。当然のことながら、それらの象山史料の中には、筆者が、別稿で詳細に比較分析の史料とした宮本版や京大版などの「及門録」が含まれていたのである[123]。

ところが、平成８年（1996）７月、前述の筆者による「訂正及門録」の理解と使用に関する問題提起の論文が契機になったが故と推察されるが、突然、青木歳幸氏（当時は長野県立歴史館専門主事、後に佐賀大学教授）が、京大版「及門録」（同氏は京大に「及門録」を譲渡した象山門人「北澤正誠」の名前を冠して「北澤本」と呼んでいる）こそが、「原本と考えられ、増訂版『象山全集』よりも信頼性が高く、最も信頼に値する象山の門人帳資料「及門録」である」と高く評価する史料紹介「佐久間象山門人帳『及門録』再考」を、郷土の歴史研究誌『信濃』（信濃史学会編『信濃』第48巻第７号所収、1996年７月）に発表されたのである。しかも同氏は、それと連動して信州の地元紙「信濃毎日新聞」に「象山門人研究の新視点－京大版『及門録』との出会い－」（信濃毎日新聞、1996年７月８日朝刊）という記事を掲載されたのである[124]。

京大版「及門録」こそが象山門人帳の「原本」であると考える同氏は、その「及門録」を簡潔にモデファイして、国立歴史民俗博物館の共同研究「地域蘭学の総合的研究」に象山門人帳史料「及門録」として収録されたのである[125]。しかも驚くべきは、同史料が、多少の修正を経て同博物館の「地域蘭学者門人帳データベース」に収められネット上に一般公表されたことである。青木氏は、増訂版「訂正及門録」の作成過程で、基とする門人帳史料（宮本版が有力）の誤謬を訂正す

るための参考史料とされた京大版こそが、逆に誤謬が訂正された増訂版「訂正及門録」を超える信憑性のある象山門人帳史料であるとの驚くべき見解を示されたのである。

それ故に筆者は、叙上のような京大版「及門録」を「原本」と考えて絶対視する青木氏の見解を検証すべく、京大版「及門録」の写真版を京都大学附属図書館から入手して解読し、相対的に最も信頼性があると思われる増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」との詳細な比較校合を試みたのである。その結果、明治期に作成されたと推定される京大版「及門録」よりも、昭和戦前期に多数の象山研究者が４年もの歳月をかけて編纂した増補全集版「訂正及門録」の方が、はるかに誤謬が少なく、信頼性が高いことを、両方の「及門録」の全面的な比較校合を通して論証し、その研究結果を詳細な論文にまとめて公表したのである[126]。

叙上のような筆者のこれまでの「及門録」の研究成果に基づく所見を、結論的に述べれば、象山門人の北澤正誠が所蔵していたという京大版「及門録」は、北澤没後に親族が京都帝国大学に譲渡した史料であることは明白である[127]。そこで重要な事実は、北澤が他界したのは明治34年（1901）２月であるということである。さすれば、遺族が京都帝国大学に「及門録」その他の象山史料（京都大学図書館「北澤正誠旧蔵書目録」）を譲渡したのは明治34年以降であることが判明する。その事実に即して考えると、昭和７年（1932）に出版された宮本仲著『佐久間象山』に所収の「及門録」、及びその３年後（昭和10、1935年）に公表された増訂版『象山全集』に収められた「訂正及門録」との間には、約30年もの時間的な懸隔がある。京大版・宮本版・全集版の３点の「及門録」の成立について、それらを年代順の位置関係で時系列上において比較考察するならば、幾度も修正を重ねて仕上げられた末の最終版とも言える象山門人帳史料、それが増訂版『象山全集』に収められた「訂正及門録」である、と判別することができるのである[128]。

しかしながら、その「訂正及門録」もまた、「訂正」する際の「底本」と推定される宮本版「及門録」と比較校合した結果の一覧表「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」によって明らかなごとく、なおも「訂正」を必要とする不完全な門人帳史料であることは、本稿が詳細に立証してきたところである。確かに「訂正」によって修正が加えられ信頼性が増したことは否定できない。だが、逆に「訂正」によって新たな誤謬も発生した点（正しい記述を、結果として誤った

「及門録」のそれが正しいとして訂正したことが誤りの原因）も認められるのである。

それ故に、象山門人の全容（日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」の教育的な拡大普及過程）を解明するためには、今後も象山門人として新たに付加すべき門人の発掘と氏名や帰属する藩名・藩主名・入門年月日などの誤りの是正作業を継続し、さらに信頼性の高い象山門人帳「再訂正及門録」の作成に向かって完成度を高めていかなければならない。

今後は、筆者が本文中で論証したごとく、①「及門録」は長期に亘る多様な教育活動を展開した佐久間象山の門人全体を網羅した史料では決してないこと、②「及門録」は幕末期の極めて短期間（嘉永２－安政元年、1849－1854）における象山塾入門者の部分的な門人録であること、しかも③「及門録」に記された門人には西洋砲術だけではなく、儒学や洋学、医学、理学（数学・物理学・化学など）その他の多種多様な学習者が存在したこと、等々を総合的に理解し勘案して、慎重に同史料を研究に資するべきである。

象山の教育活動の全体は、彼が最初の江戸遊学から帰国して松代藩の教育職（御城付次講釈助）を拝命した25歳のときからはじまり、幕命で上洛直後に斬殺され最期を迎える54歳のときまでの約30年間（1835－1864）もの長きに及ぶのである。しかも、その間に展開された象山の教育の対象となった門人は、教育内容からみれば実に多種多様であり、門人数の全体は膨大である。今後は、象山の教育活動の全体像を解明し、誰が、いつ、どこで、何を、如何に、象山から学んだかを分析して、象山が教育活動を展開した幕末期の時代的な条件と学習内容面での条件を座標軸の経緯として類型化すれば、多種多様な象山門人の学習動機や学習内容、出身地域、日本近代化過程における活動軌跡、等々が明らかになるであろう。

象山門人史料「及門録」の研究は、膨大な時間と労力を要する極めて地道な基礎的研究である。しかしながら、本研究をさらに拡大深化することは、象山思想「東洋道徳・西洋芸術」の実現を担って幕末期から明治・大正期に活躍した多くの門人たちの軌跡を具体的に解明すること（日本近代化推進の人的要因の解明）であり、幕末期以来の時代展開に即した日本近代化の実態を、それを担った人々の側から再検討するという歴史研究上の意義を有するものでもあり、正に今後における象山研究の重要な研究課題の一つであるといわなければならない。

「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」

No	全集版「訂正及門録」		宮本版「及門録」		注　記
	頭　書	氏　名	頭　書	名　前	両史料の比較校合上の特記事項
	嘉永二己酉歳		嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿		入門時期区分が両史料では全く相違。宮本版は嘉永2,3,4,5,6年を嘉永6年に一括記載し、全体を嘉永6年と安政元年の2期区分で構成。
1	松代藩	白井　平左衛門	(松代藩)（宮本が施したカッコ、以下同様）	白井　平左衛門	
2	同	山寺　源大夫	(同)	山寺　源太夫	松代藩、「太」は「大」が正解。儒学者佐藤一斎・中村正直と親交。「及門録」に記載ないが子息の「信炳」も門人。
3	同	水野　瀬平	(同)	水野　瀬平	松代藩
4	同	蟻川　賢之助	(同)	蟻川　賢之助	松代藩、吉田松陰、小林虎三郎と共に「象門の三傑」、象山塾居の間、江戸の象山塾で蘭学・砲術などを教授。幕府の洋銃取調掛・講武所砲銃教授。維新後は沼津兵学校の設立に尽力。
5	同	北山　安世	(同)	北山　安世	松代藩、象山の甥で松代藩医、兵学者。松陰の親友、明治三年病没。
6	松本藩	岡　無理彌	松本藩	岡　無理彌	松本藩
7	松代藩　離門	金兒　忠兵衛	(松代藩)　離門	金兒　忠兵衛	松代藩、江川塾に象山と同時入門し塾頭に。故あって離門。象山亡き後は藩の西洋砲術師範として活躍、門人多数。
8	江戸人	永井　庄三郎	江戸人	永井　庄三郎	江戸人、鉄砲鍛冶師
9	松代藩	金井　彌惣左衛門	(松代藩)	金井　彌惣左衛門	松代藩
10	同　江川傳書三冊口傳	増田　助之丞	江川傳書二冊口傳	増井　助之丞	松代藩、「増井」は誤りで「増田」が正解、「傳」は田字。
11	松代藩　離門	長谷川　深美	(松代藩)　離門	長谷川深美	松代藩
12	同	藤岡　伊織	(同)	藤岡　伊織	松代藩、象山の友人で高豪の藤岡甚右衛門の嫡男。
13	同	岩下　富馬	(同)	岩下　富馬	松代藩
14	同	佐藤　忠之進	(同)	佐藤　忠之進	松代藩
15	松平伊賀守様御家來	八木　剛助	松平伊賀守様家來	八木　剛助	上田藩、「訂正「及門録」では大名には「様御」、旗本は「殿」と区別。
16	飯田藩	太田　玄策	飯田藩	太田　玄策	飯田藩
17	松代藩	高野　車之助	(松代藩)	高野　車之助	松代藩、藩横目付武具奉行、督學などを歴任。『松代藩史稿』『松代地誌』等著書多数。甥で門人の北山安世(藤岡伊織)の教育を託した門人。

18	東福寺	和田　森之助	東福寺村	和田　盛之助	松代藩、「盛之助」は誤りで「森之助」が正解、旧松代藩領の村（現在の長野市篠ノ井東福寺）。「和田森之助」は郷士（庄屋）の子息。
19	（松代藩）	大野　健左衛門	（松代藩）	大野　健左衛門	松代藩
20	松代藩	寺澤　大之助	（同）	寺澤　六之助	松代藩、「六之助」は誤りで「大之助」が正解。
21	安藤飛騨守**様御**家來	柏木　兵衛	安藤飛騨守様家來	柏木　兵衛	田辺藩
22	松代藩	池村　良太郎	松代	池村　良太郎	松代藩
23	同	矢島　源左衛門	（松代藩）	矢島　源左衛門	松代藩
24	同	矢島　順太郎	（同）	矢島　順太郎	松代藩
25	同	佐野　喜代見	（同）	佐野　喜代見	松代藩
26	同	松木　源**太郎**	（同）	松木　**源八**	松代藩、「源太郎」は安政２年に「源八」を襲名（『真田家家中明細書』）。嘉永２年の入門時は「源太郎」が正解。
27	松代藩	館　文之助	（同）	館　文之助	松代藩
28	同	齋藤　新藏	（同）	齋藤　新藏	松代藩
29	同	菅　鉞太郎	（同）	菅　鉞太郎	松代藩
30	田口村（松代藩）	小林　治兵衛	田口村	小林　治兵衛	松代藩、松代藩領の村（現在の長野県佐久市の南東部）。
31	田中（松代藩）	奥村　彌左衛門	田中	奥村　彌左衛門	松代藩、信州須坂田中（現在の長野県須坂市）。
	嘉永三庚戌歳		**（「嘉永三庚戌歳」の時期区分の記載ナシ）**		宮本版には嘉永３年の時期区分がなく、「嘉永六年」に連続記載。
32	酒井修理**大**夫**様御**家來 五十九歳入門	片山　平左衛門	酒井修理太夫様家來 **七拾**一歳入門	片山　平左衛門	小浜藩、「太夫」は誤りで「大夫」が正解、「五十九」は誤りで「七拾一」が正解。
33	久野丹波守殿家來	野村　大記	久野丹波守殿家來	野村　大記	田丸藩、紀州藩田丸城代家老久野家は大名格、「殿」は旗本や家老であり、嘉永年間の当時は「大名」ではなく「家老」の扱い。
34	松代藩	望月　幾五郎	本藩	望月　幾五郎	松代藩
35	同	望月　吉五郎	（松代藩）	望月　吉五郎	松代藩
36	松平肥前守**様御**家來	本島　藤大夫	松平肥前守様家來	**木**島　藤**太**夫	佐賀藩、「木島」は誤りで「本島」が正解。同じく「大夫」は誤りで「太夫」が正解。正式の氏名は「本島藤太夫」。本島は大殿様御側御目付。藩の海軍所創設、軍備近代化に尽力。
37	久野丹波守殿家來	三好　小三郎	久野丹波守殿家來	三好　小三郎	田丸藩、紀州藩田丸城代家老久野家の家来。
38	數原善庵老家來	榊　令輔	數原善庵老家來	榊　令輔	福岡藩、數原善庵老は福岡藩家老格の重臣か。

39	秋山兵三郎様御家來 本名水野鐵太郎　水戸儒官	島田　敬介	秋山矢三郎様家來　本名水野鐵太郎　水戸儒官	島田　敬介	水戸藩、「矢」は誤りで「兵」が正解。秋山は水戸藩重臣、「訂正及門録」では「様御家來」ではなく「殿」、だが宮本版は大名格の「様」。
40	御書院番與力	須藤　音三郎	御書院番與力	須藤　音三郎	幕臣
41	浦賀與力	岸本　小助	浦賀與力	岸本　小助	幕臣
42	松平越後守様御家來	中尾　定治郎	松平越後守様家來	中尾　定治郎	津山藩、同藩の象山門人津田眞一郎(眞道)の叔父。
43		須川　半左衛門		須川　半左衛門	不　明
44	長崎人　元名藤吉作太郎と云ふ後砲術を以て館林侯に仕ふ	藤井　重作	長崎人　元名藤吉作太郎と云ふ後に砲術を以て館林藩に仕ふ	藤井　重作	館林藩、西洋砲術で仕官した門人。
45	堀田備中守様御家來	木村　軍太郎	堀田備中守様家來	木村　軍太郎	佐倉藩、佐倉藩の洋式兵制改革、幕府の天文台、蕃書調所出役教授手伝。
46	奥平大膳大夫様御家來	島津　良介	奥平大膳大夫様家來	島津　良助	中津藩、「良助」は誤りで「良介」が正解。中津藩軍学者で福澤諭吉の伸人「文三郎」の父。象山門人数第1位の中津藩人門者第1号。
47	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	松平阿波守様家來	高畑　五郎	徳島藩、「畑」は誤りで「畠」が正解。伊東玄朴の蘭学塾を経て象山塾に入門。蕃書調所教授職手伝を経て元治元年(1864)に開成所教授並に昇格して幕臣に。明治維新後は海軍省の権大書記官などを歴任。生麦事件の公文書を福澤諭吉、杉田玄端と共訳(『福翁自伝』)。
48	堀田備中守様御家來	岩淵　迪	堀田備中守様家來	岩淵　迪	佐倉藩
49	酒井雅楽頭様御家來	井上　利左衛門	酒井雅楽頭様家來	井上　利左衛門	姫路藩、大名は「様御家來」、旗本は「様家來」。
50	同	大島　貫七	同	大島　貫七	姫路藩
51	同(姫路藩でなく松代藩の誤認)	村上　大三郎	(松代藩)	村上　大三郎	松代藩、象山の義弟で幕臣村上家を嗣ぎ、大番衆、蕃書調所勤務。象山の洋書購入を斡旋。
52	松代藩	磯田　小藤太	(同)	磯田　小藤太	松代藩
53	松代藩	三村　鎌藏	(同)	三村　鎌藏	松代藩
54	加藤遠江守様御家來	高畑　五郎	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大洲藩、「畑」は誤りで「畠」が正解。
55	加藤遠江守様御家來	武田　斐三郎	加藤遠江守様家來	武田　斐三郎	大洲藩、函館時代までは斐三郎、明治政府時代から成章。緒方洪庵の適塾を経て象山塾に。箱館戦争で洋式城郭「五稜郭」を設計・建設。明治維新政府では陸軍大学校教授、陸軍士官学校教授などを歴任、日本軍の近代兵制改革に尽力。
56	會津藩	山本　覺馬	會津藩	山本　覺馬	会津藩、明治の京都府顧問、府議会初代議長。同志社英学校の創立時に新島襄を支援。

57		久保　勘治郎殿		久保　勘五郎殿	幕　臣、「治」は誤りで「五」が正解。「様」は大名に、「殿」は「幕臣」「大名重臣」に付記。
58		本堂　壽次郎殿		本堂　壽次郎殿	幕　臣
59	同家来	高橋　浪江	同家来	高橋　浪江	幕臣家臣、旗本本堂家の家来。
60	松代藩	宇敷　元之丞	(松代藩)	宇敷　元之丞	松代藩
61	同	友野　俊藏	(同)	友野　俊藏	中津藩
62	奥平大膳大夫**様御**家來	石川　休右衞門	奥平大膳大夫様家來	石川　休右衞門	中津藩。
63	同	島津　文三郎	奥平大膳大夫様家來	島津　文三郎	中津藩、福澤諭吉の仲人、福澤を江戸藩邸に招き「慶應義塾」の基になる蘭学塾を開設させ支援した恩人。
64	同	岡見　彦三		岡見　彦三	中津藩、福澤諭吉の慶應義塾の設立発展を支えた恩人。
65	同	櫻川　三郎右衞門		櫻川　三郎右衞門	中津藩
66	同	横山　犀藏		横山　犀藏	中津藩
67	同	高橋　三子		高橋　三子	中津藩
68	同	岡見　梢		岡見　梢	中津藩
69	同	磯見　瑞枝		磯見　瑞枝	中津藩
70	同	岡見　半九郎		岡見　半九郎	中津藩
71	同　留守	星野　平八	留守	星野　平八	中津藩
72	同	大谷　市之助	奥平大膳大夫様家來	大谷　市之助	中津藩
73	同	濱田　鎌之助		濱田　鎌之助	中津藩
74	同	戸倉　新右衞門		戸倉　新右衞門	中津藩
75	同	飯島　爲三郎		飯島　爲三郎	中津藩
76	板倉周防守**様御**家來	磯村　勇之進	板倉周防守様家來	磯村　勇之進	松山藩
77	松代藩	加藤　勵	松代	加藤　勵	松代藩
78		勝　麟太郎殿	**安房守**	勝　麟太郎殿	幕　臣、象山の義弟で高弟。「安房守」を付記。
79	松平加賀守**様御**家來	山田　貫兵衞	松平**伊賀**守様御家來	山田　貫兵衞	上田藩、「加賀守」は誤りで「伊賀守」が正解。
80	奥平大膳大夫**様御**家來	熊谷　仁兵衞	奥平大膳大夫様家來	熊谷　仁兵衞	中津藩

81	同	甲斐　利兵衛	同	甲斐　利兵衛	中津藩
82	同	神戸　源内		神谷　源内	中津藩、「神戸」は誤りで「神谷」が正解。
83	同	大谷　宗三郎	※空欄（氏名記載の順番相違）	※空欄	中津藩、「空欄」は追加挿入等で氏名記録順番のズレにより発生。
84	同	前野　三藏		前野　三藏	中津藩
85	同	牧野　彌太郎		牧野　彌太郎	中津藩
86	同	福知　新介		福知　新助	中津藩、「新助」は誤りで「新介」が正解。
87	同	岡見　彌一郎		岡見　彌一郎	中津藩
88	同	野口　斧藏		野口　斧藏	中津藩
89	奥平大膳大夫様御家來	山崎　新六		山崎　新六	土佐藩、「山崎惟六郎」の誤記（坂本保富『幕末洋学教育史』、『高知県人名事典』を参照）。下曽根信敦門人・徳弘孝蔵の門人を経て象山塾に入門。
90	同	荒尾　五郎三郎		荒尾　五郎三郎	中津藩
91	同	奥平　篤三	奥平大膳太夫様家來	奥平　篤三	中津藩、「太夫」は誤りで「大夫」が正解。
92	同	簗　環		簗　環	中津藩
93	同	齋藤　藏		齋藤　藏	中津藩
94	同	柴山　茂介		柴山　茂助	中津藩、「茂助」は誤りで「茂介」が正解。
95	同	間梨　昇太郎		間梨　昇太郎	中津藩
96	同	坂井　二作		坂井　二作	中津藩
97	同　（重出）	奥平　鎰三		奥平　鎰三	中津藩、「及門録」の門人記載で最初の「重出」、これを両史料とも看過。
98	同	大富　清太		大富　清太	中津藩
99	同	澤田　衛介		澤田　衛介	中津藩
100	同	向坂　彌藤司		向坂　彌藤司	中津藩
101	同	熊谷　民三		熊谷　民三	中津藩
102	同	月岡　兵介		月岡　兵介	中津藩
103	同	瀧澤　直司		瀧澤　直司	中津藩

104	同	高橋　直藏		高橋　直藏	土佐藩、「中津藩」は誤り。両史料共に「橋」は「村」の誤りで正しくは「高村直藏」。
105	同	熊田　金藏		熊田　金藏	中津藩
106	同	佐島　活藏		佐島　活藏	中津藩
107	同	熊澤　莊輔		熊澤　莊輔	中津藩
108	同	米山　東作		米山　東作	中津藩
109	同	一松　小源太		一松　小源太	中津藩
110	同	瀧本　忠左衞門		瀧本　忠左衞門	中津藩
111	同	内田　平次郎		内田　平次郎	中津藩
112	同	片倉　浦助		片倉　浦助	中津藩
113	同	磯貝　五郎七		磯貝　五郎七	中津藩
114	同	古川　多七		古川　多七	中津藩
115	熊本	塚本　馬之助	熊本藩	塚本　馬之助	熊本藩
116	（以下廿一人中津藩なるべし）	加藤　利喜藏		加藤　利喜藏	中津藩
117	（同、筆者注）	古田　權次郎		古田　權次郎	中津藩
118	（同、筆者注）	上田　章七		上田　章七	中津藩
119	（同、筆者注）	岡野　一二郎		岡野　一二郎	中津藩
120	（同、筆者注）	川俣　彦二郎		川俣　彦二郎	中津藩
121	（同、筆者注）	樋口　留三郎		樋口　留三郎	中津藩
122	（同、筆者注）	渡邊　爲介		渡邊　馬介	中津藩、「馬」は誤りで「為」が正解、宮本版は新字を使用。
123	（同、筆者注）	黒岩　市三郎		黒岩　市三郎	中津藩
124	（同、筆者注）	淺野　鉞吉		淺野　鉞吉	中津藩
125	（同、筆者注）	松本　源藏		松本　源藏	中津藩
126	（同、筆者注）	今億　新太郎		今億　新太郎	中津藩
127	（同、筆者注）	戸倉　文之助		戸倉　文之助	中津藩
128	（同、筆者注）	中島　正次郎		中島　正次郎	中津藩

129	（同、筆者注）	辰巳　市藏		辰巳　市藏	中津藩
130	（同、筆者注）	渡邊　銀次郎		渡邊　銀次郎	中津藩
131	（同、筆者注）	大西　辰次郎		大西　辰次郎	中津藩
132	（同、筆者注）	丹羽　卯之助		丹羽　卯之助	中津藩
133	（同、筆者注）	小栗　鋼三郎		小栗　鋼三郎	中津藩
134	（同、筆者注）	高橋　宗介		高橋　宗介	中津藩
135	（同、筆者注）	竹内　嘉兵衞		竹内　嘉兵衞	中津藩
136	（同、筆者注）	柳澤　重兵衞		柳澤　重兵衞	中津藩
137	溝口主膳正**様御**家來	上野　龍之進	溝口主膳正様家來	上野　龍之進	新発田藩
138	青山大膳亮**様御**家來	蔭山　莊作	青山大膳亮様家來	蔭山　莊作	郡上藩
139	同	金井　金次郎	同	金井　金次郎	郡上藩
140	松平播磨守**様御**家來	原田　軍大夫	松平播磨守様家來	原田　軍**太**夫	高松藩、「大」は誤りで「太」が正解、「訂正」のミス。
141	松平越後守**様御**家	海老原　多宮	松平越後守様家來	海老原　多宮	津山藩
142	同	津田　眞一郎	（同）	津田　眞一郎	津山藩、「津田　眞道」のこと。福澤諭吉、森有礼、中村正直、加藤弘之、西村茂樹らと明六社を結成、新政府の司法省に出仕。第1回衆議院議員総選挙に当選し初代衆議院副議長。
143	仙臺藩	竹内　仙右衞門	仙臺藩	竹内　仙右衞門	仙台藩
144	松代藩	吉村　左織	（松代藩）	吉村　左織	松代藩
145	水野丹後守**殿**家來	目良　造酒	水野丹後守家來	目良　造酒	新宮藩、「水野丹後守」は「紀州藩付家老」、「様」つかず「殿」。
146	同	三谷　左馬		三谷　左馬	新宮藩、「水野丹後守」は「紀州藩付家老」、「様」つかず「殿」。
147	松前伊豆守**様御**家來	藤原　重太	松前伊豆守様家來	藤原　重太	松前藩
148	土岐美濃守**様御**家來	藤川　太郎	土岐美濃守様家來　劒	藤川　太郎	沼田藩
149	松平伊賀守**様御**家來	八木　數馬	松平伊賀守様家來	八木　數馬	上田藩
150	松前伊豆守**様御**家來　離門	下國　殿母	松前伊豆守様家來　離門	下國　殿母	松前藩、松前藩家老、問題があって「離門」（破門）。
151	溝口主膳正**様御**家來	林　梅松	溝口主膳正様家來	林　梅松	新発田藩
152	大垣藩	山本　左平治	大垣藩	山本　左平治	大垣藩

153	松代藩	月岡　德治	(松代藩)	月岡　德治	松代藩
154		町田　庫之助		町田　庫之助	松代藩
155	後年砲兵之學を以て越前侯へ被召抱市川一學**と稱す**	岩　　文進	後年砲兵三學を以て越前侯へ被召抱號市川一學	岩　　文進	福井藩、広島藩医の息、「市川岩之進」の誤り。別名は「市川斎宮」「市川　兼恭」(いちかわ　かねのり)。緒方洪庵・杉田成卿で蘭学を学び、象山塾に移り西洋砲術を修得。福井藩砲術師範を経て、幕府天文台訳員や蕃書調開成所教授職を歴任し、旗本(大番格砲兵差図役頭取勤方)に昇進。
	嘉永四辛亥歳		**(「嘉永四辛亥歳」の時期区分の記載ナシ)**		宮本版「及門録」には嘉永4年の時期区分なく門人名を連続記載。
156	久能丹波守殿家來	森　　逸平	久能丹波守殿家來　嘉永四年辛亥月	森　　逸平	田丸藩、紀州藩田丸城代家老久野家。
157	堀田備中守**様御**家來	大森　巳之作	堀田備中守様家來	大森　巳之作	佐倉藩
158	牧野備前守**様御**家來	小林　虎三郎	牧野備前守様家來	小林　虎三郎	長岡藩
159	幕臣	伴　鐵太郎(殿)	幕臣	伴　鐵太郎(殿)	幕　臣、「殿」を失念。与力桜井家から伴家の養子に。安政3年(1856)、箱館奉行支配調役並、長崎海軍伝習所一期生。安政6年(1859)に軍艦操練所教授方出役。万延元年(1860年)に咸臨丸の測量方として太平洋横断。維新後は沼津兵学校一等教授。明治5年(1872)に海軍省に出仕。勝海舟、木村芥舟と共に『海軍歴史』を編纂。
160	上田	皆川　恒之助	上田	皆川　恒之助	上田藩、漢字の新旧の相違(宮本版が「恒」の新漢字を使用)
161	薩州	宮原　次郎左衛門	薩州藩	宮原　治郎左衛門	薩摩藩、「治」は誤りで「次」が正解。
162	幕臣	久保　記之助殿	幕臣	久保　記之助殿	幕　臣
163	藤堂和泉守**様御**家來 同藩鹽田重弦記	市川　清之助	藤堂和泉守(様)家來	市川　清之助	津　藩、大名の尊称「様」が欠如。
164	藤堂和泉守**様御**家來 同藩鹽田重弦記	松本　省三	同藩二名共入門　鹽田重弦記	松本　省三	津　藩
165	水野出羽守**様御**家來	佐々木　左源太	水野出羽守様家來	佐々木　左源太	沼津藩
166	奥平大膳大夫**様御**家來	簗　　由記	奥平大膳大夫様家來	簗　　由記	中津藩
167		廣瀬　誠藏		廣瀬　誠藏	中津藩
168	小野派一刀流	中西　忠藏	小野派一刀流	中西　忠藏	武道家(剣道家、江戸下谷住居、小野派一刀流の中西派)。
169		中西　猪太郎		中西　猪太郎	

170	片倉小十郎殿家來	大槻　龍之進	※空欄（氏名記載の順番相違）	※空欄	仙臺藩、「片倉小十郎」は仙臺藩家老で大名格。「大槻龍之進」は江戸時代後期の蘭学者「大槻玄沢」（一関藩出身）の一族、伊達藩片倉家に出仕。なお、「空欄」は追加挿入等で氏名記録順番のズレにより発生。
171	堀田備中守様御家來	西村　平太郎	片倉小十郎殿家來	西村　平太郎	佐倉藩、後の「西村茂樹」。「片倉小十郎殿家來」（仙台藩）は誤りで「堀田備中守家来」（佐倉藩）が正解。
172		馬場　志津摩		馬場　志津摩	佐倉藩
173		森村　助次郎		森村　助次郎	佐倉藩
174	牧野備前守様御家來	川島　鋭次郎	牧野備前守様家來	川島　鋭次郎	長岡藩、最初の氏名は「伊丹鋭次郎」、弘化元年に同藩川島徳兵衛の養子となり「川島鋭次郎」、安政６年に「億次郎」、明治以後は「三島億二郎」と改名。
175	松平大膳大夫様御家來	吉田　大次郎	松平大膳大夫様家來　後寅次郎と稱す	吉田　大次郎	長州藩、ペリー来航時の海外密航事件で恩師象山と共に幕府に捕縛。松下村塾で久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋、品川弥二郎、井上馨、山田顕義などを育成。
176	藤堂和泉守様御家來 鹽田重弦記	湊　哲藏	藤堂和泉守様家來 同藩鹽田重弦記	湊　哲藏	津　藩
177	松平相模守様御家來	林　藤四郎	松平相模守様家来	林　藤四郎	鳥取藩
178	奥平大膳大夫様御家來 八月六日	恩田　半五太郎	奥平大膳大夫様家來	思田　半五太郎	中津藩、「恩田」は誤りで「思田」が正解。
179	同	築紫　純次郎	八月六日	筑紫　純次郎	中津藩、「筑紫」は誤りで「築紫」が正解。
180	同	築　又之丞		築　又之丞	中津藩
181	同	横山　嘉八郎		横山　嘉八郎	中津藩
182	同	岩井　權市		岩井　權市	中津藩
183	同	上澤　八兵衛		上澤　八兵衛	中津藩
184	同	坪倉　六之助		坪倉　六之助	中津藩
185	同	内田　庄四郎		内田　庄四郎	中津藩
186	同	高橋　金次郎		高橋　金次郎	中津藩
187	同	喜多村　甚吉		喜多村甚吉	中津藩
188	藤堂和泉守様御家來　鹽田重弦記　八月八日	隅野　達之助	藤堂和泉守様家來	隅野　達之助	津　藩

189	藤堂和泉守**様御**家來　鹽田重弦記　八月八日	蒔田　惣次郎		符田　惣次郎	津　藩、「符田」は誤読・誤記で誤り、「蒔田」が正解。
190	細川越中守**様御**家來　八月九日	宮部　鼎藏	細川越中守様家來　八月九日	宮部　鼎藏	熊本藩
191	松平相模守**様御**家來　八月十日	原田　謙堂	松平相模守様家來　八月十日	原田　謙堂	鳥取藩
192	奥平大膳大夫**様御**家來	※空欄	奥平大膳大夫様家來　九月四日	小野　善藏	中津藩、藩主名は記載されているが家臣である門人名は不記。
193	久貝因幡守**様御**家來　八月十四日	上野　現八郎	久貝因幡守様家來　八月十四日	上野　現八郎	幕臣家來、久貝は安政２年(1855)講武所総裁。
194		野澤　簑藏	八月十四日	野澤　簑藏	勝山藩
195	松平伊賀守**様御**家來　八月十五日	門倉　傳次郎	松平伊賀守様家來　八月十五日	門倉　傳次郎	上田藩　象山蟄居後は伊東玄朴塾に入門。『西洋馬術規範』などを翻訳。
196	藩藤堂和泉守**様御**家來八月廿八日	山本　愼藏	藤堂和泉守様家來　八月廿八日	山本　慎藏	津　藩
197		荒木　謇之**助**		荒木　謇之進	津　藩、「進」は誤りで「助」が正解。
198	九月四日	小野　善藏	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	不　詳
199	堀田備中守**様御**家來　九月十六日(兄)	兼松　繁藏	堀田備中守様家來　九月十六日	兼松　繁藏	佐倉藩
200	同　(弟)	齋藤　碩五郎		齋藤　碩五郎	佐倉藩
201	同　九月廿日	高洲　代藏	九月廿十日	高洲　代藏	佐倉藩
202	同	福田　常治		福田　常治	佐倉藩
203	堀田備中守**様御**家來	田島　武之助		田島　武之助	佐倉藩
204	有馬日向守**様御**家來　九月廿四日	栗原　源左衛門	有馬日向守様家來　九月廿四日	栗原　源左衛門	丸岡藩
205	松平相模守**様御**家來	田村　源内	松平相模守様家來　九月	田村　源内	鳥取藩
206	堀田備中守**様御**家來　九月廿七日	長　量平	堀田備中守様家來　九月廿七日留守	長　量平	佐倉藩

207	（同）	高橋　午之助		高橋　午之助	佐倉藩
208	牧野備前守**様御**家來　十月十六日	渡邊　進	牧野備前守様家來　十月十六日	渡邊　進	長岡藩
209	小出内記**様御**家來　十月廿四日	大島　萬兵衞	小出内記様家來　十月廿六日	大島　萬兵衞	出石藩
210	松平越後守**様御**家來　水練家十月廿八日	上原　六郎左衞門	松平越後守様家來　水練家十月廿八日	上原　六郎左衞門	津山藩
211	同	佐野　淳藏	十月廿八日	佐野　淳藏	津山藩
212	水野壹岐守**様御**家來　十一月三日	高橋　幾太郎	水野壹岐守様家來　十一月三日	高橋　幾太郎	鶴牧藩
213	薩州藩	新納　四郎左衞門	薩州藩	新納　四郎左衞門	薩摩藩
	嘉永五壬子歳		**（「嘉永五壬子歳」の時期区分の記載ナシ）**		宮本版「及門録」には嘉永５年の時期区分がなく門人名を連続記載。
214	薩州藩	折田　與右衞門	同　　嘉永五年壬子歳	折田　與右衞門	薩摩藩
215	同	宮原　次郎左衞門	同	宮原　治郎左衞門	薩摩藩
216	紀州**様御**家來　正月十四日	遠藤　貫介	紀州様家來	遠藤　貫介	紀州藩
217	内藤久八郎様家來　二月	荒井　辰藏	内藤久八郎様家來	荒井　辰藏	幕臣家臣、幕臣故に「様」ではなく「殿」。
218	尾州**様御**家來　（父）	關澤　安左衞門	加州様家來	關澤　安左衞門	加賀藩、「尾州」は誤りで「加州」が正解。「關澤安太郎」の父親。
219	尾州**様御**家來　（子）	關澤　安太郎		關澤　安太郎	加賀藩、「尾州」は誤りで「加州」が正解。「關澤安左衞門」の嫡男。
220	加州藩	安村　宇右衞門	加州藩	安村　宇右衞門	加賀藩
221	中津	荒木　二郎大夫	中津藩	荒木　二郎太夫	中津藩、「大夫」は誤りで、「太夫」が正解、「訂正」のミス。
222	佐賀	岡　虎之助	佐賀藩	岡　虎之助	佐賀藩
223	松平因幡守**様御**家來	荒尾　千葉介	松平因幡守様家來	荒木　千葉介	鳥取藩、「荒木」は誤り、「荒尾」が正解。荒尾千葉介は鳥取藩家老職
224	土井能登守**様御**家來	内山　隆佐	土井能登守様家來	内山　隆佐	大野藩、藩政改革に務め安政３年藩に蝦夷地総督。藩船大野丸を建造、箱館藩営の商社大野屋を拠点に活動。
225	後相模守殿	富永　順之助殿	後相模守殿	富永　順之助殿	
226		波多野　季雄		波多野　季雄	松代藩

227	薩州藩　（重出）	野村　松次郎	薩州藩	野村　松次郎	薩摩藩
228	後丹波守殿	川勝　恒五郎殿	後丹後守殿	川勝　恒五郎殿	幕　臣、「丹後守」は誤りで「丹波守」が正解。
229	※空欄（氏名記載の順番相違）	※空欄	同家來	※空欄	幕臣家来、空欄（追加挿入等で氏名記録順番がズレタ）。
230	幕臣	川勝　光之助（殿）		川勝　光之助殿	幕　臣、幕臣には「殿」を付ける（全集版ナシ、宮本版アリ）。
231	幕臣	川勝　縫殿之助（殿）		川勝　縫殿之助殿	幕　臣、幕臣には「殿」を付ける（全集版ナシ、宮本版アリ）。
232	上田藩	櫻井　順藏	上田藩	櫻井　順藏	上田藩
233	同	櫻井　剛三郎	同	櫻井　剛三郎	上田藩
234	加州本多周防守殿家來	泉澤　彌太郎	加州本多周防守殿家來	泉澤　彌太郎	上佐藩、「加州」ではなく「上州」、「泉澤彌太郎」は「岩崎弥太郎」の偽名か。
235	仙石藩	加藤　士代士	仙臺	加藤　士代士	仙石藩、「仙臺」は誤り。後の「加藤弘之」。旗本となり開成所教授職並、明治維新後は新政府に出仕し外務大丞、元老院議官、勅選貴族院議員、等の重職を歴任、旧東京大学初代綜理、旧帝国大学（現・東京大学）第２代総長。
236	松平陸奥守様御家來	大槻　禮助	松平陸奥守様家來	大槻　禮助	仙台藩
237	長岡藩	河井　継之助	長岡藩	河井　継之助	長岡藩
238	※空欄（氏名記載の順番相違）	※氏名不記	同	小林　虎三郎	長岡藩、戊辰戦後で人材育成の教育第一主義で長岡を復興。美談「米百俵」の主人公。
239	長州藩	道家　良介	同	道家　良助	長州藩、「同」で「長岡藩」は誤りで「長州藩」が正解。「良助」は誤りで「良介」が正解。
240	同	郡司　覺之進	長州藩	郡司　覺之進	長州藩
241	尾州藩	辻仲殿（辻彌兵衛）	尾州藩　辻仲殿	辻　彌兵衛	尾張藩、「辻」は誤りで「辻仲」が正解。
242	棚倉藩	佐々木　熊之助	棚倉藩	佐々木熊之助	棚倉藩
243	水戸藩	竹内　而平	水戸藩	竹内　而平	水戸藩
244	中川修理大夫様御家來	山本　黙九春	中川修理大夫様家來	山本　黙九春	岡　藩
245	土州藩	溝淵　廣丞	土州藩	溝淵　廣之丞	土佐藩、「溝淵廣之丞」が正解。郷士（1828－1909、四等士族士席）
246	越前勝山（侯御嫡）	小笠原　勇之助殿	勝山侯御嫡子	小笠原勇之助殿	幕　臣、大名嫡男（越前勝山藩）。
247		逸見　六郎		逸見　六郎	不　明
248	加州藩	歸山　仙之助	加州様家來	歸山　仙之助	加賀藩、藩の大砲方御用。象山捕縛後、大村益次郎に入門。
249	大野藩	戸塚　左近右衛門	大野藩	戸塚　左近右衛門	大野藩

250	同	樋口　眞吉	同	樋口　眞吉	土佐藩、「同」で大野藩は誤り。本表おける土佐藩門人の判定は、坂本保富『幕末洋学教育史研究』を基準に依拠（以下、土佐藩門人の場合は同様）。
251	同	桑原　介馬	同	桑原　介馬	土佐藩、「同」で大野藩は誤り。本表おける土佐藩門人の判定は、坂本保富『幕末洋学教育史研究』を基準に依拠。
252	島津	澁谷　猶右衛門	島津	澁谷　猶右衛門	薩摩藩
253	同	樺山	「薩摩藩」	樺山	薩摩藩
254	勝山藩	三神　八百吉	勝山藩	三神　八百吉	越前勝山藩
255	佐賀藩	佐藤　文平	佐賀藩	佐藤　久平	佐賀藩、「文平」が正解。
256	※空欄（氏名記載の順番相違）		牧野備前守様家來長岡藩	三島　億次郎	長岡藩、「億次郎」は「億二郎」の誤り（以下、長岡藩関係の誤りは坂本保富著『米百俵の主人公　小林虎三郎－日本近代化と佐久間象山門人の軌跡－』を参照の判断）。
	嘉永六癸丑歳六月砲術稽古出座帳抄録		**嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録**		宮本版「及門録」は「歳」が欠落。両史料とも「抄録」と明記（部分であり全体ではないとの意味）。
257	大野藩　六月三日入門	安藤　與四郎	大野藩　六月五日入門	安藤　與四郎	大野藩、入門日が「三日」と「五日」で相違。
258	佐土原	肝付　角衛	「佐土原藩」	肝付　角衛	佐土原藩
259	佐土原	上山　彌惣治	佐土原藩	上山　彌惣治	佐土原藩
260	同	青木　新三	同「佐土原藩」	青木　新三	佐土原藩
261	同	有田　龍介	同「佐土原藩」	有田　龍介	佐土原藩
262	薩州　（重出）	野村　松次郎	薩州　重出	野村　松次郎	薩摩藩、「重出」（No. 227, No. 262）。
263	大野藩	久保木　又次郎	大野藩	久保木又次郎	大野藩
264	（大野）　六月五日入門	岡與　三右衛門	「大野藩」	岡與　三左衛門	大野藩、「左」は誤りで「右」が正解。
265	（大野）　六月五日入門	村井　惣藏	「大野藩」　六月五日入門	村井　惣藏	大野藩
266	※空欄（氏名記載の順番相違）		同「大野藩」	西郷　操	大野藩
267	※空欄（氏名記載の順番相違）		同「大野藩」	安川　恒次	大野藩
268	※空欄（氏名記載の順番相違）		同「大野藩」	平井　良藏	大野藩
269	※空欄（氏名記載の順番相違）		同「大野藩」	長井　宗三郎	大野藩、「長井」は誤りで「長江」が正解。
270	川勝家來	稲田　豊次	川勝家來	稲田　豊次	幕臣家来、旗本・川勝家家来。
271	川勝家來	細見　兵次郎	同「川勝家來」	細見　兵次郎	幕臣家来、旗本・川勝家家来。

272	大野藩　六月九日入門	小菅　祐三郎	大野藩　六月九日入門	小菅　祐三郎	大野藩
273	同	松　金太郎	同(大野藩)	松　金太郎	大野藩、「松木源太郎」の誤読か(松代藩に「松」の姓ナシ)。
274	同	竹田　重太郎	同(大野藩)	竹田　重太郎	大野藩
275	同	玉木　藤次郎	同(大野藩)	玉木　藤次郎	大野藩
276	同	中山　善太郎	同(大野藩)　十月九日入門	中山　善太郎	大野藩
277	同(土佐藩の誤り)	廣田　文吉	同(大野藩ではなく土佐藩)	廣田　文吉	土佐藩、大野藩は誤りで「土佐藩」が正解。
278	同(大野藩)　(三重出)	宮田　平十郎	同(大野藩)	宮田　平十郎	大野藩、「重出」の「No. 310」は「(中津藩)宮田兵十郎」で矛盾。
279	同	西郷　操	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大野藩、「空欄」は追加挿入等で氏名記録順番のズレにより発生。
280	同	安川　恆次	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大野藩
281	大野藩	平井　良藏	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大野藩
282	同	長江　宗三郎	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大野藩
283	同	前田　周平	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大野藩
284	六月十七日入門	伊藤　恭藏	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	不　明
285		石川　準之助	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	不　明
286		恆吉　惣兵衛	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	不　明
287		山口　權左衛門	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	不　明
288	大野藩　六月廿日入門	津田　彌作	※空欄(氏名記載の順番相違)	※空欄	大野藩
289	同	福永　市太郎	同(大野藩)　六月廿日入門	福永　市太郎	大野藩
290	同	佐々木　代之助	同(大野藩)	佐々木　代之助	大野藩
291	同	中安　百助	同(大野藩)	中安　百助	大野藩
292	同	中安　伊左衛門	同(大野藩)	中安　伊右衛門	大野藩、「右」は誤りで「左」が正解。
293	同	今井　織江	「大野藩」	今井　織江	大野藩
294	金澤　九月四日入門	鈴木　義太郎	金澤(加賀藩)　九月四日入門	鈴木　義太郎	加賀藩
295	本堂家來	高橋　浪江	本堂家來	高橋　浪江	旗本家臣
296	中津	廣瀬　新五兵衛	中津	廣瀬　新五兵衛	中津藩

297		川崎　泰十郎		川崎　泰十郎	不　明
298	加州	蔵　儀左衛門	加州	蔵　儀左衛門	加賀藩
299	熊本　九月四日入門	永鳥　三平	熊本　九月四日入門	永鳥　三平	熊本藩
300	熊本　重出　九月四日入門	竹内　而平	同	竹内　而平	熊本藩、「重出」（No. 243）。
301	大野　（三重出）	若澤　彌太郎	大野	若津　彌太郎	土佐藩、土佐藩「岩崎弥太郎」の偽名か（No. 234）。
302	同（土佐藩の誤記）	平尾　喜内	同（土佐藩の誤記）	平尾　喜内	土佐藩、「大野藩」は誤りで「土佐藩」が正解。
303	長州	白井　小助	長州	白井　小助	長州藩、象山から砲術、斎藤弥九郎から剣術、安積艮斎から文学を学ぶ、同藩同門の吉田松陰と深い親交。
304		大屋　和左衛門		大屋　和左衛門	不　明
305		河野　軍大夫		河野　軍太夫	不　明、「大」は誤りで「太」が正解。
306	（土佐藩）　九月十一日入門	平田　善助	（土佐藩）　九月十一日入門	平田　善助	土佐藩、「平田善助」は誤りで「土佐藩」の「弘田善助」が正解。
307	熊本（徳山藩の誤記）	兼崎　昌司	熊本（徳山藩の誤記）	兼崎　昌司	徳山藩、「熊本藩」は誤り（『三白藩家臣人名事典』第6巻213頁）。
308	中津	中西　藤左衛門	中津	中西　藤左衛門	中津藩
309	同	森本　長次郎	中津	森本　長次郎	中津藩
310	（中津藩）　（重出）	宮田　兵十郎	中津	宮田　平十郎	中津藩、「平十郎」は誤りで「兵十郎」が正解。宮本版では「中津藩」。また、「重出」の初出「No. 278」では「大野藩　宮田平十郎」で矛盾。
311	九月十四日入門	明石　保三郎	九月十四日入門	明石　保三郎	不　明
312		有原　釣藏		有原　釣藏	不　明
313	大垣	奥富　松三郎	大垣	奥富　松三郎	大垣藩
314	土州	弘田　善助	土州	弘田　善助	土佐藩
315	加州（土佐藩の誤記）（三重出）	泉澤　彌太郎	加州	泉澤　彌太郎	（土佐藩）、「加賀藩」ではなく「土佐藩」の「岩崎弥太郎」の偽名か（No. 234）。
316	長岡　（重出）	河井　継之助	長岡	河井　継之助	長岡藩
317	九月十六日入門	生田　彦四郎	九月十六日入門	生田　彦次郎	不　明、「彦次郎」は誤りで「彦四郎」が正解。
318		萩野　柔進		萩野　柔進	不　明、「萩」は誤りで「萩」が正解（毛筆史料の誤読か）。
319	小笠原左京大夫内	松宮　董助	小笠原左京大夫内	松宮　薫助	小倉藩、「薫」は誤りで「董」が正解（毛筆史料の誤読か）。
320		原田　立太郎		原田　立太郎	不　明

321	※空欄(氏名記載順序相違)			溝淵　廣之丞	土佐藩、(坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照)。
322	九月廿一日入門	下山　八郎	九月廿一日入門	下山　八郎	不　明
323		服部　彦藏	九月廿一日入門	服部　彦藏	不　明
324	土州　九月廿五日入門	森澤　録馬	土州	森澤　錄馬	土佐藩、(坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照)。
325	土州　九月廿五日入門	横田　竟三郎	土州　九月廿五日入門	横田　竟三郎	土佐藩、(坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照)。
326	土州　九月廿五日入門	井上　佐市郎	同「土佐藩」	井上　佐一郎	土佐藩、「佐市郎」は誤りで、「佐一郎」が正解、吉田東洋の側近。
327		難波　仙藏		難波　仙藏	不　明
328	佐土原	伊地知　早馬	佐土原	伊上知早馬	佐土原藩、「伊上知」は誤りで、「伊地知」が正解。
329		砂越　努		砂越　努	不　明
330		今井　市之丞		今井　市之丞	不　明
331	(長岡)　(重出)	河島　永次郎		河島　永次郎	長岡藩、「河島永次郎」は誤りで「川島鋭次郎」が正解。明治以後は「三島億二郎」と改名。長岡復興に尽力。福澤諭吉と親交深く牧野忠毅第13代藩主を福澤諭吉の慶應義塾に入学させて教育を委託。
332	尾州　十月三日入門	間瀬　權右衞門	尾州　十月三日入門	早瀬　權右衛門	尾張藩
333	(土州)	加村　左膳	外雲關小藩	加藤　左膳	土佐藩、「外雲關小藩」ではなく「土佐藩」の「寺村左膳」が正解。
334		湊　三郎	同「外雲關小藩」	湊　三郎	不　明(外雲關小藩)
335		横田　千之丞	同「外雲關小藩」	横田　千之丞	不　明(外雲關小藩)
336		今井　謙助		今井　謙助	不　明
337	十月四日入門	長沼　覺	十月四日入門	長沼　覺	不　明
338	佐賀　十月七日入門	成富　八助	佐賀藩	成富　八助	佐賀藩
339		鴨折　彌大夫		鴨折　彌太夫	不　明、「太」は誤りで「大」が正解。
340	中津	小口　順之助	中津	小口　順之助	中津藩
341	上田	瀧澤　省吾	上田	瀧澤　省吾	上田藩
342	籏本(旗本)	山岡　熊次郎	麾本(「旗本」)	山岡　熊次郎	幕　臣、旗本。
343	上田　十月八日入門	岡部　健六	上田　十月八日入門	岡部　健六	上田藩
344	上田　十月八日入門	横田　漸次郎	上田　十月八日入門	横田　漸次郎	上田藩

345	上田　十月八日入門	影山　半藏	上田　十月八日入門	蔭山　半藏	上田藩
346	上田　十月八日入門	山田　幸兵衛	上田　十月八日入門	山田　幸兵衛	上田藩
347	上田　十月八日入門	□原　伊理右衛門	上田　十月八日入門	鎌原　伊理右衛門	上田藩、宮本版の「鎌原伊理右衛門」が正解。
348		姉崎		姉崎	不　明
349		加村　織之丞	十月十日入門	加村　織之丞	不　明
350		金崎　庄藏		金崎　庄藏	不　明
351		園部　健六		岡部　健六	不　明、「岡」でなく「園」が正解（毛筆史料の誤読か）。「園部」は私塾を開いて教育実践。「保科百助」は門人。
352	上田　九月十五日入門	恒川才八郎　後重遠	上田	恒川　才八郎	上田藩、新漢字「恒」を使用、新旧漢字が混在。
353	（上田）　九月十七日入門	齋藤　盛太郎	同　九月十七日入門	齋藤　盛太郎	上田藩
354	小笠原　（重出）	野澤　蓑藏	小笠原	野澤　簑藏	幕臣家来、旗本・小笠原家の家臣。
355		福間　湮太郎		福間　湮太郎	不　明
356	（越前勝山藩）　十月十七日入門　（三重出）	小笠原勇之助殿	土州　九月十七日入門	小笠原勇之助殿	越前勝山藩、「土佐藩」ではなく「越前勝山藩」の「藩主嫡子」。
357	土州　十月十九日入門	古田　小膳	土州	古田　小膳	土佐藩、「古田小膳」は誤りで「寺田左膳」が正解（700石中老）、山内容堂の側近で大政奉還を建白。
358	土州　十月十九日入門	山田　太平	同	山田　太平	土佐藩、（坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照）。
359	土州　十月十九日入門	野中　太郎	同　九月十九日入門	野中　太郎	土佐藩、「野中太郎」は「野中太内」の誤り。野中兼山の末裔。吉田東洋の側近で大目付。
360	土州　十月十九日入門	阿部　喜藤次	同	阿部　喜藤次	土佐藩、（坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照）。
361	土州　十月十九日入門	衣斐　小平	同	衣斐　小平	土佐藩、文久２年（1862）12月、象山を土佐藩に招聘すべく藩の使者として松代へ。衣斐小平・中岡慎太郎・原四郎の３名で訪問。
362	土州　十月十九日入門	山本　大藏	同	山本　大藏	土佐藩、（坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照）。
363	（幕臣）　九月廿一日入門	川勝　光之助（殿）	（幕臣）　九月十七日入門	川勝　光之助（殿）	幕　臣、「殿」を付すべき。幕府陸軍歩兵頭並。
364	（幕臣）　（三重出）	伴　鐵太郎（殿）	（幕臣）	伴　鐵太郎	幕　臣、長崎海軍伝習所２期生・築地軍艦操練所教授・慶応４年に軍艦頭。
365	熊本	坂部　啓藏	熊本	坂部　啓藏	熊本藩
366	薩州	有川　喜左衛門	薩州	有川　喜左衛門	薩摩藩

367	（土州）　重出	野中　太内	（土州）	野中　太内	土佐藩、（坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照）。
368	（土州）	高村　直藏	（土州）	高村　直藏	土佐藩、（坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照）。
369	重出	宮原　治郎左衞門		宮原　治郎左衞門	不　明
370	「中津藩」　重出	折田　與右衞門	「中津藩」	折田　與左衞門	中津藩、「左」は誤りで「右」が正解。
371		上川　喜左衞門		上川　記左衞門	不　明
372	薩州	橋口　源右衞門	薩州	橋口　源左衞門	薩摩藩、「左」は誤りで「右」が正解。
373		衣笠　卯七郎		衣笠　卯七郎	不　明
374	（幕臣家来）	村岡　治八郎	「幕臣家来」	村岡　治八郎	幕臣家来
375	（土州）　重出	阿部　喜東次	（土州）	阿部　喜東次	土佐藩
376		佐藤　幾之丞		佐藤　幾之丞	不　明
377		尾崎　彌三左衞門		尾崎　彌三左衞門	不　明
378		永井　鎧之丞		永井　鎧之丞	不　明
379		服部　藤兵衞		服部　藤兵衞	不　明
380		川俣　文助		川俣　文助	不　明、「俣」は誤りで「脛」が正しい。
381	大垣	伊藤　惣之進	大垣	伊藤　惣之進	大垣藩
382	大垣	明石　弁之助	同（大垣）	明石　辨之助	大垣藩、「訂正「及門録」」は旧字「辨」を使用すべきところ新字「弁」を使用。新旧漢字の混在。
383	諸侯　（重出）	逸見　六郎	諸侯　（重出）	逸見　六郎	諸侯家臣
384	土州　十二月朔月	大庭　毅平	土州	大庭　毅平	土佐藩、谷村才八、坂本龍馬と共に江戸遊学し象山塾に同時入門。藩大目付。
385	土州　十二月朔月	谷村　才八	土州	谷村　才八	土佐藩、同上
386	土州　十二月朔月	坂本　龍馬	同（土州）　二月朔月入門	坂本　龍馬	土佐藩、同上、郷士。薩長同盟に尽力、倒幕運動に関与。
387	熊本　十二月七日	莊村　助右衞門	熊本　十二月七日	莊村　助左衞門	熊本藩、「左」は誤りで「右」が正解。
388		豊邊　政之丞		豊逸　政之丞	不　明
389		三浦　次郎右衞門		三浦　治郎右衞門	不　明、「治」は誤りで「次」が正解。
390	御家人	設楽　寛司	御家人	設楽　寛司	幕臣（御家人）

391	長岡	稲垣　與七	長岡	稲垣　與七	長岡藩
392	長岡	佐藤　廣三	長岡	佐藤　廣三	長岡藩
393	土州	野澤　和泉	土州	野澤　和泉	土佐藩
394	（土州）	溝口　廣見		溝口　廣召	土佐藩、「廣召」は誤読で「廣見」が正解。
395	十二月十四日	越賀　範三郎	十二月十四日	越賀　範三郎	不　明
396	秋田	柳澤　主馬	秋田	柳澤　主馬	秋田藩
397	秋田	茂木　享左衛門	秋田	茂木　享左衛門	秋田藩
398		田邊　太市		田邊　太市	不　明
399	長岡	菅沼　幾三郎	長岡	菅沼　幾三郎	長岡藩
400	熊本	荘林　菅太郎	熊本	荘林　菅太郎	熊本藩
	安政元甲寅歳正月砲術稽古出座帳抄録		**安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録**		宮本版「及門録」には「歳」が欠落。また両史料とも「抄録」と明記。
401		丹羽瀬清左衛門		丹羽瀬清左衛門	不　明
402		菊地　新藏		菊地　新藏	不　明
403	大垣	小原　仁兵衛	大垣　戸田家老臣諱忠寛字栗卿通称二兵衛鐵心と號す	小原　二兵衛	大垣藩、「二兵衛」は誤りで「仁兵衛」が正解。美濃大垣藩城代家老「小原鉄心」のこと。明治維新の版籍奉還で大垣藩大参事。
404	重出	藤原　重太	（重出）	藤原　重太	不　明
405	大垣	小寺　常之助	大垣	小寺　常之助	大垣藩
406	小笠原（勇之助家来ヵ）	村岡　金八郎	小笠原	村岡　金八郎	藩臣家臣
407	中津藩　従是以下島津君門人	大西　一郎次	中津　従是以下島津君門人	大西　一郎次	中津藩
408	同	戸倉　新右衛門	中津	戸倉　新五右衛門	中津藩
409	同	荒尾　五郎三郎	中津	荒尾　五郎三郎	中津藩
410	同	荒尾　繁次郎	中津	荒尾　繁五郎	中津藩、「五」は誤りで「次」が正解。
411	同	内田　庄四郎	中津	内田　左四郎	中津藩
412	土州　（重出）	大場　義兵衛	土州	大場　義之丞	土佐藩、「義之丞」は誤りで「義兵衛」が正解。
413		渡邊　銀次郎		渡邊　銀次郎	不　明

414	中津　重出	簗　又之丞	中津　（重出）	簗　又之亟	中津藩、「簗」は「簗瀬」の誤り。また、宮本版は旧漢字「亟」を使用。他は全て新漢字「丞」を使用、新旧漢字の混在。
415		中村　清五郎		中村　清五郎	不　明
416		中村　直五郎	※空欄（氏名記載順序の相違）	※空欄	不　明
417	（松代）	加治木　部兵衛	（松代）	加治木　部兵衛	松代藩、「梶木軍兵衛」と同一人物では。
418	松代　正月十四日	鈴木　熊次郎	松代　正月十四日	鈴木　熊次郎	松代藩
419	同	出浦　惣右衛門	（松代藩）	出浦　惣右衛門	松代藩
420	同	原　半七郎	（同）	原　半七郎	松代藩
421	同	小川　邦人	（同）	小川　邦人	松代藩
422	同	藤井　淺右衛門	（同）	藤井　淺右衛門	松代藩
423	同	松村　助右衛門	（同　正月十四日	松村　助右衛門	松代藩
424	同	瀧村　渚	（同）	瀧村　渚	松代藩
425	同	鎮目　實之助	（同）	鎮目　實之助	松代藩
426	同	玉川　渡	（同）	玉川　渡	松代藩
427	同	久保　喜代馬	（同）	久保　喜代馬	松代藩
428	同	根村　熊五郎	（同）	根村　熊五郎	松代藩
429	同	岡本　精一郎	（同）	岡本　精一郎	松代藩
430	同	小宮山　登	（同）	小宮山登	松代藩
431	同	前田　角次郎	（同）	前田　角次郎	松代藩
432	同	小松　文治	（同）	小松　文治	松代藩
433	同　（重出）	友野　俊藏	（同）	友野　傳藏	松代藩、「傳藏」は誤りで「俊藏」が正解。
434	同（松代）	根來　順藏	（同）	根本　順藏	松代藩、「根本」は誤りで「根來」が正解。
435	同（松代）	石川　新八	（同）	石川　新八	松代藩
436	同（松代）	畑　權兵衛	（同）	畑　權之丞	松代藩、「權之丞」は誤りで「權兵衛」が正解。
437	同（松代）	近藤　友喜	（同）	近藤　友喜	松代藩

438	同（松代）	禰津　直人	（同）　正月十四日	禰津　直人	松代藩
439	筑後守息	水野　甲太郎	水野筑後守息	水野　甲太郎	幕　臣、「水野筑後守」は500石の旗本、黒船来航当時の浦賀奉行、長崎奉行等を歴任。大目付格・筒井政憲と勘定奉行・川路聖謨を補佐。
440	松代　（松代）	小幡　長右衛門	松代	小幡　長右衛門	松代藩
441	中津	安食　**銈**次郎	中津	安食　鑄次郎	中津藩、「鑄次郎」は誤りで「銈次郎」が正解。
442	膳所	久保田　熊司	膳所	久保田熊司	膳所藩
443	松代領	**廉**澤　峯吉	松代藩	廣澤　峯吉	松代藩、「廣澤」は誤りで「廉澤」が正解。
444	松代	松木　源太郎	松代	松木　源太郎	松代藩、「松　金太郎」は同じ人物では、「松木金太郎」の父、和漢洋の三学、特に西洋砲術に優れ、象山没後は蟻田賢之助と藩士教授を担当。維新後は、松代学校長（旧松代文武学校）。
445	松代	片岡　弘人	（松代藩）	片岡　弘人	松代藩
446	松代	牧野　大右衛門	（同）	牧野　大右衛門	松代藩
447	松代	大森　**莊兵衛**	（同）	大森　藏之丞	松代藩、「藏之丞」は誤りで「莊兵衛」が正解。
448	松代	成澤　縫殿右衛門	（同）	成澤　縫殿右衛門	松代藩
449	松代	山田　權之助	（同）	山田　權之助	松代藩　万延元年に「兵衛」と改名。
450		藏田　言合**左**衛門		藏田　言合右衛門	不　明、「右衛門」は誤りで「左衛門」が正解。
451		小休　待次郎		小休　待次郎	不　明
452		代番　周左衛門		代番　周左衛門	不　明
453		川面　**城**之助		川面　誠之助	不　明、「誠之助」は誤りで「城之助」が正解。
454	（土佐）	和田　澤藏	（土佐）	和田　澤藏	土佐藩、（坂本保富「幕末洋学教育史研究」参照）。
455	大森町打　正月十二日	林　　東	大森町打	林　　東	不　明
456		向山　正**朔**		向山　正朝	不　明、「正朝」は誤りで「正朔」が正解。
457	重出	岡　虎之助		岡　虎之助	不　明
458	旗本　（三重出）	梶木　軍**兵衛**	三重出	梶木　軍之亟	不　明、「軍之亟」は誤りで「軍兵衛」が正解。旗本の「梶木軍兵衛」か。
459	同	小笠原歩三郎（殿）		小笠原歩三郎（殿）	幕　臣、「旗本」であるので「殿」を付加すべき、「三重出」。
460	元中津	澤田　衛介	元中津	澤田　衛介	中津藩（元）

461	大垣	唐木田　兵次郎		廣木田兵次郎	大垣藩、「廣木田」は誤りで「唐木田」が正解。
462		子安　鐵五郎	(大垣)	子安　鐵五郎	大垣藩、「子安峻」のことで「鐵五郎」は号。『横浜毎日新聞』を創刊、出版社「日就社」を創業、日本最初の『英和字典』を発行、「読売新聞社」の創立者。
463	(松代藩)　重出	山田　幸兵衛		空欄	松代藩
464	大垣	山村　定三郎	大垣	山村　定三郎	大垣藩
465	(幕臣)　重出	小笠原　勇之助(殿)	※空欄(氏名記載順序相違)	空欄	幕臣、越前勝山藩の勝山侯嫡子、「三重出」(No246、No. 356)。
466	中津	津田　貢	※空欄(氏名記載順序相違)	空欄	中津藩
467		尾林　小平太	※空欄(氏名記載順序相違)	空欄	不　明
468	中津	崎山　金三郎	中津	崎山　金三郎	中津藩
469		奥田　久米助		奥田　粂之助	不　明、「粂之助」は誤りで「久米助」が正解。
470	越前	橋本　左内	越前	橋本　左内	越前藩、幕末思想家、緒方洪庵「適塾」を経て象山塾に入門。15歳の著書『啓発録』。
471	※空欄(氏名記載順序相違)	※空欄	※空欄(氏名記載順序相違)	小笠原勇之助(殿)	幕　臣、氏名のみ記載。「小笠原」は「旗本」であるので「殿」を付加すべき、「三重出」。
472	久留米神職	牧　和泉	久留米神職槇木和泉守	牧　和泉	久留米藩、神官・真木和泉守保臣(真木和泉守)。

【 注 記 】

1）英国がインド製造のアヘンを、清朝中国に輸出し巨額の利益を獲得したこと。これによって中国にはアヘン中毒患者が蔓延、ついに中国側はアヘンの全面禁輸を断行し英国商人の保有するアヘンを没収焼却した。この中国の措置に反発した英国は、東インド艦隊を派遣して一方的に中国を攻撃。これに中国側も応戦して戦争に拡大。だが、1840年から２年間に亘ったアヘン戦争は英国の圧倒的勝利で終結した。佐々木正哉編『鴉片戦争の研究』「資料編」（近代中国研究叢刊、東京大学出版会発売、1964）その他を参照。

2）終戦後の南京条約（1842）で、清朝中国は多額の賠償金（2,100万＄）の支払と香港割譲、５港開港（広州、福州、廈門、寧波、上海）を英国に認めた。更に翌年の附属協定で、片務的最恵国待遇、領事裁判権（治外法権）、協定関税（関税自主権喪失）という徹底した不平等条約を締結させられ英国に植民地同様の関係を強いられた。同上の佐々木正哉編『鴉片戦争の研究』「資料編」（近代中国研究叢刊、東京大学出版会発売、1964）その他を参照。

3）高野長英・渡辺崋山・小関三英たちは武士であるが、当時の蘭学研究会「尚歯会」に属する蘭学者であり、西洋医学を学び、島国である日本の海防の不備を指摘する著書を著し幕府に警鐘を鳴らした。高野長英『戊戌夢物語』（天保９、1837）、渡辺崋山『慎機論』（天保９、1838）など。

4）明治３年（1870）に起きた美談「米百俵」の出来事の翌年、虎三郎は復興が緒に就いたばかりの郷里長岡を去り上京する。その後は、東京を舞台として最新の英米教育書の校訂や中国在住のドイツ宣教師の比較教育文化論『大徳国学校論略』を翻刻して日本に紹介したり、近代教科書『小学国史』（全12巻）を編纂・刊行するなど、日本近代化に関する多岐に亘る貢献をなした象山門人であった。だが、筆者が、彼の日本近代化と共に生きた生涯の全容を解明するまでは、歴史学界ではほとんど無名であった。彼の詳細については、坂本保富著『米百俵の歴史学－封印された主人公と送り主－』（学文社、2006年）及び『米百俵の主人公　小林虎三郎－日本近代化と佐久間象山門人の軌跡－』（学文社、2011年）を参照されたい。

5）北京大学の３年後（1901年）に設立された中国２校目の名門国立大学。2001年には中国教育省より国内主要第一級大学に選定された。同大学は30の大学部・大学院部で構成され、学生総数は約９万人という大規模大学である。筆者が2018年９月に中国（中国文化協会）から招聘され同大学で行った記念講演「日本近代化の光と影」は、アジア文化研究学会『アジア文化フォーラム』第20号（2020年３月）に巻頭論文「現代中国の『今』を見る－国立山東大学招聘訪問の講演から－」として掲載。他に中国山東大学側の新聞報道などを参照。

6）著名な日本研究者のコロンビア大学名誉教授で日本の文化勲章受章者であるドナルド・キーン（Donald Lawrence Keene、1922－2019）によって、山本有三の戯曲『米百俵』が英訳された（英訳版“One Hundred Sacks of Rice”（長岡市米百俵財団、1998年））。

7）これまで判明している象山門人帳史料「及門録」は次の５種類である。①宮本仲著『佐久間象山』（岩波書店、1932年）所収の「及門録」－略称は宮本版「及門録」、②信濃教育会『増訂　象山全集』第５巻所収の「訂正　及門録」（信濃毎日新聞社刊、1935年）－略称は全集版「訂正及門録」、③信濃教育博物館蔵「及門録」（全集版「訂正及門録」の草稿と推定、1934年に校了）。筆者がこの「及門録」を信濃教育博物館で発見し、初

めて内容分析をして紹介した研究論文は、坂本保富「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅱ）」（『信州大学　坂本保富教授定年退職記念論文集』所収、信州大学全学教育機構、2013年）－略称は信教版「及門録」、④京都大学附属図書館蔵「及門録」（信濃史学会機関誌『信濃』第48巻第７号所収の青木歳幸氏の資料紹介「佐久間象山門人帳『及門録』再考」、1996年）－略称は京大版「及門録」、⑤国立歴史民俗博物館「地域蘭学者門人帳人名データベース」の中の「師匠＝佐久間象山」に収められた「及門録」（青木歳幸氏が②の「及門録」を修正簡略化して作成。なお、国立歴史民俗博物館の「及門録」についての説明は、同博物館研究報告第116集『地域蘭学の総合的研究』所収の「蘭学者門人帳について」の第28「佐久間象山」に論述）－略称は歴博版「及門録」。

8）筆者は、これまで筆者自身が入手している５種類の「及門録」が内在する様々な誤謬を析出して比較考察し、歴史研究史料として信頼性のある最新の訂正版「及門録」を作成すべく研究を重ねてきた。その一連の研究成果は下記の通りである。

①「象山研究史上の問題点－特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って－（上）」（信濃教育会編『信濃教育』第1229号、1989年４月）
②「象山研究史上の問題点－特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って－（下）」（信濃教育会編『信濃教育』第1230号、1989年５月）
③「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者－幕末維新期における『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開－」（日本歴史学会編『日本歴史』第506号、1990年７月）
④「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）－京都帝国大学附属図書館所蔵「及門録」の内容と問題点－」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年３月）
⑤「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅱ）－信濃教育博物館所蔵「及門録」の内容と史料的意義－」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年３月）
⑥「国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データベース』の誤謬－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅲ）－」（平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第１号、2014年10月）
⑦「青木歳幸氏の京都大学附属図書館蔵『及門録』の解読紹介とその誤謬－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅳ）－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第19号、2014年12月）
⑧「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅴ）－」（平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第２号、2015年３月）
⑨「象山の思想基盤形成における父親の武士道教育の意義－幕末期における「東洋道徳・西洋芸術」思想成立への主体性形成－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第22巻第１号、2017年11月）
⑩「佐久間象山門人の確定に関する先行研究の検討（Ⅰ）－井上哲次郎・宮本仲の紹介した『及門録』の分析－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第23巻１号、2019年２月）

9）先の注記７）に紹介したごとく、公表された「及門録」は毛筆写本版及び解読活字版

など全５種類、すなわち宮本版、全集版、京大版、信教版、歴博版である。

10）前掲８）に紹介した論文⑩「佐久間象山門人の確定に関する先行研究の検討（Ⅰ）－井上哲次郎・宮本仲の紹介した『及門録』の分析－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第23巻１号、2019年２月）。

11）増訂『象山全集』（全５巻）の編纂主任を大役を拝命した三井圓二郎（明治３、1870－昭和12、1937）は、明治・大正時代の信州教育を担った教育者である。彼は、松代藩士で象山門人の山田定則（「及門録」に記載は「山田権之助」）の次男に生まれ、同藩の三井家の養子になった。地元の松代学校（現在の松代小学校、前身は松代藩文武学校）を卒業後、上京して英学塾に学び東京市立小学校教員になった。が、後に帰郷して母校の松代小学校教員となる。明治45年（1912）５月、信濃教育会より『象山全集』（初版、全２巻）の編纂委員を委嘱され、大正２年（1913）の「佐久間象山先生五十年祭」に合わせて無事に刊行、大役をはたした。その後、県立長野師範学校（現、信州大学教育学部）、野澤高等女学校（現、長野県野沢南高等学校）、飯山高等女学校（現、長野県飯山南高等学校）、松代高等女学校（現、長野県松代高等学校）等々、県内の中等学校教員を歴任。だが、増訂版『象山全集』の刊行が決定した昭和６年（1931）４月、還暦を迎えた三井は、同全集の編纂委員、それも膨大な史料を扱う編纂作業の全体を統括する実質的な責任者である「編纂主任」に抜擢されたのである。三井は単なる教育者ではなく象山研究をはじめとする「研究する教育者」であった。早くも彼は、20代の明治32年（1899）には『信濃教育』（第157号、1899、９）に論文「秋野先生のトラホーム駆逐策につき」を執筆掲載し、さらに増訂版『象山全集』の編纂中にも同誌第549号に「想い出」（昭和７、1932）を執筆している。

だが、何と言っても彼の謹厳実直な学究心が実を結んだのは「象山研究」であった。「佐久間象山五十年祭」の挙行に合わせて刊行された初版『象山全集』のときには、彼は『信濃教育』第325号（大正２年11月）の特集号「象山先生五十年祭記念号」の巻頭に「佐久間象山先生略伝」を執筆している。しかも同号で、当時、信濃教育会の会長であった佐藤寅太郎（1866－1943）が、「増訂象山全集序」第１巻に記した序文で、「本書の編纂は、松代藩士三井圓二郎専ら其の任に当る」と明記し、三井の多大な功績を讃えている。実は、佐藤は三井にとって生涯の恩師であり、信濃教育会を主導する佐藤の絶大な信頼を得ていたのである。

ところで、象山と同じ松代藩士であった三井は、幼少時から松代藩が世界に誇る歴史的偉人の象山を敬仰して学問研鑽に励み、教育者になった。以来、彼は、本格的に「象山研究」に取り組んだ。その最初の研究成果が前述の「象山先生五十年祭記念号」の巻頭を飾った最も基礎的研究である「佐久間象山先生略伝」であった。

だが、三井は、さらに象山研究を続け、「佐久間象山先生略伝」を正確無比な象山研究資料に完成させるべく、増訂版全集に収録される原典史料の全体に亘って調査研究を続けた。そうした彼の長年の象山研究の結晶が、初版全集の21年後に刊行された増訂版『象山全集』（全５巻、昭和９－10、1934－1935）の第１巻の巻頭を飾る、何と98頁にも及ぶ長文の「佐久間象山先生年譜」であった。その「佐久間象山先生年譜」は、三井が単独で編纂した草稿を恩師筋の飯島忠夫（学習院教授）が校訂して完成させたものである。三井は、同資料を編纂するに際して、徹底して象山史料に当たって象山の事蹟に関する事実を確認し、「年譜」の中に必要最少限度の重要な裏付けの原史料を引用して詳細かつ厳密に叙述した。三井の編纂した「佐久間象山先生年譜」は、その正確さと詳細さにおいて今日なお最も信頼される年譜資料であり、まさに「象山年譜の決定版」と

評してしかるべき内容である。この三井の「象山年譜」をみれば「象山の人と思想」の全体像を鳥瞰することができるほどに正確無比な出来映えであった。象山研究の総元締めである飯島忠夫や佐藤寅太郎が、彼の学識と人格を高く評価して薫陶し、増訂版『象山全集』の編輯主任にまで抜擢したことは十分に納得できる(『更級郡埴科郡人名辞書』)。

なお追記するに、彼は増訂版全集の編纂主任という多忙な中で象山研究論文「象山先生の忠誠」を『信濃教育』(第552号、昭和7、1932)に発表している。三井は勤勉実直な学究の徒であった。

以上は、信濃教育会更級教育部会埴科教育部会編輯発行『更級郡埴科郡人名辞書』(昭和14、1939。544－545頁)、信濃教育会編『象山全集』及び増訂版『象山全集』(信濃毎日新聞社)、信濃教育会編『信濃教育』その他を参照。

なぜ、三井は象山を敬仰し象山研究に生涯をかけたのか。実は、前述のごとく、三井は象山門人「山田定則」(「権之助」改め「兵衛」、1831－1897)の次男であった。父親の山田は、「訂正及門録」(増訂版『象山全集』所収)の安政元年の入門者名簿に「(松代藩)山田権之助」と記載されており、紛う方なく象山門人である。松代藩の下級武士(三十余石)ではあったが、幕末期には「御代同心頭」「払方奉行」など藩の要職を歴任した。なお、象山塾時代には、小林虎三郎(長岡藩、1828－1877)、子安峻(大垣藩、1836－1898)、松木竹山(松代藩、1829－1899、竹山は号、名は董正、通称は「源太郎」改め「源八」。象山より「東洋道徳・西洋芸術」思想を学び、明治維新以後は松代藩文学教授、長野県文学教授を経て明治5年(1872)の「学制」頒布時には西洋型近代学校制度が誕生すると松代町海津学校の校長に就任。前掲、宮本仲『佐久間象山』619頁)と親交が深かったという(『更級郡埴科郡人名辞書』『真田家家中明細書』)。

そのような山田の次男に生まれ、同藩三井家の養子となった「三井圓二郎」は、父親から象山の人と思想を聞き覚えて育ち、象山に対する敬慕の念が浸透し、彼の人格形成に大きな影響を与えたことは間違いない。それ故に「研究する教師」を生き抜いた彼は、教職に関する精進もさることながら、最も心血を注いだのは「象山研究」であった。上述のような象山との深い縁に支えられて、三井の象山研究は生涯に亘って進められ、今日なお象山研究に有益な前述の「佐久間象山先生年譜」が遺されたのである。

12) 初めて京都大学所蔵の象山関係史料を現地調査され、その詳細を論文「京都大学図書館所蔵佐久間象山資料」(長野郷土史研究会機関誌『長野』第177号、1994年9月)にまとめられたのは小林計一郎氏(1919－2009、長野郷土史研究会初代会長、信州短期大学元教授)であった。同氏は、同論文において同資料が京都大学に収められるに至った経緯を、「象山の遺族に伝えられたものが、何かの事情で京都大学に入ったもの」「象山の遺族に伝えられた史料の多くは、長野市の犀北館近山家の所蔵に帰し、現在は長野市の所蔵になっているが、その一部が京都大学に伝えられている」「昭和九年、『象山全集』が改訂されたときに『四書經注旁釋大學之部』が、写真版で収められたほかは、利用されなかったものが多い」などと推論し結論づけられた。現在、象山関係史料は、京都大学「維新特別資料文庫」に多数、収められているが、それらを資料分類項目から言えば「佐久間象山履歴書類」「佐久間象山遭難遺書」「象山墓碑草稿」「名士遺墨」「佐久間象山履歴書」「及門録」「浦賀日記」「横浜陣中日記」「西京日記」「佐久間象山年譜行状」の10種類である。そこには問題の「及門録」が間違いなく確認できる。だが、小林の紹介では、「及門録」の記載が欠落していたのである。

増訂版『象山全集』の編纂に際しては、「今回増補せるは四書經注旁釋大學之部と、(中略)又此の他に象山先生小傳、及門録、象山先生史料雑纂、各種索引とを加へたり」

（増訂版『象山全集』第１巻「凡例」）。特に「今回増補したる四書經注旁釋大學之部は、京都帝國大學圖書館に秘蔵せる先生の自筆本にて、特に乞ひて寫真版としたるものなり」と記しており、小林の指摘した通りである。だが、増訂版に初めて「及門録」を収めるに際して、編纂委員会は、「及門録の原本は所在明ならず。流布の寫本は誤謬頗る多く、前回に於てはこれを原稿とするに堪へざりしも、本會は爾来各種の史料に對照して幾多の訂正を加へ、又更に京都帝國大學圖書館に保存せられたる門弟故北澤正誠の傳へたる及門録寫本とも對校し、之を訂正及門録と名づけたるものなり」（増訂版『象山全集』第５巻所収「訂正及門録」冒頭の釈明文）と明記している通り、編纂委員会が底本と考える「及門録」を京大版「及門録」（北澤本）と対校して誤謬を訂正できただけでも、京都大学所蔵「佐久間象山関係資料」の存在は有益であったといえる。

なお、その後、青木歳幸氏も、京都大学図書館所蔵「佐久間象山資料」を実地調査され、小林氏の実地調査報告の論文内容を吟味されている（前掲、青木歳幸：史料紹介「佐久間象山門人帳『及門録』再考」（前掲、『信濃』第48巻第７号所収）。

13)「訂正及門録」の冒頭に注記された「説明文」あるいは「注意文」の原文は、すでに全文引用して紹介してあるので、ここでは、その大意を紹介するにとどめる。なお、原文は増訂版『象山全集』第５巻、761頁。

14)「及門録」を含む象山関係史料が京都帝国大学附属図書館に譲渡されたのは、所蔵者であった門人北澤正誠の没後、すなわち明治34年（1901）２月以降であることは間違いない。この事実を踏まえて譲渡時期を絞り込んだのは、青木歳幸氏である。同氏は、京都大学所蔵「佐久間象山関係資料」の実地調査を踏まえて同資料の受け入れ時期を「京都帝国大学附属図書館原簿」で確認しようとされた。その結果を、同氏は次のごとく説明している。

京都大学図書館原簿によれば、「佐久間象山関係資料」は、明治36年７月25日に、象山門人で松代藩士北澤正誠（まさなり、明治34年歿）旧蔵資料を北沢敦夫が寄贈したことになっている。また京都帝国大学への納入はその登録番の最初が「42543 36,7,25」とあることから、同図書館の42543番目の蔵書として、明治三六年七月二五日に登録されたことがわかる（前掲、青木歳幸：史料紹介「佐久間象山門人帳『及門録』再考」）。

15) 坂本保富「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）－京都帝国大学附属図書館所蔵「及門録」の内容と問題点－」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年３月）。

16) 西洋砲術の開祖である高島秋帆の門人帳は、練習毎の名簿はあるが、それら全体を総括した門人名簿は存在しない。その高島から西洋砲術の秘伝を伝授されたのが旗本の江川坦庵（太郎左衛門、1801－1855）と下曽根信敦（金三郎、1806－1874）であった。まず江川の場合、天保13年（1842）９月に最初に入門した佐久間象山（松代藩）から慶應３年（1867）３月までの26年間に及ぶ門人名簿として次の全９冊が遺されている。

①「旧幕府目見以上之部　一」483名	②「同　二」348名
③「旧幕府目見以下之部　一」436名	④「旧幕府小十人之部」401名
⑤「諸藩之部　一」433名	⑥「同　二」472名
⑦「同　三」489名	⑧「同　四」358名
⑨「御徒姓名　弐」390名	

上記の門人数は、英龍の没後に「太郎左衛門」を襲名し江川塾での教育に当たった「英龍（坦庵三男）」や「英武（坦庵五男）」の門人も含まれている。それにしても、江川家三代に亘る西洋砲術塾の門人数は、合計すると3810名もの多数を数える。西洋砲術・西洋兵学の教授が集団教授であるが故に、同時に多数の門人を教えることが可能であるからである。

なお、江川塾の門人名簿は、上記の他にも「砲術門人姓名簿」（全３冊：①「上巻」は幕臣152名、②「中巻」は諸藩士・旗本家臣451名、③「下巻」は諸藩士・旗本家臣110名）もある。さらに、嘉永６年（1853）から慶應３年（1867）までの門人名簿「御塾簿」（２冊、記載総数222名）もあり、この門人帳に付随した「免許取得者名簿」や「各藩通塾者人員簿」も存在するのである。

江川塾の門人名簿は数多くあるが、はたして各々の門人帳に記載された門人に重複がないかどうか、門人帳相互の内容を詳細に校合をする必要がある。

以上に紹介した江川塾の門人名簿は、仲田正之『韮山代官江川氏の研究』（吉川弘文館、1998年）、大原美芳『江川坦庵の砲術』（静岡県出版文化会、1987年）、石井岩夫『高島流砲術史料　韮山塾日記』（韮山町役場、1970年）、戸羽山瀚『江川坦庵全集』（全２巻、厳南堂書店、1972年）その他より引用した。

次に下曽根信敦の場合である。天保12年（1841）５月に、高島秋帆は武蔵国徳丸ヶ原（現在の東京都板橋区高島平）で日本初の西洋砲術・西洋銃陣の公開演習を行なった。その直後、彼は幕命により江川と下曽根の両旗本に西洋砲術・西洋兵学の秘伝を伝授し（最初は下曽根のみの伝授で、江川は後から追加の伝授）、この両名の私塾を通して西洋砲術・西洋兵学は急速に全国に広まっていった。だが、これまでは江川ルートによる伝播状況は、前述の江川塾の多様な門人帳が物語るように、かなり具体的に解明されてきた。しかしながら下曽根ルートに関しては門人帳などが全く見当たらず、門人側の証言による断片的な伝播状況しか分からなかった。

ところが2002年の春に高知市の郷土史研究家の松田智幸氏より電話を頂戴し、土佐藩から派遣された下曽根側近の門人で土佐藩の砲術師範であった徳弘孝蔵（董斎、1807－1881）が、恩師の下曽根が実施する西洋砲術繰練の記録や門人帳など筆記し、その写本版を土佐に持ち帰り保存している幕末洋学史研究の史料が発見されたとの連絡を受け、同史料の解読と分析を依頼されたのである。その史料こそが、幕末期土佐藩の軍事科学系洋学の内容と普及の実態を物語る「徳弘家資料」だったのである。

筆者は、毎年、夏休みや春休みに同史料を所蔵する高知市民図書館に通い、殆どの史料を複写と写真に収め、帰宅して解読作業に励み、順次、信州大学の「坂本研究室年報」に研究論文を発表していった。この研究は最終的には、12年の歳月を費やして研究の全体像をまとめ、『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館、2004年２月）として幸いにも高知市民図書館から公費出版されることになった。

実は、筆者は、この「徳弘家資料」の中の門人関係史料を分析・統合して全国規模での下曽根門人358名を析出し、「下曽根信敦西洋砲術門人一覧」（『幕末洋学教育史研究』、58－81頁）を作成したのである。同時に門人の内訳も「大名29家」「幕臣関係99名」「諸藩家臣186名」「その他２名」「不詳47名」という実態も明らかにすることができた。これによって従来は全く未知であった下曽根信敦ルートの伝播状況が解明され、高島秋帆伝授の江川ルートと下曽根ルートによる西洋砲術の普及実態が明らかになったのである。

17）同上、坂本保富著『幕末洋学教育史研究』の「下曽根信敦西洋砲術門人一覧」（『幕末洋学教育史研究』、58－81頁）及び「土佐藩徳弘門人一覧」（188－215頁）を参照。

18）象山は嘉永元年から江戸の松代藩邸で西洋砲術教授を開始し、門人たちに西洋砲術・西洋兵学の調練を実施していた。だが、それを毎回、記録し残していたという事実を史料的に確認することはできない。確かなことは、いずれの「及門録」も門人記載の基になっているのは、「嘉永六年六月分」と「安政元年正月分」の２回分の砲術繰練記録だけであるということである。

19）「訂正及門録」は、上記２件の砲術繰練記録の他に、嘉永２、３、４、５年の年別門人記録が含まれて内容が構成されているが、この４年間の門人記録は当該年に実施された西洋砲術繰練の記録ではなく、そこには儒学や洋学など様々な門人が含まれている。

20）象山は、すでに嘉永２年（1849）には松代藩士を中心に西洋砲術教授の活動をしていたが、翌年の黒船来航前の嘉永３年には松代藩下屋敷の深川藩邸に公然と「西洋砲術教授」の看板を掲げ、全国諸藩から殺到する入門者を受け入れていた。だが、象山門人は西洋砲術に限定されず、彼の本業である儒学の門人、さらには蘭語原書から西洋知識を吸収した洋学者・象山の門人も混在していたのである。この事実を、象山自らが、信州松代に在住の母親宛書簡で次のように報告している。

> 只今の勢にては砲術門人二三百人に相成候は遠からずと存じ申候。二三百人の門人御座候へば二季の謝儀ばかりにても百金にあまり可左候へばくらし方のみにてもつき可申、況や儒業生並に西洋学の門人も有之候事に候へば、其表にて医方など内職の様致し候よりはるかに姿もよろしく、第一に天下の益に相成候事に付何分左様仕奉存候。
>
> （嘉永三年七月二十六日付書簡「母に上る」、増訂版『象山全集』第３巻、585頁）

さらに象山は、殺到する西洋砲術の入門者の故に、西洋砲術家としての彼の令名は都下、否、全国に鳴り響く。しかしながら象山は、西洋砲術家と評価されることには不快感を抱く。彼の心中には、単なる西洋砲術の技術レベルの知識しか持ち合わせない高島秋帆や江川坦庵と同列に見られることへの強い不快感があり、自分の本業はあくまでも伝統的な儒学者であり、その上に儒学の説く「格物窮理」の精神を発揮して西洋諸科学を学び、原理的次元から西洋砲術・西洋兵学を教授する洋学者になったのだ、という強い自尊心があったものとみられる。それ故に彼は、「小生砲術之事等は誠に余業にて候へども洋書を習ひ候益は少しく有之候と存じ候儀に御座候」（同上『象山全集』第３巻、598頁）と、親交の深い幕府重臣・川路聖謨（1801－1868）に公言して憚らなかったのである。

21）井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」（東洋学芸社『東洋学芸雑誌』第31巻第398号所収、1914年11月）。

22）象山門人の北澤正誠が他界したのは明治34年（1901）２月で、その北澤が所蔵していた写本「及門録」は明治36年（1903）には京都帝国大学附属図書館に譲渡され（「明治36年７月25日に、象山門人で松代藩士北澤正誠（まさなり、明治34年歿）旧蔵資料を北沢敦夫が寄贈」、青木歳幸氏の史料紹介「佐久間象山門人帳『及門録』再考」、信濃史学会『信濃』第48巻第７号所収）、また京都大学側の納入登録の日時が「明治三六年七月二五日」と記録されていることも明らかにされている（同上、青木歳幸氏の史料紹介「佐久間象山門人帳『及門録』再考」）。したがって、井上哲次郎の知人が大正３年（1914）に東京の井上邸に持参してみせたという「及門録」は、それを井上邸に持参した時点で北澤正誠旧蔵の「及門録」はすでに京都帝国大学附属図書館の所蔵となっており、館外

に持ち出して井上にみせることは不可能なことである。したがって、両者は別物の「及門録」であったとみるべきである。

23) これまでの筆者の「及門録」研究の成果については注記８）を参照。

24) 増訂版『象山全集』（第５巻、1935年）所収の「索引」の部の74頁。

25) 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』（吉川弘文館、1959年）、514頁。

26) 佐藤昌介『洋学史論考』（思文閣出版、1993年）、299頁。

27) 坂本保富論文「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅴ）－」（平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第２号、2015年３月）。

28) 同上、坂本保富論文「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅴ）－」。

29) 海原徹『近世私塾の研究』（思文閣出版、1983年）。

30) 同上、海原徹『近世私塾の研究』276頁。

31) 片桐論文はあまりにも史料の分析や考察が粗雑で学術論文とはいえない。逆に、奈良本辰也・左方郁子『佐久間象山』（清水書院、1975年）は、嘉永４年５月に江戸木挽町に開設した象山塾が、単なる西洋砲術の専門塾ではなく、「蘭学」や「砲術」なども教授する複合的な教育内容の私塾であった実態を正確に把握しており、このことは関係史料の正確な読み込みの成果と評することができる（同書、85頁）。

32) 明治初年から昭和41年末までに刊行された人物研究文献目録『日本人物文献目録』（平凡社、1974年）の「佐久間象山」の項には図書・論文を合わせて合計163点が挙げられている。その後の40数年に刊行された研究成果を含めると優に200点は超えるものと思われる。象山の思想・活動・人物の解明に迫る分析の視座は、実に多種多様である。儒学、洋学、西洋砲術・西洋兵学を中心に西洋医学、数学、化学、薬学、殖産興業に関する農学・鉱物学・動物学、さらには漢詩文を中心とする文学、等々からの象山分析は、明治以降の著書や論文に散見できる。特に「象山先生五十年祭記念」「象山先生七十五年祭記念」の特集号を組んだ「信濃教育会」の『信濃教育』では、直接、象山の謦咳に接した門人たち（加藤弘之・石黒忠悳・北澤正誠、等々）や象山研究の第一人者たち（三上参次・宮本仲・飯島忠夫・辻新次・沢柳政太郎・湯本武比古・佐藤堅司、等々）が様々な視座から象山の思想と活動を分析している。それらの論考を総合すれば人間・象山の思想と行動の全体像が理解できるであろう。

学問の分野を問わず、特に歴史学などの人文科学では、研究課題の設定、分析史料の選定、史料の解読と解釈、等々に時代性が浸透せざるをえない。したがって、象山研究に際しても、象山と同時代の目線で内在的な理解をすることが基本ではあるが、その歴史的な意義の解釈などにおいては、少なくとも100年を単位とする時代性を超えた普遍的な目線に立脚することが求められるであろう。象山などの人物を含めた歴史的事象は、同時代の「今だけの今」を見詰めるのではなく、過去・現在・未来に連続する「今」という長期的視点から捉えて考察する必要性があるのではないか。偶然的な出来事としての歴史的事象の中に、時代性（一過性）という特殊性を貫通する普遍性（永遠性）に逢着できる「歴史を見る目」（史観）が必要なのではないか。それ故に、原点回帰の意味は大きく、再度、明治・大正・昭和期の資料を吟味し、その上で現代の細分化した様々な専門分野の視座から象山研究に向かうことが期待されるのである。これまでの膨大な象山研究の分析を踏まえて、今後の象山研究の可能性と限界に関しては別稿において論じる予定である。

33）軍人勅諭の下賜（明治15年、1882年１月）・教育勅語の発布（明治23年、1890年10月）、内閣制制度の発足（明治18年、1885年12月）、大日本帝国憲法の公布（明治22年、1889年２月）、帝国議会の開会（明治27年、1894年10月）、等々、明治10年代後半から20年代に入ると、西洋モデルの近代国家体制を支える法制度が急速に整備される。産業革命が軌道に乗り政治経済が安定してきたが故にか、過ぎ去りし過去を省みる余裕が生まれ、日本近代国家の誕生に功績のあった歴史的人物に次々と叙任・贈位され、それに伴い神社の創建や顕彰会の設立などが活発化する。ちなみに、象山に対する正四位の叙任は明治22年（1889）２月、顕彰会「象山会」の設立は明治44年（1911）４月、象山神社の造営は昭和13年（1938）であった。なお、門人の吉田松陰の場合は、恩師の象山と同時に明治22年（1889）２月に「正四位」に叙任され、さらに、死後、遺髪が埋められた遺髪塚（松陰墓地、市指定史跡）に、明治23年（1890年）松陰神社（県社）が建立され、処刑された直後に葬られた江戸の小塚原回向院（東京都荒川区）の墓地を改葬した東京都世田谷区若林の新墓所に、明治15年（1882年）、松陰神社が創建された。

34）信濃教育会編『信濃教育会九十年史』（昭和10、1935年）。「大正二年は、佐久間象山先生の五十年忌に相当す。先生が、元治元年七月十一日京都木屋町二條上ルの高瀬河畔（ママ、上付き）に於て兇刀に斃れてより、早くも五十年の星霜は経たるなり。本会は、其の前々年たる明治四十四年二月の議員会に於て既に象山先生五十年祭挙行のことを決議し、是が実行方案研究の為め、其の年十二月中其の記念事業取調委員を委嘱せしが、佐藤寅太郎氏主査となりて其の計画を樹てたり。」（同書253－254頁）と決議し、佐藤寅太郎を主任とする記念事業取調委員の委嘱や記念事業を決定している。「象山先生五十年記念事業」の詳細については同書254－257頁を参照。

35）信濃教育会は、明治19（1886）年７月に、「我邦教育の普及改良及びその上進を図る」ことを目的に設立された、長野県の教育を支える教員の職能団体であり、全国的に有名な「信州教育」を支えてきた公益法人である。設立以来130余年を経た現在もなお、教育雑誌『信濃教育』の刊行など、「信州教育」の継承と発展に関わる全面的な支援事業を続けている。特に同会の活動で注目すべきは、『象山全集』など県内関係の歴史的偉人の全集の刊行、信州教育に尽力した文化人や教育者の業績と顕彰を『信濃教育』に「特集号」で編集し刊行、などを創立以来、積極的に展開していることである。このような幅広い教育支援事業の長期的な継続は、他府県に例をみない実に意義深いものである。

36）小松謙次郎（1863－1932）は、松代藩士の横田数馬（1832－1880）の次男。大審院長の横田秀雄（1862－1938）の実弟。師事した寺子屋師匠の教育を通して象山先生の影響を受けて成長。松代文武学校を経て東京帝国大学に入学。卒業後は司法省、逓信省次官として活躍し「鉄道の父」と呼ばれる。退官後は勅選貴族院議員になるが、なおも鉄道大臣に就任するなど国家的要職を歴任。『長野県歴史人物事典』303頁を参照。

37）佐藤寅太郎（1866－1943、就任当時は信濃教育会副会長）。信濃国佐久郡岩村田宿（現在の長野県佐久市）出身。長野県師範学校を卒業後、長野県小諸高等学校校長、長野県理事官兼視学官、同学務課長を歴任、その後、信濃教育会副会長を経て同会長（８選：1918－1934）。1920年（大正９年）には第14回衆議院議員総選挙に出馬して当選。だが、1924年（大正13年）には学校現場に復帰して岩村田中学校校長を務め、名実共に信州教育の最高指導者として活躍、その名は全国の教育界に轟いた。『長野県歴史人物大事典』（郷土出版社、1989年、332頁）、村沢武夫編『信濃人物誌』（信濃教育会出版部、1965年）、その他を参照。

38）赤沢光太郎（1856－1936）松代町出身。明治21年（1888）屋代町他２ヶ村戸長。真田

伯爵家相談役、象山会幹事、松代町史編纂委員、象山神社建立に尽力、松代町の長老。前掲、『信濃人物誌』（信濃教育会出版部、1965年）、『更級郡埴科郡人名辞書』（信濃教育会更級教育部会埴科教育部会編輯・発効、1939年、８頁）その他を参照。

39）立田革（1845－？）：信州松代町出身、「秀英」を「革」と改名。叔父の立田楽水（1789－1870、操）は藩医で象山と極めて深い親交があった。それ故に、革も、象山塾入門を望むが塾居中にて正式門人にはなれず（「及門録」記載なし）。慶応元年６月に大鳥圭介（1833－1911）の紹介で福澤諭吉の慶應義塾に入塾。明治６年外務省出仕、明治７年以降はロンドン公使館、大蔵省書記官、太政官書記官、サンフランシスコ領事を歴任して1890年（明治23年）に韓国釜山領事（1890－1892）。なお、象山亡き後、子息の恪次郎を自邸に住まわせて面倒を見たという。以上、前掲『真田家家中明細書』（195頁）。前掲『更級郡埴科郡人名辞典』（287頁）、丸山信編『福澤諭吉門下』（日外アソシエーツ株式会社、1995年、９頁）、『慶應義塾出身名流列伝』（三田商業研究会編、実業之世界社、1909年、387－388頁）などを参照。

40）三井圓二郎（編纂主任、旧松代藩士）については注記11）を参照。

41）秋野太郎（1859－1940）、水内郡長野村（現、長野市）の生まれで、善光寺大勧進家来長野県学校を経て長野県師範学校に入学。卒業後は師範学校に勤務、後、官立東京体操伝習所別科を卒業。県内の各小学校の訓導を経て、上田、松代の校長を歴任。研究する教員の模範で、『信濃教育』に発表した論文は26編。前掲、『長野県歴史人物大事典』（21頁）その他を参照。

42）鈴木良之助、誕生地も生没年月日も不詳。『象山全集』の編纂委員に委嘱される人物故に、教育者で信濃教育会の会員、または松代町に関わりの深い人物と思われる。

43）『信濃教育』の「象山先生五十年祭記念号」（1913年11月刊行）、131頁。

44）同上、『信濃教育』31頁。

45）初版『象山全集』下巻の巻末「象山全集跋」及び特集号『象山先生五十年祭記念号』131頁を参照。なお、雑誌『信濃教育』の「象山先生五十年記念号」（大正２年、1913年11月）では、「大正二年十月三十日、本県師範学校内に臨時総集会を開き、象山先生五十年祭並に記念講演会を開催す」と同書131頁の「象山先生五十年祭」に記されている。

46）同上：『信濃教育会九十年史』（下巻）、257頁。

47）注記：具体的な執筆者の名前と肩書き。

本文中に記載した演者の他に、例えば長野県師範学校・精軒学人「易と象山」、菅稜威彦「象山佐久間先師の逸話」、千水郎「象山先生五十年祭」、常松麗三「佐久間象山先生の事蹟に就いて」、秋野太郎「赤倉日記抄」。また「雑録」の中には「加藤弘之氏の書簡（再録）」という文章が紹介されており、それは象山が江戸松代藩邸から木挽町に私塾を移して独立学舎を構えたときの私塾の構造（敷地400坪、住居200坪、練兵控所20坪）や象山先生の和漢洋の書籍が置かれた書斎の様子、母親を含む家族の旧居でもあったこと、門人は西洋砲術だけではなく医学生なども在籍していたこと、等々を記している。

なお、加藤弘之は書簡の最後に「先生は漢学に於ては杉田成卿の師にして蘭学に於ては杉田の門人なり」と記載している。その杉田成卿（1817－1859）とは、回想録『蘭学事始』（1771）で有名な杉田玄白（1733－1817）の孫。彼は、嘉永６年（1853）のペリー来航時には、アメリカ大統領の国書を翻訳した蘭学の大家である。幕府天文台役員や蕃書調所教授を務めたが、西洋砲術書の翻訳紹介、蘭和辞書の編纂など西洋文化の摂取に多大な貢献をなした洋学者。象山を評価し深い親交を結んだ。

48）同じ象山門人でも日本近代化過程における進路や活躍は実に様々であった。政治改革

に一身を捧げた吉田松陰（長州藩）や坂本龍馬（土佐藩）、「日本弘道会」を創設して国民道徳の振興に尽力した啓蒙思想家の西村茂樹（佐倉藩）、洋学研究をもって幕臣に昇進、維新後は新政府の官僚、政治家として活躍した啓蒙学者の津田真道（津山藩）。福澤諭吉、森有礼、中村正直などと共に「明六社」を結成して日本の文明開化を推進した加藤弘之・西村茂樹・津田真道、日本の教育近代化に後進国型のドイツモデルを紹介し英米の最新教育情報を提供した「米百俵」の主人公・小林虎三郎（長岡藩）、維新政府の法曹界で大審院検事長にまで出世した渡辺驥（すすむ、松代藩）、明治３年（1870）に日本最初の活版印刷所「日就社」を設立して「英和字彙」を印刷・出版し、同年の日本最初の日刊新聞「横浜毎日新聞社」の創刊にも関わって編集長となった子安峻（大垣藩）。彼は、同７年（1874）には「讀賣新聞」を創刊し初代社長に就任した。

他にも中央・地方の各界で活躍した象山門人は数多くおり、同じ象山門人でも日本近代化への関わり方と貢献の仕方は多種多様であった。特筆すべきは司法省関係に進んだ門人が多く、陸軍省や海軍省などの軍部関係に進んだ者は意外と少なかったことである。

従来の洋学史研究の性格を巡って、幕末期における海防（国防）という軍事的契機で全国諸藩の武士層に西洋軍事科学系洋学（西洋砲術・西洋兵学、それに関連する化学・数学・物理学・地理学、等々）が普及拡大したことは、日本における洋学の意味や役割の大きな転換期を迎えたことを意味した。だが、在村蘭学、特に医学を中心とする蘭学の地方への普及拡大は、幕末維新期だけでなく明治以降の近代日本における洋学受容に連続する歴史的な現象であると主張し、逆に幕末期の西洋軍事科学系洋学とその明治以降における普及拡大を非連続的・否定的に捉える田崎哲郎氏を中心とする「在村蘭学グループ」の見解は、余りにも在村医学という狭い洋学の民生的受容に偏っている。例えば田崎哲郎編『在村蘭学の展開』思文閣出版、1992年、「はじめに」。同グループの青木歳幸氏も同様であり、詳細は『在村蘭学の研究』（思文閣出版、1992年）の「まえがき」に示された見解などを参照されたい。

本稿が示したごとく、確かに象山塾への入門動機は圧倒的に軍事的なものであった。それは、彼等の多くが武士階層に位置づく国防的責務を、当然、担うべき任務であるとの武士道的自覚によるものであった。だが、彼等は、入門後、西洋軍事科学系洋学の精緻な技術と理論を修得する過程で、西洋近代科学の偉大さを知ったのである。それ故に彼等は、単なる軍事的技術の習得を超えて、科学技術の背後にある近代諸科学に目覚め、その専門分野の学問探究に向かっていくことになるわけである。そうした彼等は、結果的には、明治維新後における学問文化の諸分野における先駆的な役割を担い、日本近代化の各専門分野で指導的役割をはたしていくのである。学問へのインプットとアウトプットは決してイコールではない。それ故に、インプットをもってアウトプットの無限性を否定することはできないのである。

49）『信濃教育』特集号『象山先生五十年祭記念号』所収の加藤弘之「加藤博士の書簡」（99－100頁）、および加藤弘之講演「象山先生につきて」（同誌21－23頁）。直接に象山から西洋の学問技芸（西洋近代軍事科学やその背景にある近代科学）の教授を受けた門人であることの体験的経験から、加藤による象山の学問や人格の体験的理解をリアルに表現しており、それは象山の書簡その他の文面や後世の風評による表面的理解による象山像ではない。

50）51）52）53）54）同上、『信濃教育』特集号「象山先生五十年祭記念号」22頁。

55）同上、『信濃教育』特集号「象山先生五十年祭記念号」22頁。中津藩奥平家の上屋敷は江戸木挽町汐留（現在の中央区銀座８丁目）、中屋敷は「慶應義塾発祥の地記念碑」

のある聖路加国際病院（現在の中央区明石町９丁目）近辺、下屋敷はホテルパシフィック東京左脇の柘榴坂の近辺（現在の港区高輪４丁目）。

加藤弘之の証言は、中津藩の西洋砲術師範を依頼された象山は、自宅兼私塾のある木挽町から中津藩下屋敷のある二本榎（現在の東京都港区高輪２丁目）まで、「西洋鞍の馬で通っていた」ということである。江戸に洋学者は多かったけれど、象山のように黒船来航前から西洋スタイルの乗馬姿は他になく、したがって、幕命を受けて上洛した象山は、山階宮や中川宮、一橋慶喜や将軍徳川家茂に拝謁して廻る際も、江戸での「西洋鞍での乗馬スタイル」を通していたのである。

56）大平喜間多著『佐久間象山逸話集』（信濃毎日新聞社、1933年）。いつの時代にも、人間理解とは難しい。人間の発言や行動を取り上げてみても、それを発する当人の心中に働く自然性や正統性が、外側から他人の言葉や文字という外的情報から形成される心象形成に基づいて奇抜性や異常性と判断され理解される場合も多い。正に佐久間象山の場合は、象山自身の意図や動機と、受け手の側における心象や理解のギャップが非常に大きく、誤解と中傷を惹起する典型的な人物であったとみられる。

彼の傲岸不遜な態度や強烈な自己主張、あるいは側室を巡る女性観の問題、等々の反面、門人に対する教育愛の深さ、先輩・友人に対する友愛の情、家族一人ひとりに対する愛情表現の豊かさと寸暇を惜しんでの書簡の執筆、日本の開国和親、学問の公開制、洋学普及のための辞典の編纂、優秀な若者を欧米に国費留学させ優秀な欧米の学者技術者を招聘すること、国民皆学と女子教育の必要性、等々について、当時の時代感覚や慣習などの背景要因を踏まえて理解すれば、そうした象山の日本近代化を先取りした先駆性の偉大さは、問題なく説明することができる。叙上のような象山の人間性のアンビバレント（ambivalent）な両面性の問題を、筆者はかねてより「Cool Head but Warm Heart（冷静な頭脳と温和な心情）」と理解している。歴史上の人物で、取り分け賛否の分かれる象山の人間性の問題に関しては、別に論じる予定である。

57）大平喜間多著『佐久間象山逸話集』（信濃毎日新聞社、1933年）46頁。

58）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』74頁。

59）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』96頁。

60）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』96頁。

61）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』98頁。

62）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』74頁。

63）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』303頁。

63）同上、大平喜間多著『佐久間象山逸話集』299頁。

64）坂本保富「象山の思想基盤形成における父親の武士道教育の意義－幕末期における「東洋道徳・西洋芸術」思想成立への主体性形成－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第22巻第１号、2017年11月）。

65）降旗浩樹氏は、論文「佐久間象山の顕彰活動について－佐久間家法要帳の分析を中心に－」（松代文化施設等管理事務所「研究紀要」第25号所収、2011年）において、「佐久間家に残された明治十一年（一八七八）から明治二十二年（一八八九）までの五冊の法要帳」を詳細に分析され、記載人名を、①旧松代藩士（41名）、②旧松代藩士以外（26名）に分類し、弔問参列者を一覧表にまとめられた。なお、この一覧表によって、最も多い旧松代藩士の参加者をみると、その内訳は報恩心の厚い門人たちとその親類縁者、それに象山を歴史的偉人として崇敬する第三者たちであった。

66）前掲『信濃教育』特集号「象山先生五十年祭記念号」、22頁。

67）同上、22頁。
68）象山を刺殺した中心人物は河上彦齋（熊本藩士）と言われているが定かではない。
69）長州と土佐が象山招聘の使者を信州に送ったことは事実であり、文久２年（1862）12月、長州藩が山形半蔵・久坂玄瑞を、土佐藩が象山門人の衣斐小平・原四郎を信州松代に蟄居中の象山の下に遣わし、自藩への招聘を試みた（増訂版『象山全集』第１巻81頁）。
70）前掲『信濃教育』特集号「象山先生五十年祭記念号」、22頁。
71）象山は元治元年（1864）に京都で惨殺されるが、何とその４年後には明治維新を迎えるのである。『日本人物文献目録』（平凡社、1974年、明治初年から昭和47年までの作品を収録）によると、没後の象山に関する著書、論文などの刊行状況は、著書・論文合わせて163点である。その内で刊行の早い明治期の作品（著書、論文）も多く、刊行の早い時期の代表的な著書を挙げれば次の通りである。

①花岡以敬『佐氏遺言』Ⅰ，Ⅱ集（和田義章、明治14－17、1881－1884年）
②松村操『山陽言行録・象山言行録』（兎屋誠、明治15、1882年）
③清水義壽・市川量造『信濃英傑　佐久間象山大志伝』（明治15、1882年）
④松本好忠編『象山翁事蹟』（２巻２冊、兎屋誠、明治21、1888年）
⑤斎藤丁治『象山松陰慨世余聞』（丸善商社書店、明治22、1889年）
⑥林政文『佐久間象山』（開新堂、明治26、1893年）
⑦小此木秀野『佐久間象山』（裳華房、明治32、1899年）
⑧干河岸貫一『近世百傑伝』（博文社、明治33、1900年）
⑨石黒忠悳『況翁叢話』（民友社、明治34、1901年）
⑩山口勇雄『象山先生桜賦』（山崎儀作、明治36、1903年）

上記の他にも山路愛山『佐久間象山』（東亜堂、明治44、1911）などがあり、著書だけでも明治期において多数、出版された。これに雑誌類に発表された象山関係の論文も、宮本仲「佐久間象山先生」（『日本及日本人』第553号、明治44、1911年）、「佐久間象山先生の訓戒」（筆者不明、『同志社文学』第16号、明治26、1893年）など多数、発表されている。このような象山に関する著書・論文類の刊行は大正時代においても衰えず、さらに昭和戦前期に急増する。

上記の作品とは別に象山門人たちが象山思想の継承と顕彰を目的に刊行した書物もある。最も早いのは、勝海舟、北澤正誠、小林虎三郎などの門人たちが、明治４年(1871)にまとめて記念出版した象山の代表的作品『省譽録』（和装本、聚遠楼蔵）であった。この『省譽録』の草稿は、門人の吉田松陰の海外密航事件で同罪となり江戸伝馬町の牢獄で書かれたものである。それが、象山歿後８年目に、和装本で出版された。門人代表の勝海舟の「序」、全体の編集作業は北澤正誠、最終的な校正を小林虎三郎が担当した。同書は、その後、様々な版元から出版されて、幕末明治以降の近代日本人の思想形成に大きな影響を与えた書物である。

次に出版された作品も象山自身の漢詩集（上下２冊、親友の中村正直の校訂）で、明治11年（1878）２月の刊行であった。本書も『省譽録』と同様に、象山自身の漢詩文の作品を著書にまとめ、勝海舟をはじめとする門人たちの恩師に対する報恩と顕彰を表現した特別な作品であった。本書の巻頭には、象山が死の直前最後まで親交の深かった二品宮親王（山階宮晃親王、1816－1898）の「序」が掲載され、続いて全体を統括した門人代表の勝海舟の「序文」が載せられている。本書全体の編輯を担当したのは北澤正誠、

校正を担当したのが「米百俵」の主人公の小林虎三郎（炳文）と読売新聞社を創立した子安峻であった。そして版元は、子安が出版社を創業して日本最初の『英和字彙』の刊行を図るべく創立した活版印刷会社「日就社」（現在の東京銀座１丁目）であった。

なお、同書は漢学者象山の漢語学の実力を象徴する難解な漢詩文集である。収録作品の漢学の最終校正を担当したのは、昌平黌儒官で佐藤一斎門下の同門親友であった東京大学教授の中村正直であった。彼は、『西国立志編』（サミュエル・スマイルズの“Self Help”を明治３年（1870）に翻訳、別訳名『自助論』）の訳者で英語に優れた英学者として知られる。だが、彼の専門は「漢学」であり、佐藤一斎門下でも象山と並ぶ漢学の実力者であった。象山は存命中から中村と親交が深く、象山は親子ほども年齢差のある中村の実力を認めて尊敬していた。その中村が、象山の漢詩文集の刊行に際して、漢文作品の全面的な校正を引き受けたのである。

さらに、第三者による象山に関する伝記や研究書としては、筆者所蔵の作品では、①蒲生重章著『佐久間象山傳』（『近世偉人傳』三編の内の１編、刊行1879年）、②清水義壽『信濃英傑　佐久間象山大志伝』（上下２巻本、1882年）、③松村操『山陽言行録・象山言行録』（兎屋誠、1882年）、④山路愛山『佐久間象山』（東亜堂、1911年）、等々が明治期に刊行された作品である。

特に信濃毎日新聞の主筆を務めた本格的な評論家・歴史家である山路愛山（1865－1917）は、幕末動乱の時代を共生した象山を敬愛し、本格的な佐久間象山論である『佐久間象山』を執筆した。この山路の作品が出るまでの明治期には約20点を数えるほど多くの象山関係の書物が出版されている（前掲『日本人物文献目録』472－473頁）。

多くの象山門人が生存し、知人友人なども活躍していた明治時代には、様々な観点から描いた象山研究書が出版された。だが、不思議なことに、象山の門人の実態の分かる書物は全く見当たらず、したがって「及門録」という名称の門人帳資料に関する情報も全く知るよしはなかった。

しかし、本文で詳述した通り、門人の北澤正誠（1840－1901）が明治34年に他界するまでには、不思議にも幾種類かの象山門人帳史料の写本「及門録」が関係者の間に出回り、その一種である北澤所蔵の写本「及門録」が存在し、彼の没後、親族によって京都帝国大学附属図書館に譲渡されていたのである。

明治以降に刊行された象山に関する著書・論文の数は膨大であり、それらの作品の問題意識や分析視角も実に様々であった。だが、そこには多くの象山関係者や読者の関心を満たせない重大な研究課題が欠落していた。それが象山門人の実態を解明をした門人帳の不在であった。そのような問題状況の下で、少なくとも北澤が他界する前の明治中期までには、象山門人帳史料としての「及門録」が作成され、幾種類かの写本が出回ったということである。写本版「及門録」の回覧によって門人など一部の人々は象山門人帳「及門録」の存在を知りえたであろうが、一般の日本人が、それを知りえたのは、全国誌である『東洋学芸雑誌』に掲載された井上哲次郎の論文「佐久間象山及門録に就いて」（大正３、1914年）であり、そして昭和７年（1932）に出版された宮本仲の大著『佐久間象山』（「及門録」を収録）によってであった。

なお、明治27年（1894）という早い時期に、青木貫之進編『女訓』（東京・長島父昌堂）が刊行されているが、同書は象山門人の青木真隆（「訂正及門録」に記載ナシ）とその嫡男の青木士亮の標注・校訂で出版された象山自身の著書である。象山関係書籍の中にあっては異色の内容の同書の刊行には、門人の勝海舟、西村茂樹をはじめ、女学校関係の細川潤次郎（華族女学校長、女子高等師範学校長）、旧松本藩士の辻新次（大日本

教育会長)、華族女学校教授の浅岡一（二本松藩出身で長野師範学校長）など、錚々たる有名人が連名で支援し推薦した特異な著書であった。同書は、象山が、アヘン戦争が勃発した天保11年（1840)、30歳の時に著した先駆的な女子教育論であり、刊行されたのは女子の中等教育の重要性が叫ばれる日清戦争勃発時の明治27年（1894）であったのである。

72) 前掲、『東洋学芸雑誌』第31巻第398号所収の井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」、大正３年11月。同書491頁。

73) 前掲、坂本保富「佐久間象山門人の確定に関する先行研究の検討（Ⅰ）－井上哲次郎・宮本仲の紹介した『及門録』の分析－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第23巻１号、2019年２月)。

74) 前掲、『東洋学芸雑誌』第31巻第398号所収の井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」、大正３年11月、同書491頁。

75) 井上と交流のあった象山門人については、象山門下の同じ東京帝国大学の先輩教授たち、初代総長の加藤弘之、津田真道、あるいは象山と親交の深かった中村正直などがいた。

76) 宮本仲の講演は長時間に及び、活字に起こすとＡ４判２段組の『東洋学芸雑誌』で29－50頁を占め20頁を超える分量であった。

77) 象山の思想形成に強い影響力を与えた要因として父親による文武両道の教育を挙げることが出来る。この点に関する筆者の詳細な分析結果は、前記、拙稿「象山の思想基盤形成における父親の武士道教育の意義－幕末期における「東洋道徳・西洋芸術」思想成立への主体性形成－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第22巻第１号、2017年11月）を参照されたい。

78) 同上、拙稿「象山の思想基盤形成における父親の武士道教育の意義－幕末期における「東洋道徳・西洋芸術」思想成立への主体性形成－」を参照されたい。

79) 前掲、『信濃教育』の「象山先生五十年祭記念号」1913年11月、29頁。

80) 前掲、拙論「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅴ）－」（平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第２号、2015年３月）も参照されたい。

81) 明治初年から昭和41年までに刊行された人物研究に関する著書・論文などの研究文献は、『日本人物文献目録』（平凡社、1974）にまとめられているが、そこでは佐久間象山関係の文献は全集・著書・論文を合わせて合計163点を数える。昭和42年以降、さらに象山研究は進められ、研究成果は200点をはるかに超えたものと推察される。筆者は、没後の時代と共に展開されてきた象山研究史の意図や特徴の変遷を考察をする予定である（仮題：『近代日本の歴史的位相と佐久間象山研究の変容』)。

82) 宮本仲著『佐久間象山』増訂第二版、「第二刷序」。なお、宮本仲に関しては、梅原逞著『秀でた遺伝子－佐久間象山と宮本家の人々－』上巻を参照させていただいた。同書は、評伝ではあるが、宮本仲をはじめ宮本一族の人々に関する知識が非常に豊富で、それらの資料を駆使して書かれた評伝の文章も内容も、極めて上質のクオリティを担保し、非常に有益な参考文献となった。感謝の意を記しておきたい。

83) 前掲、拙稿「佐久間象山門人の確定に関する先行研究の検討（Ⅰ）－井上哲次郎・宮本仲の紹介した『及門録』の分析－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第23巻１号、2019年２月)。

84) 増訂版『象山全集』第１巻「凡例」より引用。

85)「西山敏一」に関する経歴や業績などの一切が不詳。編纂委員あるいは援助依頼を受けた次の３名の方々の履歴や職歴も全く不明である。ご存じの方がおられたらご教示をお願いしたい。
86)「宮下忠道」、履歴や職歴など一切が不明。
87)「宮坂　亮」、履歴や職歴など一切が不明。
88)「小宮山太郎」、履歴や職歴など一切が不明。
89) 前記の注記11) を参照。
90) 前記、信濃教育会更級教育部会埴科教育部会編輯発行『更級郡埴科郡人名辞書』、信濃毎日新聞社、1939年、同書470－471頁。
91) 信濃教育会会長である佐藤寅太郎編纂委員執筆の「増訂象山全集序」(第１巻の冒頭に所収)。
92) 同上、増訂版『象山全集』第１巻の「序」冒頭に所収。
93) 同上、増訂版『象山全集』第１巻の「凡例」の第２項。
94) 宮本は、ドイツ留学から帰国後、東京神田雉子町（後の小川町１丁目）に内科小児科を門とする宮本医院を開設して西洋最新医学を臨床実践した。が、診療以外の空き時間の全てを、生涯に亘って象山研究に注いだ。なお、彼は、医院を開業のまま、東京帝国大学医学部教授も兼務したと言われるが（以上は、前掲の村上徹論文「医学史こぼれ話—どこか可笑しな明治の偉人たち－」、『東京医科歯科大学群馬縣同窓会会報』第26号)、管見の限りでは、それを事実として裏付ける史料は認められない。

なお、仲の嫡男の「宮本璋」(1897－1973) もまた東京帝国大学医学部を卒業後、ドイツ・ベルリンに留学し、オランダ出身の物理学者・化学者ピーター・デバイ（Peter Joseph William, Debye、1884－1966、1936年のノーベル化学賞受賞者）に師事して生化学を学び、帰国後は東京帝国大学医学部生化学助教授として活動する。専門は電気泳動学や農村医学であるが、その後、彼は主任教授と衝突して東京帝国大学を辞職し、ジャカルタ医科大学を経て東京医科歯科大学教授に迎えられ医学部長などを務めた(『東京医科歯科大学群馬縣同窓会会報』第26号、村上徹「島峰徹とその時代－燃上する医・歯一二元論論争、死、大日本帝国の崩壊－」、群馬県歯科医学会編『群馬県歯科医学雑誌』2015年、等々を参照)。

父親の仲の象山研究一筋の生き方をみて育った璋もまた、父親の敬愛する佐久間象山に強い関心を抱き、医学の旁ら象山研究に励み、象山研究論文を発表するに至る。管見の限りでは、次の３編の論文を『日本医事新報』に一挙に連載している。

①「佐久間象山の洋学に就いて（未定稿)」(上)(『日本医事新報』第646号、昭和10年１月19日発行。Ａ４判５段44行組、１行18字で3.2頁)
②「佐久間象山の洋学に就いて（未定稿)」(中)(『日本医事新報』第647号、昭和10年１月26日発行。同2.5頁)
③「佐久間象山の洋学に就いて」(下)(『日本医事新報』第648号、昭和10年２月２日発行。同4.5頁)

上記の３編の論文だけでも、約４万字に及ぶほどのまとまった分量で、内容的にも日本有数の医学者、化学者であった著者の専門性を活かして、象山の洋学領域に関する業績の具体的な分析と評価が研究の中心課題となっている。著者は、「私の父が、『佐久間象山』と云ふ本を出した時、手伝はされて原稿を何遍も読んでゐる間に、科学に関す

る項に興味を持つたと云ふのが機縁。」（論文①の187頁）と述べ、父親で医学者である宮本仲の象山研究の影響、特にその成果である大著『佐久間象山』（岩波書店、1932年）の手伝いを契機として象山研究に向かったと述べている。

したがって彼の論文の内容は、象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想に集約される際の「西洋芸術」に関する翻訳書や知識技術の分析と、その受け皿となっている「東洋道徳」の思想的な本質や意味の検討が、具体的な象山関係史料を挙げて綿密になされているが、特に同思想が成立する過程を重視した形成史的観点から吟味されている。特徴として指摘すべきは、彼の論文が象山個人に終始せず、当時の日本の洋学者たち（宇田川榕庵、平賀源内、大槻玄澤、渡辺崋山、大槻盤渓、伊東玄朴、杉田成卿、下曽根金三郎など）の場合との比較考察を通して探究している点である。

これまでの象山研究史上において宮本璋の論文は、存在自体が知られず、全く看過されてきた作品である。今後の象山研究、とりわけ「西洋芸術」の具体的な分析と理解に関して、当時の日本を代表する医学者であり化学者であった「宮本璋」の研究成果に着目し、これを活用すべきであると考える。

95）現在、存在を確認できる全ての「及門録」を比較校合すれば、相違点や問題点が一目瞭然となる。筆者は、この作業を進めてきたのである。

96）前掲、増訂版『象山全集』第５巻所収「訂正及門録」の冒頭に掲げた「注釈文」。

97）何故に象山関係史料が京都帝国大学附属図書館に収められているのか。その経緯を解明したのが、小林計一郎論文「京都大学図書館所蔵佐久間象山史料」（長野郷土史研究会機関誌『長野』第177号を参照）。なお、門弟北澤正誠が京都帝国大学図書館に伝えた「及門録寫本」も「原本」ではなく、門人等が後世において作成した「作品」の「写本」（毛筆和綴版）であることは、前掲の拙稿「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）－京都帝国大学附属図書館所蔵「及門録」の内容と問題点－」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年３月）で京大版「及門録」の写真版そのものを提示し、逐条的に全体を分析し論証したので参照されたい。

98）信濃教育博物館所蔵の毛筆写本の「及門録」、詳細は拙稿「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅱ）－信濃教育博物館所蔵「及門録」の内容と史料的意義－」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年３月）を参照。

99）増訂版『象山全集』第５巻に所収の「訂正及門録」が、「どの流布本」を「底本」として「訂正」を試みたのかは、全く説明されていない。ただ、終始、「及門録の原本は所在明ならず」との弁明のみである。

100）他塾の具体的な門人録の記載様式や記載内容に関しては、幕末期の代表的な私塾の門人帳である下記の史料を参照されたい。

・緒方洪庵（1810－1863）：蘭学塾「適々斎塾」
→門人帳史料「姓名録」（緒方富雄『緒方洪庵』岩波書店、1963）
・伊東玄朴（1801－1871）：蘭学塾「象先堂」
→門人帳資料「門人姓名録」（伊東栄『伊東玄朴伝』玄文社、1916年）
・下曽根信敦（1806－1874）：西洋砲術塾
→門人帳資料「西洋砲術門人一覧」（坂本保富『幕末洋学教育史研究』高知市民図書館、2004年）

※下曽根の私塾全体の門人録は存在しない。それ故に下曽根塾の門人の全体像（普及の過程と範囲）は全く不明であった。ところが、初期の下曽根門人であった土佐藩の徳弘孝蔵（1807－1881）が下曽根塾の毎回の砲術練への参加者門人を記

録した膨大な史料　土佐藩「徳弘家資料」（高知市民図書館所蔵）が発見された。筆者は、10数年を費やしてその「徳弘家資料」を整理・分析して、下曽根門人の名簿を作成したのである。これによって西洋砲術の開祖である高島秋帆から秘伝を受けた江川、下曽根の両塾における西洋砲術の教授内容と具体的な門人の実態が解明でき、高島流西洋砲術の普及拡大過程を知ることができることとなった。詳細は、坂本保富『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館、2004年２月）を参照されたい。

・江川坦庵（1801－1855）：西洋砲術塾
→門人帳資料「御砲術簿」（大原美芳『江川坦庵の砲術』、静岡県出版文化会、1987年）

101）前掲、増訂版『象山全集』第５巻に所収の「訂正及門録」の冒頭の「注釈文」。

102）前述の注記（25－31）で、象山門人に関する具体的な先行研究を列挙したが、その中でも特に全集版「訂正及門録」を、あたかも象山門人帳の原本であるかのごとくに扱って内容分析し象山門人を析出した先行研究としては、板沢武雄著『日蘭文化交渉史の研究』（吉川弘文館、1959年）、片桐一男「蘭学者の地域的・階層的研究」（『法政史学』第13号、1960年）、海原徹『近世私塾の研究』（思文閣出版、1983年）をあげた。

103）「訂正及門録」の中には、嘉永２年以前の入門者、あるいは西洋砲術以外の洋学・儒学・医学などの学習者が混在しており、同史料が「嘉永二年」から「安政元年」に至る期間の「西洋砲術門人帳」であるとはいえない。例えば、従来は象山が西洋砲術の入門者を受け入れて繰練を始めたのは嘉永３年（1850）から松代藩深川藩邸でのことと理解されてきた（増訂版『象山全集』第１巻「年譜」45頁。大平喜間多『佐久間象山』（吉川弘文館、1959）の「砲術教授」85頁など）。だが、象山が大砲を鋳造し、それを門人たちと試演したのは嘉永元年（1848）からであることが確認できる。その例証として、①嘉永元年２月22日（ヵ）書簡「山寺源大夫に送る」（増訂版『象山全集』第３巻、425－426頁）には、すでに嘉永元年には門人がいて、西洋砲術試演の実施日を決めて行っていたことが、下記のように記されている。

「二五八の日に演武子弟参り候所、暫く令郎御見え不被成、御不例にても候歟と無心許奉存候（中略）御事故も無之候はゞ御出御座候様奉存候（中略）原書の真形を以てホウキツルモルチールを鋳立申候。大分よく出来申候。彈をも引続き為造候てカノンと一同に打試申度候。右には火薬も余程費え申候へば早く申附候方都合宜しくと奉存候。」　（増訂版『象山全集』第３巻、425－426頁）

また、下記の史料②「佐久間象山先生年譜」（増訂版『象山全集』第１巻「年譜」48頁）にも、弘化４年（1847）から嘉永元年（1848）にかけて、藩命で西洋型の野戦砲や天砲を鋳造し、これを松代西郊の道島で門人たちと試演していたことが記されている。

「前年より本年に亘り藩命により十二拇人砲三斤野戦砲十三拇天砲を鋳る。地砲は蘭人ペゥセルに拠り人砲天砲はブランドルの書により推算工夫せるものなり。これにより松代の西郊道島に於て之を試む。」

104）象山は、洋学の学習者にも洋学受容の主体形成という観点から受容基盤となる基礎教養として儒学を学ばせていることを塾教育の基本方針としていると言っている。しか

し、逆に儒学の学習者に対しても洋学－西洋砲術・西洋兵学などの西洋軍事科学を兼学させているとは述べていない。

象山塾は西洋砲術・西洋兵学を教授する西洋軍事科学系洋学塾とみられがちであるが、その実は、西洋軍事科学以外にも、西洋医学、洋学（蘭学）、儒学、医学などを学習目的とする塾生も存在したのである。儒学の学習者が西洋科学を学ぶこと、あるいはその逆の場合も、自分の学ぼうとする学問を異なった次元や視座から学ぶことは「学習の新奇性（novelty）」が担保されることになり効果的であると評価することができる。

105）前掲、増訂版『象山全集』第５巻761頁。

106）同上、増訂版『象山全集』第５巻761頁。

107）同上、増訂版『象山全集』第５巻所収「訂正及門録」冒頭の「注釈文」。

108）門人名の冒頭に付した「No.」は、「訂正及門録」の最初（嘉永２年）の「白井平左衛門」を「No. 1」としてはじまる増訂版『象山全集』所収の「訂正及門録」に記載された年次別記載の門人の全体を一覧化したものであり、本文に提示した「佐久間象山門人史料「及門録」の比較一覧」における門人記載の処理番号と同一である。

109）「No. 357　土州　古田小膳」という記載は、同じ土佐藩門人である「廣田善助」と「寺村左善」（「No. 333　加村左膳」、「寺村」を「加村」と誤記）の混乱（記憶違い）から生じた誤った門人名と考えられる。

110）松代藩の家中には「松」という一文字姓の藩士は存在しない（注記：国立史料館編『真田家家中明細書』東京大学出版会、1986年）。それ故に「松　金太郎」は「松木源太郎」（同前『真田家家中明細書』289頁）の誤記と考えられる。しかし、断定するに足る史料的根拠が弱く、本稿では「松　金太郎」を「松木源太郎」と同一人物と断定することはせず、したがって「松木源太郎」を「三重出」として扱わず、「二重出」として処理した。

111）前掲、「青木歳幸氏の京都大学附属図書館蔵『及門録』の解読紹介とその誤謬－象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅳ）－」。

112）「川勝」は幕末期の旗本「川勝丹波守」（広運、通称は「縫殿之助（1828－1875）」）のことであり、この川勝兄弟（恆五郎、光之助、縫殿之助）や彼らの家臣たちが象山塾に同時入門していることが分かる。

113）熊井保編『江戸幕臣人名事典』（新人物往来社、1997年）第１巻を参照。

114）京大版・信教版・歴博版などとの比較校合によって、増訂全集版「訂正及門録」における「訂正」の有効性を示している。

115）高島秋帆門人の旗本・下曽根信敦（1806－1874）の門人であった土佐藩砲術師範の徳弘孝蔵（1807－1881）が書き残した西洋砲術に関する土佐藩資料「徳弘家資料」。その「徳弘家資料」を内容別に分類して整理し「資料目録」にまとめたものが高知市民図書館蔵「徳弘家資料－資料目録並びに解題」（信州大学坂本保富研究室平成13年度研究報告書、2002年３月）である。

116）土佐藩「徳弘家資料」を中心として幕末期の軍事科学系洋学の受容と展開の過程を実態分析した筆者の幕末洋学教育史研究の成果は、前述の『幕末洋学教育史研究』として刊行された。

117）今泉省三『三島億二郎伝』（覚張書店、1957年）、同上の坂本保富『幕末洋学教育史研究』及び坂本保富『米百俵の主人公　小林虎三郎－日本近代化と佐久間象山門人の軌跡－』（学文社、2011年）を参照。

118）象山研究者の医学博士「宮本仲」の名前「仲」の読み方を、これまでは「なか」と

読んできた（前述の『更級郡埴科郡人名辞書』では「仲」に「チウ」とルビを施している）。だが、事実は「なかつ」と読むことを、村上徹論文「医学史こぼれ話－どこか可笑しな明治の偉人たち－」（『東京医科歯科大学群馬縣同窓会会報』第26号）で教えられた。

なお、下記の梅原逞の評伝『秀でた遺伝子－佐久間象山と宮本家の人々－』（上巻）の一節から、「宮本仲（なかつ）」と息子の「宮本璋（あきら）」（1897－1973、医学者・生化学者、東京医科歯科大学名誉教授）の関係、そして父親の宮本仲がいかに著書『佐久間象山』の刊行に精魂を傾けていたかを知ることができる。

「璋の父親で、小児科と内科の開業医でもあった宮本仲（なかつ）の余命が、この時にあと半年程とした宣告を受けたからである。しかも璋は留学直前の九月に、突然にそれを知ることになった。仲は余命宣告を受けた此の年に、七十八歳の高齢となっていた。十年以上も前には既に開業医を辞め、それからの日々は一冊の本を書き上げるのに、凄まじい気迫と執念を持って執筆を続けていたのだ。しかもその傍らで仲は佐久間象山に関する研究と、遺墨の蒐集に没頭していたのである。仲が七十五歳になった三年前の一九三二年（昭和七年）、岩波書店から念願だった『佐久間象山』を刊行した。」

（梅原逞の評伝『秀でた遺伝子－佐久間象山と宮本家の人々－』上巻）

119）前掲、増訂版『象山全集』第５巻所収「増訂象山全集編纂経過」。

120）前掲の筆者の象山研究の論文の中の①「象山研究史上の問題点－特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って－（上）」（信濃教育会編『信濃教育』第1229号所収、1989年４月）、②「象山研究史上の問題点－特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って－（下）」（信濃教育会編『信濃教育』第1230号所収、1989年５月）、③日本歴史学会編『日本歴史』第506号所収の坂本保富論文「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者－幕末維新期における『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開－」（1990年７月）などを参照されたい。

121）「史料批判」とは、史料の証拠物件としての信憑性・適切性を、内的・外的な批判を通じて究明する作業（平凡社：世界大百科事典第２版／国立国会図書館公式サイト「歴史史料とは何か」：「史料は一つ一つ、歴史研究を行う上での有効性・信頼度（信憑性）が異なり、これを見極める作業を「史料批判」と呼ぶ。文献史料を例にとると、その目安となるものは、その史料を「いつ」「どこで」「だれが」書いたか、の三要素であり「そのとき」「その場で」「その人が」の三要素を充たしたものを「一次史料」と呼び、そうでないものを「二次史料」と呼んでいる。」）。

122）前掲、増訂版『象山全集』第５巻所収「増訂象山全集編纂経過」、761頁。

123）象山門人の北澤正誠が所蔵した「及門録」を含む象山関係史料については、青木歳幸氏の京都大学での調査結果が、「明治36年７月25日に、象山門人で松代藩士北澤正誠（まさなり、明治34年歿）旧蔵資料を北沢敦夫が寄贈した」（青木歳幸「佐久間象山門人帳『及門録』再考」、信濃史学会『信濃史学』第四八巻第七号に収録）と報告されている。これによって北澤の没後２年を過ぎたときに、北澤所蔵の「及門録」その他の象山関係史料一式が京都帝国大学附属図書館に譲渡されたことがわかる。

124）信濃毎日新聞、平成８年７月８日朝刊：青木歳幸「象山門人研究の新視点－京大版『及門録』との出会い－」。

125）前掲、『国立歴史民俗博物館研究報告書第116集』（平成16年２月）に国立歴史民俗博物館の共同研究「地域蘭学の総合的研究」の研究成果として象山門人帳史料「及門録」を収録し公表。

126）坂本保富論文「国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データベース』の誤謬」。叙上の青木氏の「及門録」の研究論文における理解の仕方と問題点に関する筆者の詳細な比較分析による問題点の析出の実際については、別の拙稿「青木歳幸氏の京都大学附属図書館蔵『及門録』の解読紹介とその誤謬」（『平成国際大学論集』第19号、2014年12月所収）及び「国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データベース』の誤謬」（『平成法政研究』第19巻第１号所収、2014年10月）を参照されたい。

127）前掲、小林計一郎論文「京都大学図書館所蔵佐久間象山史料」（『長野』第177号1994の５）。

128）京都帝国大学附属図書館が所蔵する京大版「及門録」は、明治34年（1901）２月に北澤が没した後に京大に移譲されたことは、すでに注記123）に記した。この事実について、青木歳幸氏は京都大学附属図書館で、北澤正誠旧蔵の「及門録」を含む「佐久間象山関係史料」が、北澤没後２年余後の「明治36年７月25日」に寄贈されたという事実を確認されている。

しかしながら、京都帝国大学附属図書館に「及門録」を含む旧北澤所蔵の象山関係史料が存在することが明らかになったのは、信濃教育会が昭和６年（1931）に増訂版『象山全集』を再編纂し刊行することが決定した後のことで、正式には増訂版『象山全集』第５巻（昭和10、1935年）が刊行され、同書に収録された「訂正及門録」の冒頭に「京都帝國大學圖書館に保存せられたる門弟故北澤正誠の傳へたる及門録寫本とも對校し、之を訂正及門録と名づけたるものなり」と明記されたことによる。京都帝国大学附属図書館が所蔵する「及門録」も数ある写本の一冊であり、もちろん同書の正式な史料名に「訂正」などはなく単に「及門録」の記載だけであったことも明らかになる。

したがって、増訂版『象山全集』第５巻に明記された京都帝国大学附属図書館の説明以前には、井上哲次郎論文以下、北澤旧蔵の「及門録」が存在すること自体、全く触れられてはいなかったのである。増訂版『象山全集』第５巻が昭和10年（1935）に刊行され、そこに「訂正及門録」が収録されたときに初めて北澤旧蔵の写本「及門録」が京都帝国大学附属図書館に所蔵されていることが公的に知れるところとなったのである。

謝辞－平成国際大学における最後の論文を書き終えて

本論文は、筆者の平成国際大学における最後の研究作品です。平成国際大学の研究雑誌である『平成法政研究』『平成国際大学論集』『平成国際大学教職研究』『平成国際大学研究所論集』の各誌に、筆者は、平成25年（2013）３月に信州大学を定年退官して、同年４月に平成国際大学に着任してからの７年間に、拙い研究成果である論文の数々を掲載させて頂きました。それら本学の各誌に執筆した論文は合計12編（400字詰原稿用紙で2,500枚超）に達しました。これも一重に大学の研究紀要編集委員会の先生方の理解と支援があったればこその成果でした。

ところで、平成国際大学における筆者の７年間の在職期間中、常に研究資料の入手に多大な助力を注いで下さった大学附属図書館司書の小黒友理様には御礼の言葉もありません。必要図書の迅速な購入はもちろん、江戸時代や幕末維新期に関する古典的な各種の論文や史料を、全国各地の研究機関に依頼してお取り寄せ下さいました。そのような小黒司書の献身的な研究支援に支えられて、筆者は信州大学時代と同様、土日も祭日もなく、夏休みも春休みもなく、愚直に研究を進め論文を書いて参りました。平成国際大学における充実した研究生活の日々は、忘れえぬ想い出となりました。小黒司書には幾重にも御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

また、平成国際大学の各研究誌を印刷して下さる株式会社・関東図書様にも大変お世話になりました。特に平成国際大学担当の営業部・小川智之様には、費用や納期、論文抜刷などの諸点で大変ご苦労をおかけしました。特に私の提案で教職支援センターを新設し、その研究紀要『教職研究』の発刊に関しましては、経常予算が全くなかったために、毎号、大変ご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。特にご苦労をおかけしたのは、同社の校正担当の方々でございます。論文の枚数が一編300枚（約100頁）前後と多く、しかも漢字や外国語、あるいは膨大な分量の図表が多く、煩雑で非常に校正しにくい原稿ばかりでした。そのような拙稿における誤りを遺漏なく的確に発見し校正して下さいました。まさに「校正のプロの心と技」と心から感服致しました。残念ながら校正担当の方々に直接お目にかかる機会はございませんでしたが、いつも感謝の念で一杯でした。ここ

に改めて御礼を申し上げます。

思えば平成国際大学に着任早々、今は亡き先代社長の岩渕綾子様とお付き合いをする機会をえました。以来、主に書簡をもって親交を深め、品位と寛容に満ちた高貴な歌人である社長様から、様々な人間の人間らしい生き方の品性を学びました。叶うならば、平成国際大学の退職のご報告に墓参したく思います。

信州大学を定年退官の時、何校かの大学から招聘のオファーがありました。だが、家内の年老いた東京世田谷在住の両親の介護など家庭の事情もあって、急遽、自宅のある浦和（埼玉県さいたま市）に帰ることにしました。その結果、再就職先も自宅から通勤が利便な平成国際大学に縁あって奉職することになった次第です。

新たな大学でも、良き出会いに恵まれました。聊かのルサンチマン（仏：ressentiment, 恨み辛み）もありましたが、今は全てを水に流して、平成国際大学を辞することができます。これも、新参者である私の様々な大学改革の提案をご理解下さり、その推進の後ろ盾となって下さった堂ノ本眞学長のご高配によるものです。学長をはじめ全ての教職員の皆様、特に教務課・総務課の職員の皆様方の教育研究活動に関する温かいご支援には深く深く感謝申し上げます。

そして忘れてはならないのは、不登校になりがちな私に、いつも勇気と元気を喚起してくれた学生諸君の存在です。スポーツ系の明朗闊達な学生の皆さん方の「先生、頑張って！」という声援を決して忘れません。ありがとうございました。

これからは、平成国際大学の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈りしながら、再び心身の健康を回復し、半世紀近い研究者人生の総仕上げの著作活動（「坂本保富著作集」）に、残り僅かな余命を燃焼させて生きて参ります。お世話になりました。